



102341-000-2

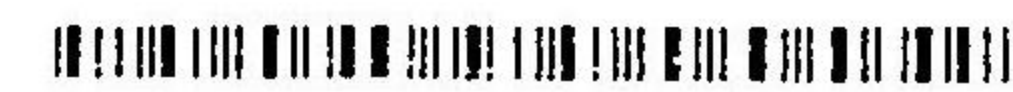
特64-492

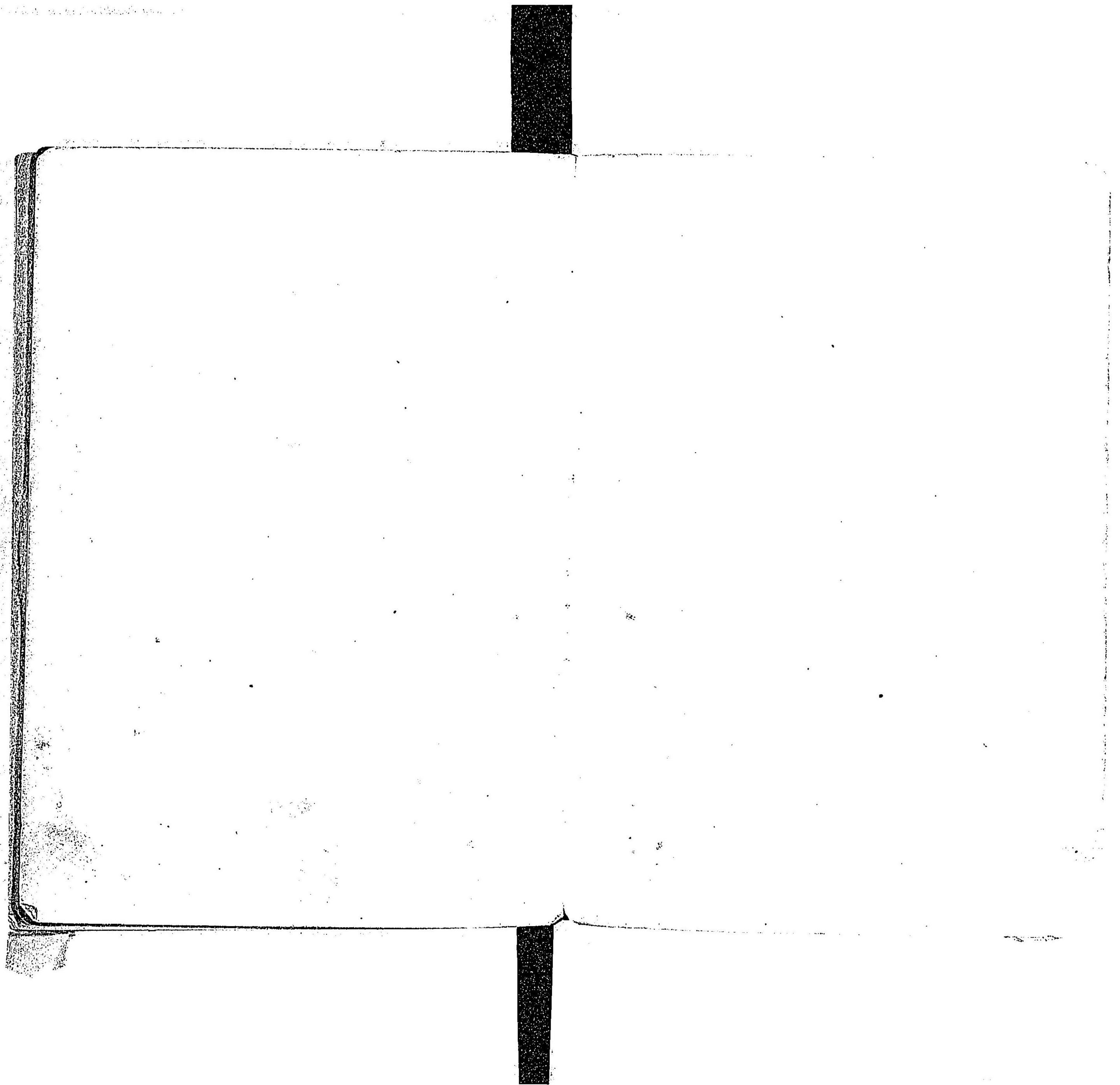
人生と山水

中川 愛氷/編

M38

EAG-0194





492

492

東洋書局

人
生
と
山
水

東
洋

文
學
同
友
會
藏
版

明治
38 5 16
内交

序

詩文の妙ある處は自然事を瞻して人
生の雜事を快觀せしむるにありと聞
く本書を看るに著者はどこまでも詩
仙にして俗物にあらず余れ需に應じ
靜かに一日此文想を候ふ、其行文は
自然を寫し得て應接するの違なく趣

(一) 次 目

人生と山水目次

水仙の巻

賀正	一
年賀状	二
年賀の断り	二
新年の心	三
四季	三
春の感	四
人生の春	四
梅園	五
黄鳥	六
花見	六
花のやさしさ	六

人間四月	七
晩春	七
春光九十	七
五月雨	八
夏の夕	八
夏の快	九
夏の爽味	九
一葉落つ	一〇
隅田川の秋	一〇
秋色	一一
秋郊	一一
遠征の秋	一二
秋夜の涙	一二

味は腦底を滋して人を領かしむ恐らくは激務ある人も此書を読むときは復々雑事を思々するの餘閑なきに至らしめん歟砂礫の讀書界を益する寡しと云はんや題して以て序となす

大月 乗山

目 二)

二百十日	三
團子坂の菊	三
十一月	三
東北の冬	四
歳 晚	四
歳晚の感	四
櫻と桔梗	五
自然の美	五
深夜の星	六
土 筆 の 卷	
樹 木	七
山水秀麗の地	八
深 山	八
關姓の懐古	九
大河の強大	九
村舎の趣味	三〇
旅行の利益	三〇
湘南に嚙遊す	三
東都の風物	三
金龍山の晚鐘	三
芝 浦	三
稚兒ヶ淵	三
早雲寺	三
銚 倉	三
鴻の臺	三
函嶺の嶮	三
一目千本	三
小吉野	三
富士山	三
川中島	三

目 三)

山陰道	六
堇花の卷	
新刊小説	六
明治文學	六
都會の文弱	六
文界の寂寥	六
方今の文壇	六
今日の小説界	六
懸賞文學	六
新文士	六
大詩仙	六
大詩人	六
詩 人	六
詩人の思齋	六
詩と散文	三
書 法	三
大空の美妙	三
美術品	三
美術國の民	三
繪畫の感化	三
教育者	三
俗學者	三
推諷の妙	三
批 評	三
水戸の風教	三
早 蕨 の 卷	
靈魂と五蘊	三
眞理の大海	三

(四)

目

次

神智	四〇	驚愕	四〇
教理家の自信	四〇	迷夢	四〇
到處に真理あり	四一	下夢	四一
道者以日	四一	大悟一番	四一
天行と人生	四二	八面玲瓏	四二
自然と人事	四二	靜動の一致	四二
人と氣運	四三	活動	四三
自己の無盡藏	四三	奮起せよ	四三
各自の好尚	四三	慨然自ら任ず	四三
人心の萎靡	四四	快斷を要す	四三
以心傳心	四四	人間の靈性	四四
我心席にあらず	四四	至誠	四五
滴々の涙	四五	陶玄神祕	四五
一道の光明	四五	品性修養	四五
覺悟	四六	宗教の衰微	四五

(五)

次

目

杜鵑の巻		刺客	五九
英雄豪傑	五三	獵官獵婚の醜	五九
英雄何者ぞ	五三	駙馬	六〇
英雄と小兒	五三	愛嬌の必要	六〇
英雄如狐	五四	各國の婦人氣質	六〇
達人高士	五四	婦人の愛情	六一
偉人	五四	佳人に望む	六一
釋迦	五五	不幸の子女	六一
秀吉と正宗	五六	男女交際の弊	六一
岳飛	五七	駿馬痴漢を戴す	六二
佐野源左衛門	五七	友白髮の幸福	六二
志士	五八	美人	六三
志士の感慨	五八	野心家	六三
志士と憤世	五八	利己の徒	六四

(六)

牡丹の巻

五條の御誓文	六〇
國是	六〇
内閣の變動	六〇
大臣	六〇
對藩閥の不平	六〇
政治家の天爵	六〇
政治家の本領	六〇
少壯の政治家	六〇
政治は一の俗務	六〇
此椅子可惜	六〇
議員	六〇
代議士の責任	六〇
馬鹿議員	六〇

歌竹議員

歌竹議員	七三
選舉	七三
政府黨	七三
烏合黨	七三
多數の制弊	七三
夕立の巻	七三
雨強く降り	七六
濁流を撒く	七六
時	七六
時と夢	七六
潮勢	七六
政機	七六
活機	七六
機變	七六

(七)

次目

機運	八〇
人情の機	八〇
機を制すべし	八〇
廣道	八〇
變幻	八〇
變兆	八〇
一興一亡	八〇
逆境	八〇
霹靂一聲	八〇
風雲急轉	八〇
密雲深鎖	八〇
騎虎の勢	八〇
龍と虎	八〇
龍と驥	八〇
虎耶鼠耶	八〇

藤袴の巻

百獸懼伏	八六
偽君子	八六
忠と貞	八七
正と奸	八七
狡奴	八八
藤袴の巻	八八
乘勢	八九
勢家の末路	八九
士	九〇
隠士	九〇
隠君子	九〇
天爵	九〇
少壯の精神	九〇
氣骨稜々	九二

(八) 目次

本領	九三
名と器	九三
將來の害毒	九三
精力の用	九四
感化力	九四
勢力の豊富	九五
進取と退嬰	九五
古人の工夫	九五
輕薄の世	九六
舉世氣力なし	九六
今人の無氣力	九七
男子の無氣力	九七
優勝劣敗	九八

江戸子	九九
都人士の横着	九九
俠氣と色氣	一〇〇
上州長脇差	一〇〇
財	一〇一
財是力	一〇二
拜金家	一〇三
事業家	一〇三
事業家	一〇三
自由	一〇三
東西の趣味	一〇三
殘酷なる靈長	一〇四
小人	一〇四
人間の弱點	一〇五
因果法	一〇五

白菊の卷

(九) 目次

執着	一〇六
諷刺	一〇六
主義と利害	一〇七
恩惠の記憶	一〇七
衆目を新にすべし	一〇八
道中膝栗毛	一〇八

落葉の卷

華族	一一一
二老	一一三
御手車	一一三
百世の大患	一一三
貧僧	一一三
俗僧	一一四
佛子	一一五
方便	一一五
今の書生	一一六
青年	一一六
大學生	一一七
學生の歸京	一一七
學生の消夏法	一一八
なつかしき故郷	一一八
故園	一一九

寧ろ一個の草鞋

故園

流鏑馬	一四二
藪 入	一四五
甲越の熾和	一四五
痴 鳥	一五五
狐不能忘穴	一五五
皆好し	一五五
吹雪の巻	
十年後の天地	一五六
新時代	一五六
跋涉すべし	一五六
新陳代謝	一五六
大海と蒼天	一四〇
月明之を見る	一四一
配處の月	一四二

日月の盈虚	一四三
日月の流過	一四三
日 光	一四三
班 點	一四三
海上の王	一四三
涇水と渭水	一四三
桑田の歎	一四四
公明磊々	一四四
嘆又嘆	一四四
誰か定遠たる	一四五
明鏡に耻ぢよ	一四五
安 危	一四六
可笑味と空威張	一四六
左團扇	一四七
相撲番附	一四七

現今の家庭	一三九
圓滿なる家庭	一三〇
歸 省	一三〇
戀 愛	一三三
婦女の怠弱	一三三
空 想	一三三
野に置き蓮華草	一三三
空望に馳する勿れ	一三三
僥倖を冀ふ勿れ	一三四
時 雨 の 巻	
無略救蒼生	一三五
改革者	一三五
流行譚	一三六
急激なる革新	一三七

保護同化	一三七
無職の徒	一三八
觀察の表裏	一三八
結束以可立	一三九
死 處	一三九
知止處	一三〇
瓦礫磊落	一三〇
源由を究むべし	一三〇
又これだけ	一三一
腕 力	一三一
愛 笛	一三一
探 險	一三一
脱 線	一三一
避難所	一三一
責 詭	一三一

一箇の世界……………一四
 萬國無比……………一四
 天下太平……………一四
 天下の大觀……………一四
 煤掃の卷

國家と國民……………一五
 國民歌……………一五
 西郷南洲……………一五
 奈翁と義經……………一五
 斷々一介之臣……………一五
 スバルタ國……………一五
 聯句と妙味……………一五
 重量と快感……………一五
 宗教觀……………一七

花と宗教……………一七
 芭蕉の俳句……………一七
 河畔の船聲……………一七
 美感……………一六
 色彩……………一六
 梅……………一六
 春雨……………一六
 秋の哀……………一六
 飲酒……………一六
 厄介華族……………一六
 大學生の不品行……………一六
 支那思想……………一六
 死學者……………一六
 自信力……………一六
 儒教主義……………一六

日本武士の特質……………一六
 教育家の風采……………一六
 神道……………一六
 悲劇……………一六
 運命と人道……………一六
 新聞記者……………一六
 タイムス……………一七
 葉林子の戯曲……………一七
 政治家の品性……………一七
 紳士録……………一七
 愛の極致……………一七
 兩性の好尚……………一七
 泣癖……………一七
 體育……………一七
 旅行……………一七

温泉の目的……………一七
 登山……………一七
 天行健……………一七
 小成に安んず……………一八
 けち臭き話……………一八
 家康の木乃伊……………一八
 天才……………一八
 先覺者と多數……………一八
 肩書……………一八
 酢漿の卷

金と交際……………一八
 錦と襦袢……………一八
 品性と身分……………一八
 兩議員……………一八

目次 (四一)

代議の相場	一八五	巧言令色	一八九
政治家	一八五	學生の墮落	一八九
教育家	一八六	女學生	一八九
慈善家	一八六	情死	一八九
實業家	一八六	女子と地獄	一九〇
博士	一八六	貧乏娘と若旦那	一九〇
學士	一八六	世捨人	一九〇
風と志士	一八七	厭世と樂天	一九〇
落第學者	一八七	正行と死	一九一
宗匠	一八七	忠臣の墓	一九一
宗匠と駄句	一八七	不釣合の墓	一九一
基家と人物	一八八	有難き文句	一九一
品行方正と薄情	一八八	説教の句讀	一九二
正直と横着	一八八	勘定の涙	一九二
正直なる空氣	一八八	藝妓の見本	一九二

目次 (五一)

藝妓の情	一九三	習穢	一九七
藝と場所	一九三	流行	一九七
醜惡の徒	一九四	世態の變遷	一九七
悪行の親分	一九四	銀煙管	一九八
泥棒の繩張	一九四	續朝と銀猫	一九八
同臭	一九四	腦の使用	一九八
化の皮	一九五	裡銀百貫	一九九
欺と不欺	一九五	至誠	一九九
美人の感化力	一九五	忠諫	一九九
鏡と顔	一九五	散財の甲乙	一九九
器用なる人	一九六	猫の世	二〇〇
判任官と俳優	一九六	妓樓と狂人	二〇〇
新林詩家	一九六	貯金の世	二〇〇
世の中	一九六	贅澤と高尙	二〇〇
失意の時	一九七	遊藝	二〇一

賭博	二〇一	横激	二〇五
今昔の俠容	二〇二	町家の娘風俗	二〇五
夜店と非人長家	二〇三	見にくきもの	二〇六
怪有の宗教	二〇三	奥様	二〇六
高利貸	二〇三	夫婦	二〇六
家屋税	二〇三	縮緬の腰巻	二〇六
無責任	二〇三	箒と三絃	二〇七
下品の不公平	二〇三	唱歌本	二〇七
耻ならぬ耻	二〇三	新の字	二〇七
笑の高低	二〇四	彌次馬	二〇八
滑稽	二〇四	酒量	二〇八
乙な物	二〇四	茶代	二〇八
我慢	二〇四	被憎口	二〇八
醉狂	二〇五		
人生と山水目次終			

人生と山水

中川愛水選

水仙の巻



(一)

見渡せば、千門万户、常盤の松、年一年に其影を増し、鬱々蒼々、佳氣此邊より生動し來りて、太平の家は日章旗に顯はる、あはれ人心一玉の下に翕然和合し、年に二回の春を迎へず、心に陰陽の隔てなく、以て聖天子の徳を稱し奉り、國運の隆盛たるは、豊榮いぼる天つ日の如くならんこと、幾重にも書きてなむ。

年 賀 状

年賀状の旭光と共に門に舞ひ込むは自是一種の景氣にして、嬉しき者なれど、大晦日などに舞込むは大に不快を興ふる者なり。世間敏捷に似たる迂愚の徒多し。四日又五日などに舞込む賀状にも、麗々と元旦又一日と特更らめきて日付の書きたるあり。其人の氣も知れて興なし。これ些事なれど、偽を挟むなり。非を飾るなり。印刷の賀状は友情を起さず。拙くとも自筆なるは妙。謹賀新年の外に種々の言草あるは尙妙。

年 賀 の 断 り

新聞紙上、雜然として年賀断り状の廣告出づ。入らぬ虚言を吹聴する人達かな。人生は詐りの爲に生れ來りたるかは知られども、年の始めの元日より、ウソをつき始む。曰く近縣旅行、曰く病氣引籠りと。假令ひ、年賀は虚禮に過ぎずと雖も、而も公然、虚言を構へ一室に閑居して、小人互に不善をなすなり。一年の計は春に在りとかいふ。去れば其計は詐りにあるか、ウソのつき始めは一月一日の新聞紙と、各戸に立てる門松の裏より始まると申すべきか。

新 年 の 心

逝し年を送りて來る年を迎ふ、送迎の間一髪なり。表し又裏すれば、陰陽の差一步なり。除夜、更たけて万籟聞たる刹那、忽ち一百八の曉鐘を聞く。黒雲霽れ、濃霧散ずる所、東天一帯にあかし。陽氣全地に渡り、烏雀踴躍し、鶏犬奔舞すれば、新春の氣、萬戸千戸に溢れ來る。人は須らく、仔細に此機一轉の眞諦を味ふべし。究まりて又通じ、迫りて又流るゝ際、陰陽更替の玄妙を觀る。万悶の鬱するは、一新の兆に如かず。陽氣一度臨めば、百憂忽ち散じ、生面自ら開く、新天新地の福音は慈然として人をして成大ならしむるに非ずや。

四 季

鶏聲曉を報じ殘星の光り漸く薄く、微光空に映じて天次第に明かし、晴旭東天に昇り、萬物其光澤に浴す、鳥中天に歌ひ、獸地上に躍る、花は野に咲き笑み木は山に美はしく茂り合ふ、魚介清海に遊び、昆虫叢になく、打霞は長閑けき日影に春の日を樂しみ、涼風縁を揺かす時樹間に立つて夏の日を喜ぶ、秋光冬景また眺めにあかず、天地行く所として美しからぬはなく、見るものとして麗ならぬはあらし、朝日に讃稱の歌を花

園に詣ひ、夕べに熱情もて上天に訴ふ、心清ければ希望遂には許るされなん。

春の感

萌え出づる草を踏み、うらけき青雲を頂き、新緑の此方彼方に、春の花を觀れば、身も亦欣舞して、其中に入らまく欲する者なり。されば此時に當りて、人の謳歌せざるは稀なるべし。駘蕩たる心地よきに身の締りも、ゆるみ、天地を樂世と見做して、何等の心配することもなし。菜花の黄、胡蝶の戯、桃櫻の咲き香ふなど、すべて氣色を爽快にせざることなし。人生にむづかしきことなど有らんとは、暫く考の外にて、凡そ掛念憂慮する程馬鹿らしきことはなしと、思はるゝなるべし。此時に際して、嚴冬の壯烈を想ひ起し、刻苦忍耐の味あることに念及する者は余り多かるまじ。茲に於て秋風久しからずして到り、木枯の寂寞に堪へず、直に榮華の短きことを痛まんとすることの遠からずして大に増加すべし。四時速に循環し、人生は走馬燈に似たる哉。人の爲す所畢竟奈何。

人生の春

木に花咲く時のある如く、人にも必ず花咲く時あり。たとひ如何なる醜女といへ雖も、出花の時ある如く、如何なる醜男といへども、一度は人に思はるゝことあり。之と等しく如何に不運にして、如何に逆境に長居せしものと雖も、必ずや一陽來復して、その運の花のひらく時節あり。之を其人の春とは云ふなり。其人若し此春に於て油断せず、花多ければ少しは摘み去り、以て堅實の實子を結ばしむることを工夫せば、其一代と其子孫との計は必ず出來べき筈なり。此は殆ど天命とも云ふべき程に確定せしもの乍ら、人は春景氣となりゆけば、次第に心ゆるみ、此春何時までも續くものと誤解して、遂に何等の締も覺悟もなく、其うちに花落ちて、初て愁嘆し、又々秋となり、冬となりゆく者も多きこそ、うたてき極みなれ。

梅園

一陽來復、瑞雨天に滿つ。歌謡の聲裡、早く梅花の南郊に綻ぶものあるを見る。疎影横斜、暗香浮動す。百花園は拈屈椀を以て賞せられ、臥龍梅は參差錯落を以て喧し。木下川の梅屋敷の如き、江東の梅の如き、亦尋常一様玉肌氷骨にあらざるなり。

黄 鳥

特り彼の嶺頭に囀づれる一黄鳥は、果して何者ぞ。其の宛轉として巧舌、曲を弄するの聲は、優人織女をして、恍惚として耳を傾けしむと雖も、其の纖弱なる翹翼の力は、往々軟風にすら抵抗する能はず。只幸ひに嶺頭の勝を占めて、高く仰がるの位地に在るがゆゑに、敢て翩々として嬌態を天庭に舞はし、揚々として妖曲を吟じ、以て怯心を掩ひて、威風を裝へり。而して洞底に默せる雄獅は、見て其虚榮を嗤ふ。

花 見

「鐘の色おぼろにわたる春の山」我知らず浮立つ時節とはなりぬ、東台山上一朶の雲、鐘の音ならで、花見る人の笑聲を填めて、此所ぞ武陵の秘郷といはぬばかり、南街北衢、只見る紅塵の面上を掠めて來るを、花見る人、人見る人、知らず、此中紅塵以外に春色を味ふ者幾何か有るを。

花のやよひ

古より眺めの宜しきものを、雪月花と云へり。されど雪は寒く、月はさびしき心地して、花の穠かに美しきに如かず。況や是れ花は人為天然の妙なる共和にして、月と雪との自らに似ず。人の樂しみを寄せて、理想

の姿に作らんものは豈に花ならずや。西行法師の月にかこち、雪にながむるは一入風流なれども、其花のやさしさに切なる心根こそ、いとも目出度けれ。

人間四月

詩人歌ひて曰く、人間四月は仙郷、俳人曰く、目には青葉、山ほととぎす、初鰯。目黒の牡丹觀るべし。若し其雜沓を厭はんか、玉川の香魚、長ずること幾寸、嘗すべからざらんや。四月仙郷、かの政治家理財家にあらざるの人、何ぞ當きに空過すべき。

晚 春

桃李已に謝し、新雨田に滿つ。早くも燕子は啼々として歌ひ來り、牡丹、藤、つばじ、芍薬の類は期節に追られて、三々五々、蕾を破る。東籬西園何ぞ其れ異香芬々たるもの多き。然れどもこれ賞するに足る者なし。龜井戸附近、細雨、油の如く、稻苗縁を添へ、鳴蛙閣閣、草花、俗を出づるが如く、各處の森林茫茫模糊の中に隱見出沒するの景、優に一覽の値あり。

春光九十

春光九十、今將きに半ばならんとす、東京城中に花盡くが如く、東台に
壘上に繁華將に酣はなり、是に於てか天女は之を嫉妬し、交も風雨を降
して春時を繚亂せしめたり、嗚呼人事も亦斯くの如き哉、彼の榮華に誇
り、榮耀を極め、滿る者は虧くるの格言を誦せざる彼の人士等も、亦此
花の如きか、噫。

五月雨

候は梅雨に入りて淫雨瀕りに至る。夜坐、燭を覗みて、往を懐ひ來を思
ふ。人生何ぞ悠々たる。聖天子、上に在り、仙人の王子喬、豈に與に期
を等しうすべけんや。一劍、恩に答ふ、人皆之れ有り、空言聊か世を動
かす、亦補少きを恥づ、鞠躬盡瘁、王事に勤勞す、其志にあらずと非ず
といはんや。其職にあらざるを奈何せんや、二頃の田、鋤犁を執りて、
王の一良民たらんか。

夏の夕

日既に西に傾き、烏空天を横ぎりて歸り、戸々水を灑ぎて庭前を洗ふ時
に至れば、涼氣忽然として來る。此に於て草木蘇し、人また活く。童は
走り、少年は散歩し、老たるに裳を擲げて息ふ。彼等全日必ずしも働

しにあらず。然れども、今や初めて休みたる如し。否、酷熱の節、彼等殆
ど終日休みたるなり。然れども、晚景氣清きの時に至りて、彼等初めて
眞に休みたるが如し。蓋し天の苦熱を下すや、亦清風を以て拭ふ。夏の
夕は實に一刻千金の歡びあり。

夏の快

青々繁茂、よく實り、よく結ぶ。夏よ、汝は事業を成效せしむるの天使
か。貧者をして衣薄からしめ、住ひやすからしめ、日長からしめ、夜涼
しからしめ、尤も簡易に、尤も薄資に生活せしむ。夏よ汝は平民の友な
るか。

一面百町の田、青々として稻清し。水熟して湯の如く、脚を没して浴す
るに似たり。農家の夫妻、畝々に耕やして、終日休むことなし。あゝ農
人何ぞ健全なるや。夏は農家の時なり。吾は農家と汝との友たらむ。

夏朝の爽味

晴空澄みて輕風微かに樹梢に動き、白露未だ其姿を没せず。乃ち出て、
屋外を歩すれば、爽氣予に伴ひて趣味津津たる靈界に逍遙せしむ。嗚呼
夏の朝、予は此清爽を楽しむこと深し。

此清境に處して冥想すれば、恍然自然と同化する。予は既に予にあらず、
惟り存する者は自然のみ。縹緲たる神韻のみ。普遍なる精氣のみ。加賀
千代、這般の消息を詠じて曰く、紅させる口も忘る、清水かな。

一葉落つ

一葉落ちて天下の秋を知るといふ者は、落葉のよく蕭殺の氣象を代表す
る者なればなり。今や我社會の狀態を視れば、一葉落ち二葉落ち三四葉
落ちて、落木蕭々、四山の秋なり。試に一葉を拾ひて觀測を此に寓せん
か。何物か此に比擬すべき。予謂へらく、操觚者の一角は尤も彰々たる
全社會の現象なりと。何となれば彼等は社會の耳目を以て自ら居る者な
ればなり。時ありてか、僭越にも、一世の木鐸を以て自ら許す者なれば
なり。人を視るは目に於てせよ、肺肝掩はず、聲を聴くは鐸に於てせよ、
清濁響に従へり。

隅田川の秋

夜目にもそれと、一叢茂れる水神の森、燈籠の燦爛たるは八百松樓、仰
げば銀河近く落ちて、星斗爛干、水の如き氷輪徐ろに天心を流れ、俯せ
ば、海の如き大江、靜かに月を涵し、草より出て、雲に去る。江を隔て
て、橋場の燈影明滅、水に落ち、棹歌儼かに起る處、白帆朦朧、金波銀
波碎けて又合す。

秋色

秋葉の凜烈として偉麗なるは、天の達人高士をして縱賞せしめんと欲す
る微意にあらざるなきか。而も秋色を尤も優美に尤も豁大に表示するも
のは彼の千林万峯の紅於に如くものなし。西は、龍田、高雄、東しては、
妙義、日光の秋色を觀れば、偉麗優美の念、油然而して生じ、而して此
觀念が國風に如何なる感化を興ふるかを知るに知らん。

秋郊

金風梧桐を吹き、秋氣屏帷に徹す。起て郊外の秋を尋ぬれば、草花錦の
如く、陰虫唧々として人の腸を斷つ。龜井戸林南、一字の古刹は、萩花
正に開き、枝條嫋々、倒れんとして停る者の如く、瀧の川外一ヶの好山
は鈴虫盛に鳴き、聲音切々、斷えんとして亦續く。誰か三杯の酒を携へ
て草虫を慰むる者ぞ。筑波山は市外十里、森林蒼鬱として白晝暗し。中
秋の夕、月を彼處に賞せんか。万籟蕭々、月光樹間に洩れ、俗塵到らず、
清風徐に來る。

遠征の秋

遠征の兵士、戦勝ちて野陣に歸り宿する時、血に塗れたる軍服を洗ひて
習く息ふ折、過雁一たび叫んで無木の奇峰を超ゆ。目送して行く所を望
めば、影、雲漠々の裏に隠れて餘情盡くることなし。一軍過半眠り、か
ゞり火獨り燃ゆ、天地これ異境の天地、夢は即ち故國の夢、彼等が秋を
悼むの情限りあらんや。

此等の兵を憶ひて其運命を双肩に擔ふ所の將軍が痛懷果して如何ぞや。
日没して、月荒原の彼方に上ること數尺、万骨の血に浮びて、野草、赤露
の重きにうなだるゝ時、勇士の所懷豈に涙なからんや。異境の秋色、果
して慘憺たることなきや如何、

秋夜の涙

秋天星高うして、銀漢淡く、梧桐聲凄うして露團々、砧聲斷續、夢を繞
りて靜かに、夜砦の哀音また人を襲ふ。眞にこれ仲秋の慘景。遠征の將
軍は洛陽の空を仰きて歎じ、蠻地の昭君は行雁を羨みて泣き、孤客は暗燈
に聲を飲み、寡婦は孤衾に腸を斷つ。豈たこれのみならんや、行程猶
遙かにして、志成らざる人、希望未だ遠くして業難きの徒、亂離姦惡の

社會に立ちて公道を張るの士、此慘憺なる景を見て、知らず、何の感か
ある。

二百十日

若し乏しからざるの資を擁し、食膳の豊美に事を欠かぬ人にして、猶こ
れ二百十日に眞實に晴天を喜ぶことあらんか、則ち唯これ一念の微動と
雖も、其快天下に雨沾せん。

團子坂の菊

淵明の菊を愛するは、其方芳に後れて、獨り秋壇花咲き、隱逸にして自
ら君子の風あるが故なり。然るに團子坂に於ける造菊の如く、屈折曲造、
俗中の俗に似せしむるを見れば、深く菊を愛するものは、更に深く之を
嫌ふなるべし。菊尙斯くの如し。君子にして市に争ひ、俗に倣れらば、
茲に安ぞ君子あらむ。

十一月

天寒くして風雨加はる。滿城青年、唇を嚙みて、單衣重着するもの途相
望む。寒衣未レ寄勿レ飛レ霜。
今年剩す所僅に一月、人生何ぞ倥偬たる。一夜劍を抜きて、獨り起す。

燈火暗く、風雨怒號す。鏡をとりて自ら照せば、面羅刹の如し。語を寄す、江湖の好青年、誰が爲に泣き又誰が爲に笑ふ。

東北の冬

一望皚々たる銀世界となれり、東京の地にして然り、思ふに東北の雪の名所は一層奇觀の状を呈せん。東北の地に遊ぶものは此時を以てせよ、古狼寒月に吼え、鷗鳥樹梢に鳴く、行人をして四邊の景況凄まじく、又痛快に感ぜしむるものあらん、東北山河の眞景は冬に在り。東北山河の眞賞は雪に在り。

歳晚

人事紛華潜動息、天心靜點運推移。地球の脚、一日も息まれば、光陰の白駒、走ること疾し。今年の曆も残り少くなりぬ。例によりて、二十五日より、暇を得ぬるに、身も心も、遽に、寛なるを覺え、何事も手につかず、詩集など繕きて、日を暮らす。巷の往來、しげくなりぬ。人々の心せはしさに引きかへて、かゝる時にも、心易きは措大なり。

反古賣りて酒に替へけり冬籠。

歳晚の感

年々歳々の花、實を遺す。年々歳々の人何の結果ぞ。日東より出て、西に没し、月前半に照して後半に隠る。規律蕭々、役々として辭せず、三百有六十日、一日も休まず。而して人の勞役は如何。

枯葉地に敷きて獨木悄然たり。鴻雁高く鳴きて、聲露、荻に落つ。寒月の凄慘たるに物思ひして、夜の長きに惆悵する時、人間の多恨、今を以て其最となす。

櫻と桔梗

予が望は花々しく散るにあり。其外に一物なし。希くは櫻花たらんか。白雲と咲き亂れ、白雲と散らん。古ならば、緋甲を着けて白馬に跨り、箪に花かざして兜をばつけむとぞ思ふ。

能はずんば、乃ち桔梗花たらんか。原頭霜に打たれて惰乎として風のまに、靡かん。曠野に嘶く荒馬も蹄留めて哀れとや見ん。

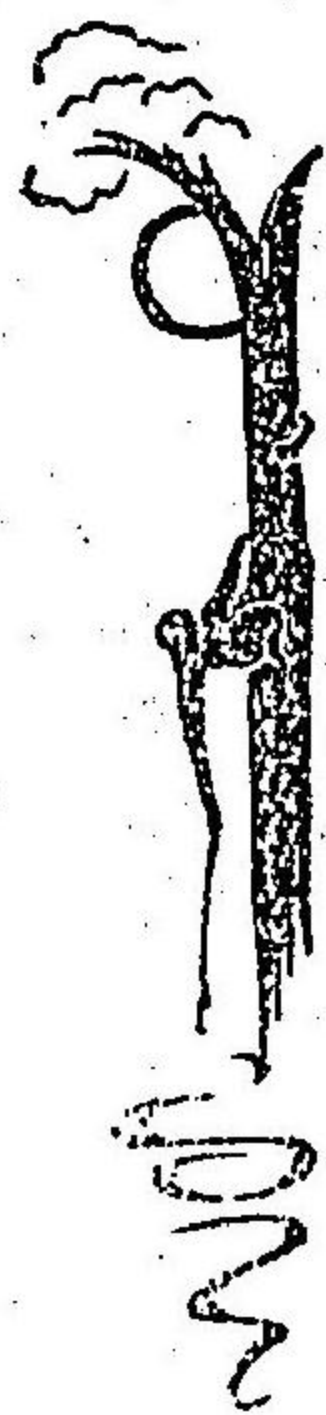
自然の美

懸瀑數千丈、盛夏、雪を噴き、春日雷吼ゆ。是に於て李青蓮は倏如三飛電來、隱如二白虹起と唱ふ。雨靜かにして、鳩の聲深し。風軟かにして花の落つること遲し。是に於て芭蕉は「古池や」の句あり。これ皆自然に感得し

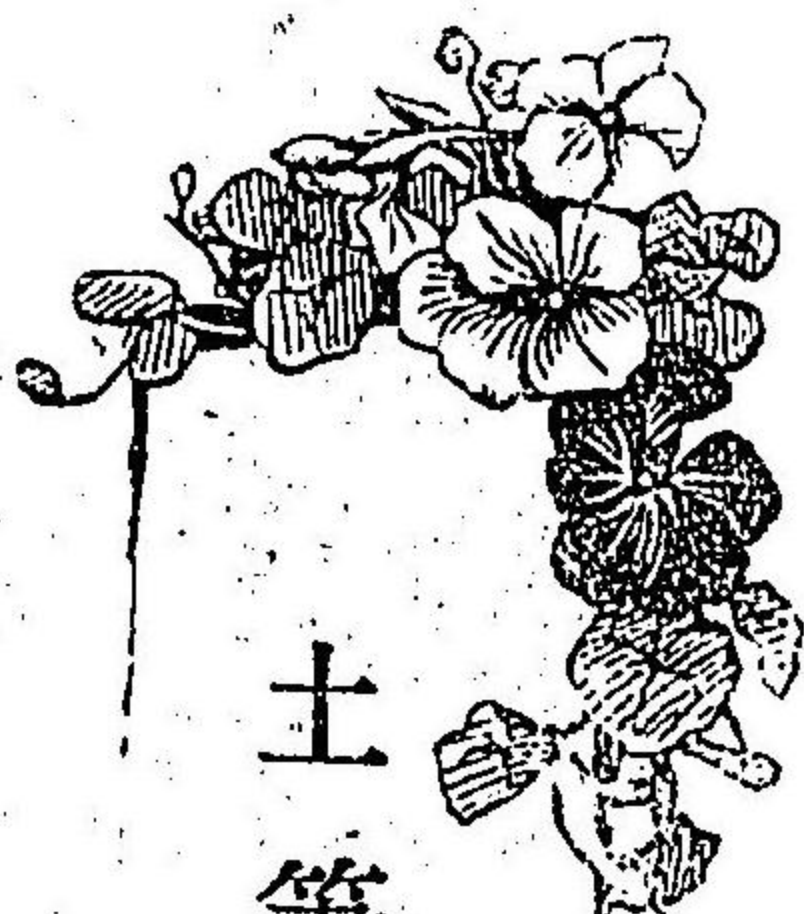
て、絶代の名吟を殘せるなり。花の下に西行は死なんことを願ひ、雨の中に北枝は句を拾はんとす。勿來關は八幡太郎、馬を留め、「オラン」海に鬼上官は潜然たり。自然何ぞ此の如く人を動かすの深きや。

深夜の星

何故に深夜の星と云へるかと問へる人あり、夜深けて天を見よ。黒幕墨より黒く引渡り、白銀の銚を以て打とめたり、暗き中に光りあるは只之のみ、而も月の緩かなる光もあらず、小さけど最と燦らかに天の光榮を洩らす也、一天白々なるよりも、そと一層のおごそかなる心地し、大海原に眞珠を拾ひ、林の蔭に玉を見出し、豪傑の爛たる眼を見て其心の底を測るよりも聖なり。



土筆の卷



樹 木

花嫺然として開き、而して實蕭爾として結び、實落ちて地に入り、而して芽し、而して長じ、鬱乎として大樹を成すなり。何が故に花開く。樹の養を取るや、實に根に於てす。樹の方きに長ずるや、生氣勃然、而して根株の滋養を吸収する、以て遍く、其小枝末葉に供するに足らず、小なる者、末なる者平なる能はず、去りて自ら樹立することあり。而して縦まに其滋養を食らんとす。茲に嫺然として、笑ひて蜂蝶を迎ふれば、彼蝶して實を結ばしむ。實已に成る、是に於て割然として故樹を脱し、

自ら營むなり。豈獨り植物のみ然か云はんや。

山水秀麗の地

嗟呼富士の峯、琵琶の湖、美なる邦土なる哉、斯る山、斯る水、上帝豈に偶然に日本人民に附與せんや、蓋し神算の在る處を測知するに、必ずや大和民族をして斯の山を利し、斯の水を用ひ以て偉蹟を歲月の後に奏せしむるものならん、然るに百載の後、斯の山下、斯の水畔は他人種の翹起し、他人種より輸入したる空氣をして磅礴擴充せしめなば、博愛の上帝は大和民族の爲に其無識を吊し、山靈は潜然として泣き、水伯は叫然として哭することならん、想うて斯處に至れば、假分予輩をして江州司馬ならざるも、轉た青衿を濕はさしむるものあらん。

深山

遠く山路に分け入り、人里絶えて鷄犬の聲も聞えず、あやしき鳥の音、時に耳朶を掠め去る時に於ては、如何なる人も一種崇高の感念を起さずんばあらず。百丈の蔦葉稀にして、枝枯骨の如く、龍蛇の勢をなして千尋の崖に懸り、岩石苔むして太古の衣を着けたり。樹木の層は巖の如く、爰に幾千年の齡を重ねて、梢は天を摩せんとす。鬱葱として陽光を遮

り、空翠充ちて人の骨を洗ふ。衣は何となく濕ひ、肌はいつとなく粟立つ。瞑々として而も清く、凄蒼として而も暖かなり。

關趾の懷古

幾多の英雄、幾多の文人、幾多の遊客、此關を往來して、懷古慨今の涙を注ぎしものぞ。或は檻車搖夢過函關といひ、或は嘗期不越函關といひ、或は指揮殘卒戰函關といふ幕府の遺臣あり。或は停馬嶺頭立多時といふ近代の偉人あり。文に詩に歌に幾多の佳什を留む。而して時の艱なるや、鼎鑊に臨まんが爲、此關を過ぐる者あり。或は遺業を保たんと其主の爲に苦戦する者、長劍を横へて意氣八州を呑む傑士あり。時變すれば觀者亦變ず。今や世平かにして、逢難の憂なし。唯、嶺頭の清風と明月とあるのみ。

大河の強大

大河の強大なるは其幾百川を合する故なり。蓋し無數の川、其方向を同じくし、相混同して流るが故に、遂に此強大を爲せり。故に例令ひ細流といへども、能く同方向の流れに合すれば、後、大流となるべし。大流といへども、若し其同方向の流れに合せずんば、暫くにして水涸れ骨を

暴さらすに至らん。人世の万事も亦斯の如しと知るべし。

村舎の趣味

拂曉起き出て、街上を見渡すに、兩傍の槻、亭々として且春の綠葉に繁り、交叉して道を蔽ふ。夜來の露、木梢より落ちて、砂を潤し、車行、時に断え、路人未だ歩まず、道甚だ清し。而して其筋屈曲、茅舎隠見し、破れたる籬、半は車を顯はし、積みたる材木の端、不規則にならび、鶏の聲、其後より起る。實に妙好一幅の村舎の畫圖なり。

旅行の利益

これを以て、旅は流水の如く、歩々觸るゝ所を新鮮にす、常には思はざる事も旅に於ては切に思ひ、常には事もなく感じつる事を茲には得ならぬやうに感じ、常には無心平氣に解したる事をも此時は最も情けある事に會得す。限りたる人情の生き返りたるが如く、激みたる道念の澄み渡りたるが如く、感覺鋭敏にして物に動き易し、而して四方の風光その面を洗ひたらん事の如く、宛がら一新したるの面貌を以てわれに臨むの心地す、此に於てか何如に情けなきの人も、旅には深切多感の人とならざる事殆んど稀れなり。

湘南に嘯遊す

時事日に非ならんとす。草莽の士人當きに一考を要すべきなり。而も同人相率ゐて、出て、湘南の野に嘯傲する者、決して他故あるにあらず。曩には頌徳表を出して諸公の徳を賛し、其功德の大なるに感ずるを以て、更に美なる畫の江の島辨天才天女に詣て、鎌府の神社佛閣に額づきて、開運の祈念と共に、藩閥の冥福を禱らんとするのみ。若し風濤亂松を捲きて、月色苦しむ夜、被髮して、大佛祠畔の同人が茅屋を訪ふ者あらば、一壘の麥酒、一碟の鮮魚、直に帳中に延きて、相擁して、放談一場せんことは又辭する所にあらざるなり。

東都の風物

水を激して電氣を起し、火を焚きて工事を勉む、蜿蜒たる會社の黒烟は連峰の形を蔽ひて、號々たる工場の狂聲は、夕に三絃の音を絶たしむ。梅林は嘗て何等の綱目に屬するやを探求せられ、好山は嘗て如何なる岩質なるやを試験せらる。満目すべし皆殺風景、沒風流、而して實に是れ東都風物の梗概なり。

金龍山の晚鐘

暮色蒼然として、西より來り、俗客已に去つて唯三四の花下に徘徊するのみ。晚鷓鴣々として、金龍山頂に啼き、落花飄々として人の衣袂を襲ふ。突如として暮鐘一打、雲霞の裡に起る。何等の風韻、何等の凄凉。

芝浦

釣を垂れてカイツを釣る者あり、貝を拾ふ者あり、水馬を試みる者あり、犬を背にして水に泳ぐ者あり、砂を満身に塗りて突然水に入る者あり、海水を汲み來りて自己の腹部に注ぎて喜ぶものあり、泥舟を漕ぐ者あり、放歌する者あり、樹蔭に空手を學ぶ者あり、見晴らし樓、大野樓、客の來る織るが如く、薄暮吟聲四起、會ま、漁舟に至り争ひて生魚を陸揚げす。活潑々地、砂上に躍り顛ぶ。既にして、新月、芝山の五重塔に上り、晚涼水の如く、海氣衣を拂ひて渾身洗ふに似たる處、これ一幅の眞仙境。

稚兒が淵

島の南端に至り、岩石斷絶す、眼下に海水見み、綠波高く打つ、音常に絶えず、所謂稚兒が淵是なり。遠く海上を眺むれば烟波の間に伊豆の山山茫乎として認むべし、是亦一種の佳景といふべし。

早雲寺

嗚呼、新九郎長氏が、劍に仗りて關東に來りしより幾年、遂に志を成して、八州を領せしが、壯圖五代にして夢の如く消え、小田原の城墟、徒に懷古の客を留む。予今、早雲寺に寓し、遺像に對して英雄を吊ひ、時に白雲を踏みて、墳墓に謁すれば、蒼苔漫に濃にして、古木も亦、自ら情あるが如く殆ど俯仰に堪へざらしむ。

鎌倉

去りて大塔宮の古幽窟を見れば、蒼苔、蝕して古樹茂り、暗黒慘愴、陰氣人を打ち、源右府の墳墓を展すれば、幽徑客なく、鳥空しく鳴くのみ、八幡洞畔の小池、蓮花正に咲き、群鶴逍遙す。既にして古物展覽會を観る、鎌足の古鐵兜、古色掬すべく、八郎の弓、雄壯想ふべし、定家の硯、靜姫の舞衣、九郎の鎧、其他千種、皆觀るべし。更に車を驅りて大佛に至る、佛像高五丈、溫容靄然親しむべし、此處より歩いて觀世音の臺に上る、級を拾ふこと百余、由井の瀆、眼前に好畫圖を開き、白砂青松、風物絶佳、嵐影水光、來る毎に面目一新の想ひあり。

鴻の臺

鴻の臺は里見氏の舊城址なり。滄桑の變、今や陸軍の兵營たり。赤衣鱗々、處々に練兵所あり。東は乃ち山色古蒼、紅葉錦の如し。下に古刹あり、義實の靈を祭る。古墳、苔は封じて落葉狼藉たり。一枝の楓葉を折りて古英雄の墓前に供す、亦好からずや。其下には刀水、濼々として流る。天は寒うして滿目寂寥、草は枯れて霜白し。寒夜、江を溯れば、月は黒く、星稀に、遠村の燈影、點一點、明暗出沒、鬼火の如く、殺氣人に迫る。

函嶺の險

志を操る函嶺の險なるが如く、以て輒ち攀つべからず。和を持すること、七湯の温なるが如く、敢て人工の熱をからず。冀くは以て人生の難に遠ざかるべし。何ぞ儒生の口吻に似たる哉。唯其攀ぢ難きの險は人能く爲し得べしと雖ども、其和なるに至りては吾も人も恐くは能はざるべし。「箱根八里は馬でも越すが」と、一鞭を策して、此險路に上る。嶺頭の清風、颯々たる處、馬を停めて八州の野を下瞰すれば、心氣自ら壯絶、又快絶。

一目千本

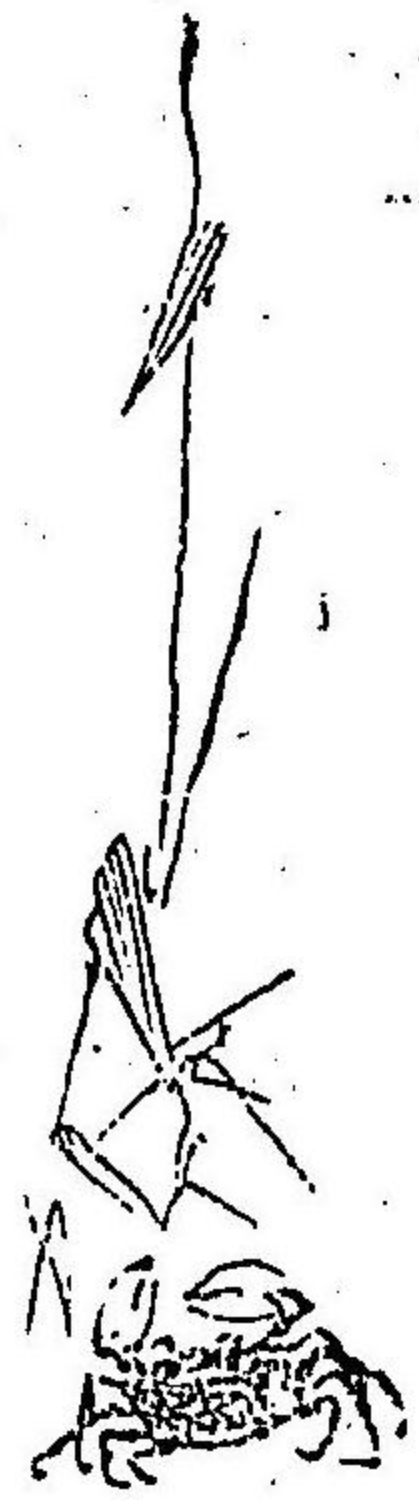
櫻花の一瓣は言ふに足らずと雖も、一枝は即ち觀るべきなり。而して一樹の好きは一枝の好きよりも好く、十樹の好きは一樹の好きよりも好し。乃ち百樹乃ち千樹、一目千本、多々益辨ずべし。且つ其花に咫尺の間、之を觀れば、未だ異采あらず、百歩にして之を觀れば、白雲の空に起るあり。千歩にして之を望めば、紅霞の峰にたなびくあり、光采陸離、實に花の至大至壯極妙最美なる者なり。

小吉野

比叡山麓に山王馬場あり。櫻樹數十株。老幹蟠蜿、薜梢槎牙、而して翠松紅樹、其間に點綴し、石磴十數其左右に列す。實に無限の古趣あり。若し夫れ春風嫋々の夕、西嶺、月を吐けば、則ち月光倒射。一白茫茫として肌骨みな香し。人をして仙化する想あらしむ。予呼びて小吉野といふ。

富士山

望岳の詩、未だ佳章を見ず、石川丈山の白扇倒懸東海天の句、久しく人口に膾炙する所なれども、別段に面白くもなし。過る頃、余、富岳の下を過ぐ、恰もこれ曉天、晴れ渡りて、皚々たる山上に白雪、杲々たる紅



瞰と相映射して、清絶、謂いん方なし。既にして、膚寸の雲、大麓より起り、忽にして、玲瓏たる八咫の芙蓉を覆ふ。胸中の惑無量。

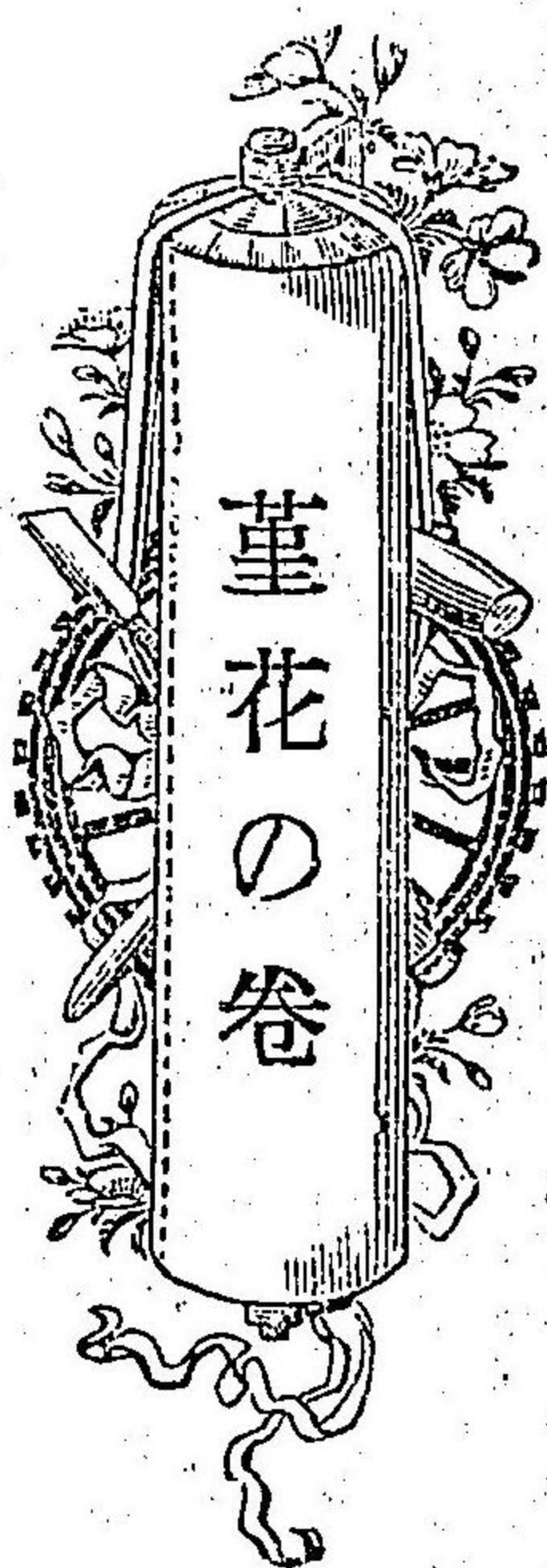
川中島

嗟呼、信玄は何人ぞ。始め戦を以て河中島の地を取り、尋て謙信之れを復せんと欲せば、亦戦を以て之を力拒す。而して後和を構するに及びては、運命を瑣々たる一角戯に暗し、力士敗れて、乃ち多年苦戦の地を一擲に附して恬然たり。何ぞ夫れ戦局に執拗剛情にして。和局に淡泊冷潔なるや。

山陰道

山陰の地、僻陬に屬すと雖ども、山には大山あり、水には郷河あり。而して生野の金鑛と宮津の天橋とは、寶庫と風色とを以て天下に冠たり。却りて怪む、人事に於ては全く然らざるを。岩華俊偉、伯の大山の如きもの、古來其人ありや。寛宏濶大、石の郷河の如きもの、古來其人ありや。山水偉人を生ずと、豈吾人を欺くか、何ぞ其寂々寥々として聞ゆることの少きや。後は峭躡、雲を摩するの大山脈を負ひ、前は激浪山を碎くの日本海を望む。此間の風物、豈人を激成するに足らざらんや。而し

て其狀斯の如し。噫、予之を解せり、彼等は天然の激勵に克つ能はず、却りて癡痺沈湮せるなり。



新刊小説

新刊の小説、競びて表紙と口繪とを美にす、口繪と表紙と愈美にして中味之に添はず。猶、演劇の道具立、愈美にして役者の伎藝平凡たるが如きなり。要するに斯ることは、これ疑もなく小説衰微の兆なり。頃日、小説界に傑作の出でざるは、これ其證にあらずや。

明治文學

而して明治文學の纖巧、卑少、猥瑣、上は以て天地の美妙を發揮する事能はず、下は以て國家の道義を扶持する事能はず、社會の腐敗と人心の汗下とは伴て益々文弱の風を助長し去るが如き傾向あるは、實に其本領なきに由る。

都會の文弱

都會が文弱の源泉と爲て、而して腐敗の根元と爲るは、古今東西明瞭の事實にして、一國の元氣精力は、森林の中、田畝の邊、地方の清淨なる空氣に涵養せられ、新鮮なる風物に培養せらるゝを常とす、故に都會氣習の全國を壓倒して、地方の風氣、其特立獨行を保つ能はざる時は、人心萎靡に倒れ、國家必ず文弱に死す。

文界の寂寞

三文々學者屏息して文學愛好の情漸く薄からむとす。然かも其實三文々學の筆に愛好の情を奏せしめたるのみ。故に眞の文學者たらむもの今日其筆を揮ふべきの時、嗚呼眞の文學者なきか、何ぞ近時文學界の寂寞たるの甚だしきや。

方今の文壇

人情、安きを偷み、逸に恠る。激せずんば奮はず。窮せずんば勵まず。今の文壇は之を諸他の社會に比す、安にして逸なり、一度文壇に登る者は其筆僅に文をなすを得ば即ち可なり。其才僅に書を解するを得ば即ち

可なり。必ずしも大主能あるを要せず、大見識を要せず、幽玄の理想を要せず、熱誠の信仰を要せず、漫りに觀察に托し、經驗折衷の學風を名とし、鎧釘剪裁、一時を糊塗すれば則ち足る。誠に易々たる業のみ。

今日の小説界

今日小説文學界に於て一世の人心を開拓し、千古を凌襲する雄篇巨作に至ては得て求むべからざる也、苟くも今日文學界の英靈的巨人、起て椽大の筆、絶倫の才を揮ひ纖巧、脆弱、輕浮なる小説の面目を一新し去るに非ざれば、規模遠大の小説出づべからず、天地の美妙得て闕くべからず、社會の風教、國家の道義、得て扶持すべからず、

懸賞文學

賞を懸けて文を募る、募に應ずる者、人之を卑しむ風あり。而も文を作りて之を書肆に賣る。賣ると、募りに應ずると何の差がある。然れども人の之を賤みて、彼を賤まざるは少しく奇なるが如し。之を解する者曰く、一は他働にして、一は自働なるに在り。品格は自働に在りて他働にあらずと。嗚呼それ然るか。

新文士

吾人の杞憂に堪へざるは、今の文界の所謂新進の文士なり。彼等果して、天地を斡旋するの手腕あるか。革命は打破なり、打破して向上するなり。彼等果して破壊の政爲あるか、向上の大精神あるか。革命は既に破壊なり、實利的にあらず、献身的なり、彼等果して自ら損して悔いざる大決心あるか。之に對する眞率あるか。吾人は今の所謂新文士につきて之を疑ふ者なり。

大詩仙

先づ詩仙の極めて尊とむべき事を明にし、俗人の決して歌の神靈を犯す可らざる事を示し、大なる愛國者、大ひなる哲學者、即ち目下の大ひなる英雄の奮つて詩を詠ぜん事を叫び望むに在り。區々たる語調韻格の議論三文の價値もあるなし、茲に大詩仙出でて其人の吟詠は自然にして調和すべし、彼れ天地の調和を直覺し、世通の調和を認識す、苟くも調和に逆らふものあらば亦た一層烈吟すべし、その吟ずる所總べて調和にあらざる事なし。於此乎、其半句雙節皆翕然たる音樂にあらざるはなし、語調韻格はおのづからにして成らん、故に吾人は先づ大詩仙の起らん事を祈る。

大詩人

印度帝國とセキスピーヤと其一を放擲せざるべからざる場合ありとせば、汝英人それ孰れをか捨て、孰れをか取らんと欲すと。カライル答へて曰く、印度帝國は時ありてか亡びん、されど、セキスピーヤに至りては、我等英人と共に千秋不朽なり、我等何ぞやセキスピーヤを放擲せん。言少く奇矯に失せりと雖、大詩人の尊重すべきと正に斯の如し。嗚呼我邦の近松は稍之に近きか。

自稱詩人

酒中に沈湎し、酔歩亂々、得意自ら詩人と稱す。雄篇大作のならざりし所以なり。徒に山の高き水の流るゝを見、得意自ら詩人と稱す。雄篇大作のならざりし所以なり。苟も大詩人たらんと欲せば、目を以て事物を見、而して亦心を以て事物を見ざるべからず。醉客焉ぞ大精神あらん。惰漢焉ぞ大精神あらん。

詩人の思腸

詩人半枝の筆以て天地の美妙を發揮し、文人一片の腕、以て宇宙の眞機を抉出す、故に其思想絶高ならざれば、以て天地の宏大を極むべから

ず、其眼光絶靈ならざれば、以て一世を傾倒し萬古を凌轢するに足らず、但が此思想あり、氣宇ありて之を運用するに其筆力文章を以てし、品格見識を以てするものは蓋し眞正の詩人、眞正文人、眞正の論客、眞正の小説家なり。

詩と散文

詩は文章の一体なり。人性情をそなへて天地間に立つ、思ふ所感ずる所なきを得ず、其發して文字に現はるゝものを文章と云ふ。文章とは人の性情の現象なり。而して文章の体は二あり、之を論するに風調自から整ひ、韻脚樂を奏するが如きものを律文と云ひ、其否らざるものを散文と云ふ、律文は所謂詩なり。左れば詩と散文との異なる所は其文章の韻、調和するとせざるとに在り、詩の文章は調和す、故に之を歌ふ事を得べし、散文の文章は否らず、故に之を歌ふ事極めて難し。必竟するに、差別する所は其韻調にあり、外に大違する所あるを見ざる也。拙堂云く詩は本と文中の一体、其詠歌の体をも以て詞を遺り語を措く事、稍や同じからざるのみと、卓論と謂ふべし。

書 法

明治時代を代表して今の青年の人の筆蹟は實に亂雜を極めたり。師範卒業生が筆蹟の拙きを歎じて、其小學兒童に及ぶ結果を憂ふるものあり。亦理なきにあらず、徳川氏御家流を以て公文の通規とす。必しも此の如く拘せざるべきも、甚しく我流ならんも、亦終に永く續くまじ。御家流を以て徳川氏を知る者は、明治時代を以て將來の書法を知らん。

太空の美妙

天黒く波白く、最早、夜となれば、一輪の明月、大空に懸り、錦波數万里に渡り、四面沈々として、唯、波の音と汽關の響あるのみ。仰きて月を望めば、白光燦爛、高宇漠々、そも何たる美妙ぞ。

美術品

古昔より傳來せる工巧の品物にして、能く大に、能く雄に、能く高に、能く精に、能く麗に、以て一國々民の文献を徴するに足り、以て一國々民の趣味を知るに足り、以て采丰を何ふに足り、觀る者をして、景仰追慕の情に堪へざるしめ、聽く者をして、敬肅謹恪の心を生ぜしむる者、即、所謂美術品、一面は之が保存に斡旋し、一面は之が振興に盡瘁せざるべからず、外人をして敬仰せるむるあらば、我品位を崇進すること果して幾何ぞや。

美術國の民

山は青く水は清し。天然の美、四圍に滿つ。天然の美化して人爲の美となる。人は既に自然に美術國民たり。何ぞ夫れ美文的國民たるを得ざらんや。天資聰明、慧敏、學を好み理を喜ぶこと豈西人の下に在らんや。學理的腦髓を有して、尙新なる大學理を立つる能はずといふも吾は之を信ぜざるなり。

繪畫の感化

山を畫けるに臨めば、山高く水深く、日没せんとして天甚だ紅し。川を畫けるに臨めば、水洋洋、細石磊々、魚躍り、虫群り、旭日映じて霧半ば去れり。花を畫けるに臨めば、瓣開き香散り、蝶舞ひ峰働く、滿目紅々白々、異薰天の如し。月を畫けるに臨めば、雲開き、水氣降り、滿界漠として一輪を見る。雁遙に遊び富峯足下に立つ、人を畫けるに臨めば、莞爾として笑めるあり、憤乎として戦はんとするあり、靜寂讀書するあり、耕すあり、釣するあり、伉儷伴行、又愛兒左右に戯るゝあり。或は古聖、眉目を開きて立ち、義士襟を合せて坐す。嗚呼、畫工となら

ん、繪畫の人を化する何ぞ如此きや。

教育者

教育者たらん人は、一面に高潔の理想ありて、一面に實際の識見を有し、人をして天に通ぜしむる先覺たると共に、更に又實際世間に敏ならしむる案内者とならざるべからず、單に世にあかるきのみにては技藝の教師なり。空しく道學を語りて、生氣なきは、文字の先生なり。双ながら採るに足らず。若し我が愛育する諸生が實際の憂き世に彷徨し、幾多の辛酸を嘗むるかを思惟し來らば、之に倍する苦心を以て、之に先んずる研究を送げ、預め確實なる方針を示して、其行路の難を少くせんとこそ思ふべき筈なれ。夫子安閑として人生を知らず、徒に文字章句を讀授し、其落すべき汗血の苦みに、些の同情なくして常に天下泰平の顔付をなさんば、父母に代はるべき教育者たる人の赤誠ならんや。

俗學者

今の世、博士の肩書を有する者極めて多し。而して其人概ね腦中、黃白を滿たし更に表に綿々として學理を説く。是遂に半は大俗人にして、雙脚を學海に投ずる者、兩間に呼吸して生を保ち蝙蝠に異ならず。嗚呼何を苦みて兩間に彷徨する蝙蝠を學ぶか。進みて鐵手を振ひて亂麻を理する能はず、退きて學理を顯揚して世を益する能はず、顧盼、踟躕、世の笑ふ所となる。何ぞ去就を定めて稟性の美を發輝せざる。鶴の頸、鴨の脛皆宜しきに適すべく、これ皆本分を守るにあらずや。

推敲の妙

予れ詩を推敲するに就て悟入したる事あり。予が父は俳諧を好み、其話に或人生海鼠の句を作りて曰く、板敷に下女取り落す生海鼠かな。師の曰く、善しと雖ども道具多きに過ぐ再考すべしと、乃ち改めて曰く、板敷に取り落したる生海鼠かな。師の曰く甚だ善し然れども猶ほ未だし。其人苦吟すれども得る事能はず、師乃ち改めて曰く取り落し取り落したる生海鼠かなと。予此話を聞て大に推敲の旨を得る事を覺ゆ、是れ悟の一端なり。

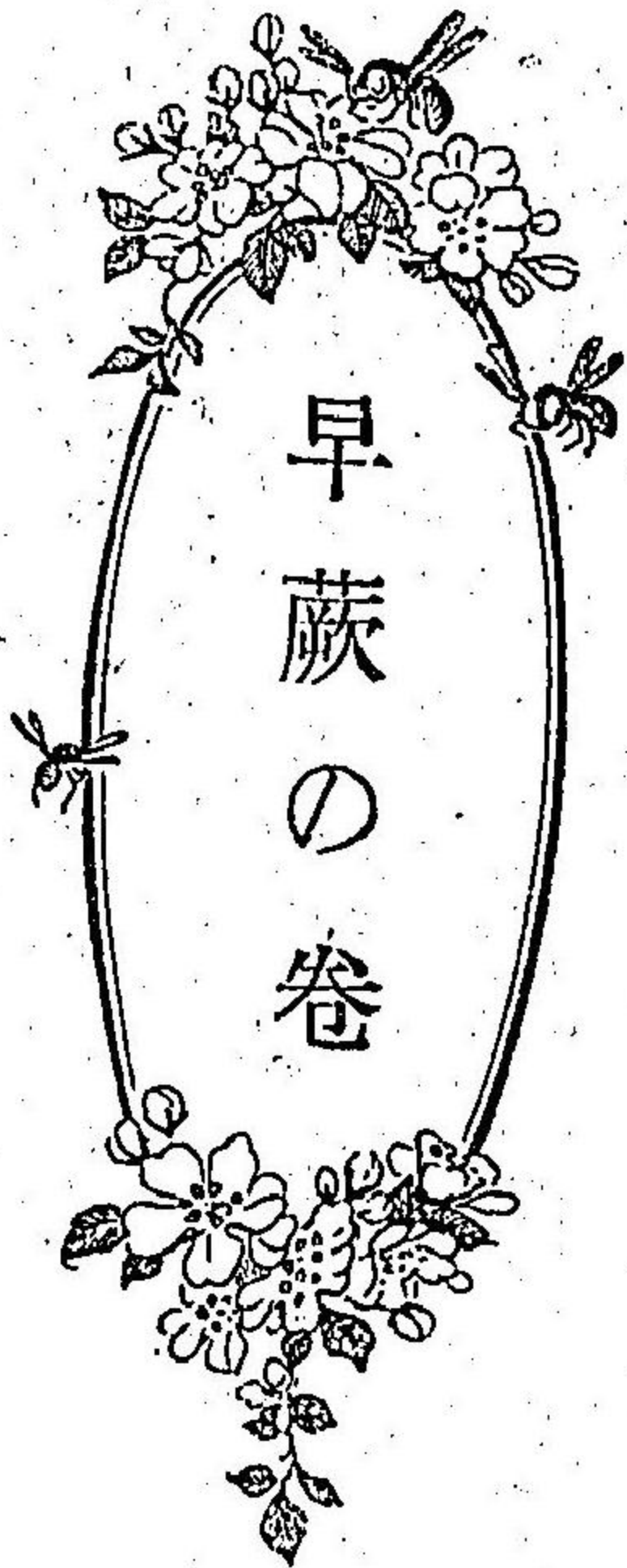
批評

世道人心、一日も懷に忘れず、誠に尙ぶべし。然れども人を律するは寛容すべし。己れを律するが如く峻嚴なるべからず。必ず人の鑿心刻血して作す所。其美處一切取らず、而して世道人心を以て率急に之を排す、

亦過酷情を矯するを見る、東坡、程伊川を罵りて姦といふ、君子鑑みる所あるべきなり。

水戸の風教

天下未だ醒めざるに先ちて、獨り醒め、天下未だ動かざるに當りて、先づ發せしは、水戸の文にあらずや。春陽三月、百卉媚を争ふの時、梅花既に無し。玲瓏皎潔は之を梅花に見るを得べきも、雄渾壯大の氣は終に望むべからず、名分之によりて舉がり、大義之によりて明なるも、水戸の文教は終始寛厚の雅懷に乏し。嗚呼この梅花的文教。



靈魂と五蘊

靈魂なるものは、五蘊を離れ存するものに非ず、五蘊も亦靈魂を離れて存するものにあらず。所謂靈魂なる者は、五蘊をして、色、受、行、想識せしむる力のみ。故に靈魂の外に五蘊なく、五蘊の外に靈魂なきなり。五蘊既に滅す、何れの所にか靈魂の存在を認めん。假令、五蘊を滅して猶靈魂の存するとするも、我の我たる所以は、五蘊の存する所、現在の實の我なればなり。生の前、死の後、既に我々にあらず。露魂も亦我の露魂たるをゆるすべからざるなり。

真理の大海

大天地の覺か、小天地の覺か、組織的を圓滿にし、個人體を圓滿にす、故に佛斯に成道して、草木國土悉皆成佛す、是に於て眼に外道なく異端なし。大海の潮、一は北に流れ、一は南に走る、而して未だ曾て相衝突せず、相忤逆せず、共に大海の鉢に安んず、多神、一神、凡神、無神、個々にして之を和せば將さに衝突忤逆に暇あらざらんとす、而して真理の大海は、能く之を包容するを得るなり。

神智

人を以て天を弄せず、意作を以て自化を規せず、形迹を以て眞機に擬せず、機と勢とを制して必要に應ずる所以を知るは獨り達士の本分なり、伎倆なり、神智なり、靈術なり。活世界の事、只神智靈術を尊しと爲す、區々たる陳迹、尋ねるに足らざるなり、先蹤追ふに足らざるなり。

敎理家の自信

彼の孔子、時の不遇なる陳蔡の野に餓ゑ、吾道窮と絶叫するも尙其敎を説き、ルーテル堂々たる大學敎授の地位を擲ち、跣足單衣、素朴自ら居り、

而もウオームスの大會の威力を以て、その所信を撤回せよと脅迫さるゝも、敢て屈せず。万死の間「我遂に脊信する能はず」と公言し、親鸞の如き、日蓮の如き、平素已を薄くして人に厚く、而して自信の餘、或は遠島に流謫せらるゝや、毫も平生に異らず、益其法を説きて己まざりしにあらずや。

到處に眞理あり

道を求むるの士は、到る所に眞理を追求す、天地の聖なるを見ては肅然として慎しみ、大人豪傑に接しては欣然として師事す、日夜只道の進まざる事を憂ひとなす、夫れ人如此く謹嚴にしてはじめて人の門弟たることを得、門弟ありて則ち師父あり、師父に事ふるの人、即ち異日の先生なり。

道者以目

波荒き磯邊に出て、人高く語り、暮烟暗き幽林を過ぎては、行客相顧みて戒む。驕陽金を爍すの日には、人、市に集らずして、襟懷を風清き縁蔭に拂ふ。昔者道路に目を以て語りし日あり。指を以て相傳へし日あり、説きて不可なれば、顧みて他を言ひ、時非なれば、笑ひて過去を

語る。

天行と人生

四時の序、循環止むときなし。花は開き落ちて、而してまた開く。草木は榮え枯れて、而して復榮ゆ。嗚呼人生五十、花一たび開落し、草木一たび榮枯する毎に、死期に近づくこと一年す。されば古人も、軍の陣外に進めるに同じとこそは誠め置かれたれ。北邙山上、墳塋列なる。唯聞くものは、松柏の聲のみ。噫。

自然と人事

紅塵に走るは青山に對するに孰若れぞ、朱門を叩くは綠野に走するに孰若れぞ、毛錐貨を記し、皮甲提を封する、岩花數枝林鳥幾陣に孰若れぞ、青鋒の下に懦々し紫陌の中に逐々し、綺筵の上に揚々たる、白雲窩素衾内、肝々一境に孰若れぞ、且つ知らず、天地放て何れの處に在る、又焉ぞ知らん、我身放て天地の間に在る事を。

人と氣運

人、氣運をつくるか。氣運、人をつくるか、チャールズ一世にはコロンエルあり。革命の氣運既に熱せば、文界將さきに一人のコロンエルを胎

み來らざらんや。文壇に鐵騎を塵きて、幹天旋地の巨手出てざらんや。今日の新文士、既に至らずとせば、吾人は唯望みを將來にかけて之を迎望す。美人は天の一方にあり。髣髴ととして形影あり、喚べども來らず、招けども未だ來らず。

自己の無盡藏

憐むべし、自ら自己の富の單位を有するを知らず。辛勞して富を絶叫す。弱きは自己の力を知らざるに若く時はなし。悲しむべし、我邦人は不幸にして此弱者を以て充滿せらる、富を誤解して、何れの所にか、其畜積して在る者の如く思惟す。富は決して九天の外より落下し來らず。又地の底より湧き來らず。無限の寶藏は近く自己の力に在り、絶叫するを止めよ。自ら自己の無盡藏を開け、富は此の如くにして、其單位を開き、積みて無限大に至らん。

各自の好尚

管公の皎々たる梅花を愛し、豊公の天々たる桃花を愛せし如き、二公の人と爲りしを察するに余りあり。屈原の幽芳なる蘭を愛し、陶淵明の高逸なる菊を愛せし如き、二子の懷抱を想見するに足る。

グリーンジョーの標致ある石竹を愛し、ピスマークの空濶なる園林を愛せしが如き、二人の襟度も亦躍出せるにあらずや。

人心の萎靡

民心はもと倦み易きを常とす。たゞ機先を制して、早く相應の刺戟を置き巧に歩々の前程に相應の希望を掛くる故に、人氣始めて萎靡せざるを得るなり。思想界に先覺あれば、人心之を以て倦まず、事業界に見込あれば、人心之を以て倦まず、かの爲政の大人、妙に機先を制するの大策を施すあらば、邦家の民心は決して倦まざるなり。況や事毎に要緊を外れ、雄心落々次第に剥げ、尙且つ幾度か失望せしめて、既に得たらんと思へりし者をも奪ひ去らしむ。人心如何ぞ萎靡せざらんや。

以心傳心

天竺の達摩曰く以心傳心と。人を教化する者、人に教化を受くる者實に此語に外ならず。一點の靈智、心を出て心に通ず。是れ大人物。人を導くの法、他の千言萬語、言を以て人を化せんとする今の教育家、吾其可なるを知らず。

我心席にあらず

我心席にあらず、巻くべからず。我心石にあらず、轉ずべからず。我心水にあらず、流すべからず。我心煙にあらず、消すべからず。たとひ若し大山の崩るゝとも、我心を壓迫することを得るか。たとひ若し王公の鞭を以て之を打ち、繩を以て之を縛し、劍を以て之を貫かんとするとも、能くせんや。左らば我心自ら棄てざる限り、何人にも棄てらるゝべきにあらず、人之を棄てたりとも我に影響なし。我心固く自ら信ずる限り、人いかに何を爲すとも、我に何の損益ありや。我心は我の友なり。我が信は我心の友なり。もし此一大安心と離れずば、天下行く所として何をか恐れん、何をか怖れん。

滴々の涙

夫れ名句を吟ずれば、羅生門の鬼も之に和すべし、誠なき夫も心を改むべし、敵するものも顧みて一笑すべし、此等の美談澤々として詩歌の歴史に満てり、今日の詩歌亦た安んぞ同じきの効能あらずとせん、世は亂れて洪水來らんとす、同胞は互ひに争ふて決闘せんとす、父兄同族は皆な離れんとす、此時に當りて婦女子たるもの亦た理屈を述べて父上に油を添ゆべけんや、諸君が捧ぐべきものは涙のみ、滴々の涙、もし集まる

ときは能く烈火を消へし。

一道の光明

細雨蕭々、夜定りて四邊轉た寂寥、斷續たゞ何來の漁笛を聞く、更闌にして氣愈澄み、終に胸中の煩悶に堪へず、危坐徹宵、會ま、一道の光明を密雲重疊の際に認めて、決然、枕を蹴つて起つ。

覺悟

物は極度を思ふによりて覺悟を生ず。覺悟は膽力の根底なり。氣力此上に立つ、今天れ逆境に臨まば其困苦到底何程ぞと思惟せよ。我に見榮を飾り、我に情弱の氣の存する限り、憶病の念兆すべし。試に大覺一番して其極度を思へ。逆境の我を殺すものありや、飢餓の我に迫るものありや、劍戟の首に臨むものありや。觀じ來れば、一笑に附すべく、蹴つて思はゞこれ皆我が垂訓にあらずや。斯の如きは皆我か成長の材料にして、我之によりて成長すと覺らんとき、人それ何の故にか落心氣喪するぞ。

驚愕

大臣即豪傑、議員即政事家、著述家即學者、藝者即能歌能舞と臆斷する人

あり。學校の醜聞に驚き、法官弄花に駭き、辯護士の不徳に愕き、答案の賣買を罵り、民黨の愚に、吏黨の痴に、學者の無學に、文人の不文に、紳商の獸心に、總て驚くに足らざる者に對して、強て自ら驚き人を驚かす。先輩句あり曰く、偶然風折樹、村犬吠成群、此事常難免、君聞也不聞也。

迷夢

慙むべし、人間何ぞ痴態多き。嬰兒稍長じて常德に離れ、年壯にして氣あらく、才疎にして自ら英雄とす。大抵、其爲す所は無用の事なり。誰か樹下自ら縊るゝ者を笑ふ。人間率れ自ら縊死せざるはなし。縊死する尙恕すべし、何ぞ自ら其墳墓の穴を掘らざる。昆蟲尙自ら埋め、鳥犬尙自ら隠す。人にして能く其死所を備ふる者は蓋し稀なり。

ト夢

一日、漂ふ二匹の獸は、掣擡して奔流中に團々として押流され、一個の軍人は岸頭銃を擬して奸肉皮の到るを俟つ、而して一少年七首を手にして、叢中より軍人を覗ふと夢む、去りて太史に問ふ、太史嘯て曰く、夢に非ず、幻にあらず、此東野に在り。又去りて彼の謠ふ者に問ふ、謠者叫て

曰く、千鈞の萬弩一時に響き、天肉を飛ばして血河に流る。

大悟一番

美女を見る時、虎狼と做して看、黄金を見る時、糞土と做して見る。未だ無繩自縛の迂を免れず。肚裡尙妄見あり。見を以て見を斷ぜんとする。徒らに、過捺に勞するも、泥を攪て泥を清むれば、何れの時か清ならん。美女は素より美女、黄金は素より黄金。六塵惡まさんば、還て正覺に同じ。若し夫れ大悟一番せば、天共白雲曉、水和明月流、鳶飛戾天、魚躍千淵。胸中得る有る者、觸目胥道なり。得るなき者即ち、讀書万卷するも遂に一句の會心なかるべし。

八面玲瓏

古來の天才何ぞそれ多能なる。單に之を支那に例せんも、孔子は詩に通じ、樂に通じ、當時多能を以て稱せらる。自ら居らざるのみ。後世、朱子の文に妙に、詩に巧なる、陽明のまた然る、八面玲瓏、些の疵なし。彼等は決して能はざるを以て自る誇らざるなり。

靜動の一致

心は當きに明鏡止水の如くなるべけれど、志は烈火奔濤の如く、氣は長虹大河の如くなるべし、之を收むる時、閑寂平靜ならんは、言ふ迄もなけれど、發しては万衆の標となり、激しては千丈の瀑とならざるべからず。靜と動と素と一致せずんば人生も面白くなし。

活動

凡そ、眞理は、人を待つて活動す、道は千古に明らかなりと雖も、肉體を取るにあらざれば、世を救ふ事なし、左れば女子は男子とともに教育せざる可からずと言ふの義理は、抑も誰ありて正さしく其眞理を疑はんか、即ち疑はずと雖も、信じて之を活動せしめんと欲せば、先づ活動する所の生命なかる可らず、生物ひとり生物を生む、最初に活動する所の人物なくして何如てか他の活動を刺激せんや。

奮起せよ

人生若し草木と伍すべくば止む。苟しくも一個の天分を領し、銘々不拔の職責を戴かん以上は、壽命のあらん限り、一日だも苟息して可ならんや。進まざるは退くなり。退くは死するなり。苟くも人間の尊きを知らんものは、古人に對して恥ぢざるべからず。同胞に對して恥ぢざるべからず。明晃なる我が良心に對して恥ぢざるべからず。安んぞ身を苟且に

して光陰を送るべけんや。

慨然自ら任ず

古人或は高きに登りて遠く臨み、馬に跨りて清風に御し、流れに棹して往くものに忍び、以て慨然として志を立つ。

夫れ慨然として志を立つる時、天地契合の神機、吾人感激の絶頂なり。斯の如くして天命を知り、天職を覺る。賦せられて吾人の双肩に荷ふ所の公義あることを念じ、身を國家に供して、懼然として奮發す。人若し此境遇に入れば、汚塵脱落し、清心自ら兆す。生れて此秘機に接するこゝと人生最大の快事にあらずや。

快斷を要す

昔し南泉、一日東西の兩堂、猫兒を争ふ、南泉見て遂に提起して曰はく、道得は則ち斬らずと衆、對へず、南泉猫兒を斬て兩段と爲す、政事家は此段の快哉なかるべからず。

人間の靈性

物の存在するや、其自ら立つ所以の本質中、必ず其自發する所以の靈性を具備す、金石の情無きも之を撃てば鳴り、之を研げば光あり、草木の意無きも甘露には欣々、猛雨には憎々、禽獸の智無きも羽翼長すれば巢を出て、瓜牙生すれば食を取る、皆以て見るべきなり、而して人間の靈性は其時に最完全に最精妙なる者なりとす。

至誠

千法万律、今日に用なし。徒論冗議、將に何の益あらん。去る者は追ふべらず、唯其れ一人に望むべきのみ。一人終に得易からず。願くは四千万人、一人の心、四千万人、一人なり。孰れか今日に處するに足らずといふ。

山以て覆すべし。海以て醜すべし。鬼神爲に哭し、天地爲に震ふ。恩讎兩ながら忘れ、艱難相共に濟す。至誠にあらずんば、何を以てか今の時に處せんや。

幽玄神秘

人心の感應は美妙不可思議にして、言語に絶す。精靈の徹する所、具昧有形の範圍外に超脱せざることなし。水の隠くるゝや常に進らざることなく、雲の昇るや到底凝らざることなし。人苟くも精力を積み、氣根を養はば、遂に不言不説の中だに煥發せざらんや。幽玄神秘の交通を説けば、

人往々にして曰く、是れ二十世紀理學の言論にあらずと。然り或は二十世紀の常識にはあらじ、而も次世紀の通論たらんとするを否むを得る乎。

品性修養

誠に猛省すべきは品性の修養なり。何等の經倫、何等の政策ありと雖、此根本欠乏せる時は永久終局の制勝を期すべからず、それ唯之を期すべからざるのみならず、眼前切迫せる極東時局の競争に於ても亦着々、強國の制する所となるは怪しむに足らざるなり。蓋て速かに自覺せざるや。

宗教の衰微

佛教の僧侶は何れに眠れるや、耶蘇の教師は何れに眠れるや、吾儕か人心の支配を托せむと欲するは佛耶の二宗のみ、二宗の教師今日眠りて活潑の宣教動作を見ず、蓮門一類の戲法幾千万人の拜跪を受く、是れ將た何人の罪ぞや、蓋し佛耶の耻辱ならずとせず。



杜鵑の卷

英雄豪傑

英雄豪傑の胸襟は、洒然脱然、形の捉ふべきなく、影の追ふべきなし。而して、其内、毅然一點犯すべからざるの本領有りて存する者は、以て形を役し、實を取りて名を亡し、小我を捨て、大我を收むればなり。淵嘿して雷聲し、山立して海受するは無作の作、已むべからざるの機と勢とに投ずるのみ。

英雄何物ぞ

天下何れの處に英雄ありや、仰ぎて山岳を見れば甚高し。俯して洋海を見れば極めて廣し、若し夫れ、一天霄雲を擴ぐるに於ては、蒼々として

數億万里、眼界の達する所にあらず、而して其高きこと更に數億万倍すと。此時に於て眇乎たる一人間あり。長城を築き列國を隨へ、群臣に聘呪し、云く、吾れ英雄なり、豪傑なりと、山は微笑し、川は嘲けり、鳥は歌ふ、天地の廣大なるを如何せん。

英雄と小兒

淡泊は英雄の本色、眞率は豪傑の特質なり、凡そ尤も大なるものは尤も小きし、君子大抵小兒に似たる所なくんばあらざる也。故に吾人は人の小供らしきを受し、亦た其の淡泊にして眞率ならん事を希ふ。然れども小供らしきとは、輕々しきの謂にあらず、淡泊眞率とは輕薄うす紙の如きの謂にあらず、吾人、今人の無造作なるを見、之を英雄の飾りなきものと思はずして商人の無禮なるに均しとなし、土階三等の質素なるに非ずして餓ゑたる乞食の食を争ふに似たりと思ふ、吾人は同胞の更に嚴肅ならん事を祈るもの也。

英雄如瓢

余、常に英雄を評して、瓢の如しといふ、蓋し、世人の英雄を見るは、大に余と異り、徒に豪放疎大を以て、英雄の本色とし、精細周密の之を律するあるを知らざるなり。試に、これを論ぜんか、その豪放疎大なるは、猶、瓢の兩端、脹然として、内容綽々たるが如し、而して、その精細周密なるは、猶瓢の中間、窪然として、細きが如きなり、故に、能く酒漿を入れてたすべく、紐して提ぐべし、余が、常に英雄は、猶、瓢の如しといふは、この故なり。あはれ、猿面郎藤吉が、瓢を愛して馬表とせしも、自から私淑したるにあらざるなきを知らむや。

達人高士

蕩々たる達人高士、見渡せば、何ぞ臥龍先生の多き。山谷賢あり、名主に投ぜんと欲す、賢を求め賢を求めて却て吾を知らず」と售らんかな。噫、世は達人高士の多きに耐へず、先づ鞆を飛ばす者は誰ぞ。

偉人

吾輩は其領地に、曾て太陽の歿せしことなき英國を思ふより、ニウトンステアソンを出したる英國を思ふ毎に、其國光の特に四海に冷きを感じず、ピスマーク、モルトケを出したる獨逸を想ふより、カント、ギョーテを生みし獨逸を想ふ毎に、其國の悠遠博大、靈淑純美なる氣韻に感ず。エマトソンありて米國の氣清く、ダンテありて以太利の史上光彩あり。

今や日本も亦斯る偉人を出して、世界に斯る感賞を與へざるべからず、何人か其任を負ふべき。

釋迦

身は万乗の家に生れ、美酒嘉肴、前に陳して其擇ぶに任せ、美人は侍して媚を献じ、人生の慾望爲さんと欲して爲す能はざるなし。若し普通人をして此地に在らしめば、必ずや優遊逸樂、唯不死の藥を得ざるを以て一生の大恨事となさん。彼が父、其遁世の志あるを患へ、特に三人の美妃をして侍せしめたるも、之を顧みず、富貴を擲つこと弊履の如く、遂に單身山に入り、苦行十二年、大哲理を發見せしにあらずや。

秀吉と政宗

昔者猿郎、草莽は崛起して六十餘州を掃蕩し打て一丸と爲し、掌上に弄す、雄心勃勃々尙壓かず、進んで朝鮮を侵かして、纔かに想を遣る、時未た可ならず、其目的を達する能はずと雖も、當時若し交通の道、征伐の具、今日の如く具るを得ば、猿郎の猿臂、豈に終に泰山の雲霧を挈獲せざらんや、獨眼龍は東奥の邊陲に處し、島界の事終に自由ならざるを視て、大に武を海外に張らんと欲し、竊に使臣を遣して、羅馬を窺ふ、其志成らずと雖も、其の氣、西洲と西陲とを呑むの處、豈に愛す可きに非はず。

岳飛

昔者岳飛は純潔剛正誠忠誠意の士なり、國家の危急、尋常平和姑息の策の能く濟する所に非ざるを察し、出て、外冠を攘ふ戰勝て勢全く服せんとす、而して廟堂に事を用ふる奸人秦檜の沮む所と爲り、詔赦を奉じ軍より歸て殺さる、飛の詔赦を奉するは君命に従ふの意に出づ、故に其還るや必ずしも非議す可からずと雖も、苟も國家の深患を察して、非常の改革を促さんと欲する者は、區々制法の局内に纏縛せられ、俗腸政事家の佞辯毒辭に欺かれて、大事の機を空ふす可からざるなり、

佐野源左衛門

予に一篋あり、中に和洋の服一領を藏し、上に佐野源左衛門と書す。一友、故を問ふ、曰く、佐野源左衛門なる者あり、瘦せたりと雖も、一匹の馬、弊れたりと雖も、一領の甲を藏す、これ古の志ある者の爲す所なり。今の世、封建にあらず、汚れざる一領の衣服を藏して有事の日に備ふるは、是れ今の志ある者の爲す所なり。佐野源左衛門と書する偶爾な

らんや。

志士

富何ぞ少きを患へん、夏に褸し冬に裘し、遠行には舟車に資り、社交には禮装を給し得るの財有らば、志士の志士たる所以に傷くる無し、徳何ぞ多きを患へん、身を修めて家に及ぼし家を齊へて人に及ぼし、人を化して國に及ぼす、志士の志士たる所以、多々益々可なり、若し夫れ身自ら立つ所以の資なく、朝三暮四促々として衣食に追逐され、遑々として目下の必要に生擒さるゝ者、志假令國家を憂へ生民を濟するに在りとも、固より以て活世界の實務に任すべからざるなり。

志士の感慨

百花落ち盡して狼藉たり、綠陰深き處新鶉を聽く、「殘紅新綠春如夢、腸斷山鶉第一聲、」志士の感慨、寄せて此中にあり。噫。

志士と憤世

志士あり、頭髮梳らず、衣服修めず、天真爛漫、洵に愛すべし。若し強ひて之を學ぶ者に至りては、靡々華々、氣取屋と何ぞ擇ばん、咄。一士あり、慨然として嘆じて曰く、巧に詐り巧に媚び、巧に笑ひ、巧に

傲る、是にあらずんば、以て今の世に處する能はず、何ぞ其道の衰へ世の澆れやと、小童、傍より問ひて曰く、先生請ふ嘆ずるを休めよ、品川の海鯨、まさに肥ゆ、一竿を投じて性眞を養ひ給へかしと。

刺客

願ふに、史家或は刺客を傳して、頗る贊辭を加ふるものは何ぞや。司馬遷、刺客任俠を傳して、多とするに足る者ありといふ。夫れ寡單にして備なく、寸鐵を帯びざるを不意に襲ひ、殺傷して、迹を晦まし死を免れんとする者、是れも亦刺客なり。而も史遷豈に此卑怯の徒を贊せんや。之を贊する者は、必ずや、其殺人の慘忍を以てせずして、寧ろ殺身の俠勇取るべきものあるを以てせん。一身を犠牲に供して難に赴くは、古今東西の義として許す所、故に彼の殺人の極惡を以て、猶死後に、世論の容忍を得、櫻田十七士の靖國社に合祀せられ、泉岳寺の墓場、今に香火絶えざる者は、此犠牲献身の行爲、道徳に於て抹すべからざるが故のみ

獵官獵婚の醜

兎を追ふ獵師、山を見ず。ドラ猫を追ふアチ穴を忘る。色慾煩惱に身をこがし、火宅の苦しみに自ら落入る者。人畜何れか差別を知らん、茲に

獵官熱といふことあり。六尺の男子自ら守らず、積勞の自ら煥發するを待つこと能はず、自ら價を定めて而も不相應に賣らんとす。其醜言ふべからず。之と似て可笑しきは、獵婚なり。就中、可笑きは、つまりぬ男子の淑女を求めんとするにぞありける。左れど、單に可笑しきのみならず、嫌惡、嘔吐の情に堪へざらしむるは、女が妙に秋波を送りて自ら獵婚せんとするにぞありける。男の氣の早く誤解するも馬鹿らしけれど、女の兎角、人の信切を我婚事に解釋するは、抑も身分を如何程、美人と心得居るにや、滑稽も亦甚しといふべし。嗚呼、獵官、獵婚、笑止なることは一つなり。

駙馬

嗚呼男兒生れて自ら爲す能はず、家人の力、岳父の御陸によりて立つ、面皮鐵の如き者も、心窃に恥なからんや。其胸間にひらめく勳章に對し其背後の椅子に對し、其門前爵位を録する標札に顧み、熟ら自己の經歷に鑑み、よく傲然として世人に臨むの勇あるやを疑ふは勿論、近く其夫人に對し、試みに借問し、我局長の椅子は之れ寧ろ卿の椅子にあらざるか。我爵位は寧ろ卿の受けたる榮典にあらざるかと。夫人答ふるに微笑を以てすとせよ。大丈夫、身長六尺、噫、何ぞ、それ意氣無きや。

愛嬌の必要

人に愛嬌なかるべからず。愛嬌は心を引くの磁石にして、氣を爽快にするの花なり。人間若し之を欠かば、自ら人づき悪しく、實力ありとも世間の歸依薄くなるべし。之を考ふるに愛嬌は是れ人品の美か。美に妙味ありて自ら理義以外の趣きを呈するが如く、愛嬌も亦、人の伎倆、人の識見、人の品行等の外に存して、一種の妙味を惹き起す。情感の世界に於ては、正さに欠くべからざる氣稟とす。

各國の婦人氣質

獨逸の婦人は桃花の如し、質朴にして所帯もちに長ず。英國の婦人は梅花の如し、沈重にして賢良賢良の徳あり。米國の婦人に至りては、活潑輕淡、喩へば櫻花の爛漫として春光に香ふが如し。其國によりて斯の如く女風の異なるものは、即ち其國々の氣風時好の相異なるによる。換言すれば彼の婦女子を愛するもの、理想、國により趣を異にするによる。獨逸の男子は頑強なり、獨逸婦人の自ら質朴なるは之が爲なり。英國の男子尊大なり、英國婦人の自ら自重なるは之が爲なり。米國男子は有爲

快活なり、米國婦人の活潑輕淡なる亦自ら之に因るなり。

婦人の愛情

婦人の胸は愛情の圓滿する所なり。故に甚だ温かくして且つ優し。甚だ感じ易くして又同情の念に切なり。而して極めて熱心的に、極めて献心的なり。されば此等の愛情發して一滴の涙となるは、恰もこれ、滿胸の美德を壓搾し蒸餾して之を至純の精血となしたるが如し。此涙の注ぐ所は、忽にして苦痛を樂しませ、忽にして憤怒を輕からしむ。人生もし此涙なりせば全地球は大砂漠に變すべし。

佳人に望む

佳人よ、願はくは温かなれ、信切なれ、やさしくあれ。男子の爲には、願はくは、千軍万馬相奔闘し畢り戦止みて、月高く登る夜、則ち陣後に洋々として進軍曲を奏する彼の樂隊の如くなれ。願はくはカトーの娘なり、アルタスの妻たり、耶若し國事に死せば、妾亦之に殉ずべしといへる彼の羅馬の愛國者の妻の如くなれ。

不幸の子女

予屢々彼の慈母を喪ひ、善美ならざる家庭に生育する、多くの男女兒が

其年齒の幼少なるに似合はず、才はちげ、大人ぶり、ヒガミ根性ある、曲ちくれたるを見る毎に、感情に脆き我が胸間には言ひ難く、壓へ難き憫憐の念を催うして、未だ之を袖に濺がずと雖も、心眼涙に濡へり。會此世に花の如く、玉の如き貌を賦せられて生れ、人よりは愛せられ、いつくしまれべき少女の身が、己の罪に由らずして、不幸にして善美なる家庭に生ひ育ち得ざるがために、却て人の憫みを買ひ、而も彼は自ら未だ其不幸を悟らざるものと思へば、殊更切々の情を催ふし、親しく彼等に接して我真心より流れ出づる慈悲の教へを加へて、其品性未だ頑固なるざるに於て、之を良道に導きたきの念に自ら却て悶煩することあり。

男女交際の弊

交際に慣れざる男女は相迷ふこと甚しき者なり、藪脱を以て秋波と誤り信切を以て愛情と誤り、交際上の愉快を伉儷たるに適する合性と誤り。談後、忘るゝ能はざる一種の味を以て、戀々相思の情と誤り、則ち卒然として決し、卒然として約すの大計、尤も多し悲しき哉、今の男女は交際の生娘なり、世間見ずなり、今忽にして之を驅りて自由なる交際場裏に立たしむ、其弊害果して如何。

駿馬痴漢を載す

世の實相の隨意ならぬ故にこそ詩歌小説に畫かれる戀愛の斯くは讀む人を動かすなれ。若し、ありふれて人の目に慣れたる程ならば、世上何とて可憐の艶話を歌はんや。蓋し才子の佳人娶り、淑女の大丈夫に歸ぐとは、おほかた理想にのみ浮びて、さて實際には稀有の事なり。苦々しき哉、世間の情態。眞に恰當の伉儷としては少なく、内實の眞に睦まじきは唯指を屈する程なり。凡そ年少空想の輩が唯思慮に浮べて、様々に心を盡くことの、大抵實際に合はざるは珍らしからぬことながら、空想中の空想、慾望中の慾望ともいふべき戀愛の架空談に乗せられて、偏に花と酔ひ、蝶とのみ慕ふ人のあはれさよ。眼を舉げて見よ、世の何處にか實際の好夫婦ある。

友白髮の幸福

夫婦といふものは戀らざるこそ善けれ。たとひ如何なる好縁にあふとも夫婦の中一を失ひし人の心は、何として其心を消すべきや。羨むべし、三十四十、はた五十の年月を共に過ごし、男女互に老い、白髮清心あり、老軀情こまやかにして、茶を喫し、花を摘みて、昔語りをするることの

出来なんには。人それ此の幸福を想像せずして、唯痴心に驅られ若氣に激して、容易く盆水を覆すべし、鏡を破つて、早く新装の人を戀ひとす。無情なるのみならず、また愚の極みなり。

美人

彼の窈窕たる美人、天を望めば、飛ぶ雁も雲より落ち、淵に臨めば、圍々焉として泳ぐ所の魚も沈み、又、冴え渡る明月も爲に閉ぢ、露になやめる海棠も亦羞づるに至りては、初めて佳人なりとせば、吾人は尤も之に不同意を表するものなり。聞くならく、片田舎に棲める者は杜鵑を愛せずと。これ杜鵑の餘り屢鳴き渡る故なり。彼の美人は眞に美しきものなり。されど朝々暮々、之に向はゞ、遂に何人も特別に其美を感じざるに至るを常とす。苟も、僧老同穴終生の好侶伴者たらしめんには之を愛する點、蓋し鼻筋にあらず、又口元にあらず、又其花顏柳姿にもあらずして、一種の云ふべからざる深奥の趣ありて存するが故なり。之を以て如何に美人を愛する者と雖も、其愛は皆久しきに堪へず。たとへば万青の秋に向ふ如く、遂に枯れずして止む者ぞなき。即ち人は何日までも形跡の美のみを愛する者にあらざるの證なり。

野心家

教育者にして野心あるものは曰く、衆議院議員には教育家を撰ばざるべからずと。實業家にして野心あるものは曰く、議院には實業者を入れざるべからずと。面して各々夫れ相當の理屈ありて存す、而かもこの野心に命ぜられて、職業外の事に吻を容ることなり。人は野心あれば、從て理屈も生づるゝなり、汝の野心を放擲せよ。然らば汝の理屈も從てなくなるものなり、然る後真正の理屈は、自家の脚を注意するに在るを知らん。

利口の徒

曰く經世家は斯くせざるべからず、曰く經倫家は斯くあるべしと。徒らに大言放語以て世にとはんと欲するもの、その人誠に經世の才を抱持するの人なるべきか。口と筆とは爲に彼等を養ふの唯一の道具といひ乍ら、此等の人に向ひて少しく反省を煩はさんとするものなり。余輩は彼の利口の徒を惡み賤しむ。

牡丹の卷



五條の御文誓

國民は擧げて之を肺肝に銘し、南洋遠征を試むる者、西洋に雄圖を企つる者、印度の熱天に行く者、サイベリヤの寒地に赴く者、凡て外に出づる者は悉く之を感刻し、苟くも日本人の足跡到る所亦必ず、聖言感銘の心到り、内に在る者は茅屋の民も之を記し、小學の兒童も之を誦し、無窮の子孫、亦之を紹ぎ、以て宇大に於ける最大の目的を達するの途に進まざるべからず。

國是

天下を経綸するものは、必ず先づ國是を立つ、國是を立て政畧得て施す

べく、機關得て振ふべし、國是立たずんば政府も自立する所以の本領を失し、國家も亦自立する所以の主義を失す、何となれば國是立たずんば、其の政界浮沈動搖定りなく、其機關萎靡振はず、進歩秩序共に失するを免れざればなり。

内閣の變動

内閣の變動、利一つ、民をして厭かしめざる事是れ也、害一つ、政務變轉入費の彌ふ當むこと是也。選舉競争利一つ、金融を助くる事是れ也、害一つ、喧嘩争論の入釜しき事是れなり。而して之れによりて貧民の口に温がき食を興ふる事なし、工商の職に便利を給する事なし、百姓の取實に一粒を加ふる事なし、煙は元の如く細く鋤は依然として重し。

大臣

今の大臣、大臣として果して適當の人物なりや。唯經歷を以て論ぜば蓋し適當の人物ならん。我等其他を知らず、然りと雖も、邦人は概れ人爵に眩するものなり。華族といひ、大臣といひ、何位といふ、甚だ難有ものと感ず、嗚呼止みぬる哉。

小量者、就令ひ、膽氣人に抜くも、焉ぞ以て天下の大事を幹旋するに足

らす。今の大臣として、我等其可なるを見ず。想ふに、狷介して義に勇む所あり、此所用ひて一部の長たるに足る。唯今の大臣として我等其可なるを知らず。

對藩閥の不平

區々半歳の戰功、足輕より起りて、果進二位に叙せられ、賴朝と其位を等しくするもの幾多。其他北條氏累代の位階に等しきもの推して知るべし。南洲の面前にては克く頭すら擡げ得ざりしもの、其親姻及生平愛寵せし者せる者を召し、支枝連環、今を春へと時めきし其全盛榮耀を極め後進有爲の士をして空しく壁を抱き乍ら、草莽の間に鬱屈せしむ。是れ予が藩閥に對する不平の一なり。

政治家の天爵

然らば政治家の天爵とは何ぞや。程子孔明を稱して曰く、堂々たる王佐の材にして儒者の氣象を有せりと、然り孔明の孔明たる所以は、管に其經綸に長ぜざるが爲ならずして、又文人の深致儒者の氣象あり、胸中餘裕の綽々たる、天爵自ら此中に存して、百代の景慕を惹くに足るあるを以てに非ずや、若し彼れをして出師の表を作る能はざらしめよ、若し彼

れをして梁甫の吟を傳ふるなからしめよ、天下三分の事業は赫灼として萬古に高きも、其人物の品價を低下するたゞに一等のみならず。

政治家の本領

儼乎として一定の識見を内に具へ、毅然として不拔の志操を身に有し。綽々として公義公道に終始する者、是よ之を真正志士、真正政治家の本領となす、此本領ある、必ずや一信、以て其心膽を固うし、獨立以て人の掣肘を受けざるの素有て、始めて庶幾すべし、古語に曰く、富潤屋、徳潤身、心廣體胖、と、高は獨立の計を爲す所以、徳は心膽の堅を爲す所以なり、富有て徳無き者は一の攫金動物のみ、徳有て富無き者は直に是れ喪家の狗。

少壯政治家

存朝少壯政事家とは誰ぞや、朝に立て其席班は、多くに局次長、參事官秘書官等以下奏任二三等の處に在り。曾て高等の教育を受け、また海外の政治法律を視察し、歸來時に會せず志を得ず、齷齪として、刀筆の班に伏するも、俗吏輩中に卓然矯々の氣を持つるもの亦少なからず、吾輩の目して少壯政治家となすものは、此種の士なり、吾輩の望むに未來内閣

の組織を以てするものは此種の士なり。

政治は一の俗務

政治は一の俗務なり、何の方面より入るも、決して俗務以外の趣味を感ずる能はず、然れども政治に入るもの悉く俗了せず、惟り俗了せざるのみならず、政界の神聖を保ちて、俗務を靈化するの力ある偉人亦尠なしとせず。蓋し政治家として世に立つもの、何ぞ必ずしも功名利祿の奴隷たらむ、功名利祿を外にして、別に自個の樂境を開拓し、自個の日月に逍遙し、以て高邁脱俗の趣味る感ずるを得ば、英雄頭を回して忽ち神仙たらむ、是れ豈人生の快事に非ずや。是れ豈清絕卓絶の生涯に非ずや。

此椅子可惜

僥倖的老朽輩をして久しく此椅子を獨占せしむ。偉大の經綸、何に由りて出でん。進取の大略、何に由りて起らん。活潑の精神は活潑の身體に宿る。嗚呼、此椅子惜しむべし。嗚呼此椅子、眞に惜しむべし。

議員

議場に於ける一椅子を獲んが爲に、其身命を捧ぐる者可なり、己れが黨人の慾を満さんが爲に、死生を以て争ふ者可なり。且聊か思へ、衆議院

議員として世に立つ、議長と呼び水を啜りて舌を叩くことの、幾何の譽なるかを、男子死處なきを苦しんで選舉の周旋を以て埋骨の地と心得る族に至りては、抑も亦何の心ぞや。

代議士の責任

至尊をして、獨り此の如く社稷を憂へしむ。臣民たる者何ぞ堪へんや。唯已を得ずして進むは眞の忠臣の事たり、行政整理の結果は如何、我れ其可なるを知らず、業已に其不可なるを知らば、已むを得ずして進み、宗廟家國の爲に之を排撃するは、眞忠臣の事、不可なるを知りて、曲げて協賛するが如きは不義の徒のみ、偽忠の物のみ、世亂れんとして眞忠臣現はる。眞忠臣たらんとする者、豆大に發憤せざるべけんや。代議士諸君更に挺進して可なり。

馬鹿議員

傳來の田畑迄も賣却して競争の費に充て、一方ならぬ心配骨折の揚句、遂には其望をも果たさぬ人は如何にも氣の毒なる次第なれど、何の蓄ふる處もなく何の知る處もなく無言無爲終日端坐して、目を動かすに留まり、馬鹿面を晒らして人の笑を買ふ者も、亦大に氣の毒の至りなりとす

軟骨議員

政權の問題には合し、利益の問題には相離る。黄金問題の前には、法律問題に於て被りし假面を脱して、同志相闘ぐ、利己の眞相歴然として掩ふべからず。而も揚言して曰く、我れ天下の爲にすと。世に富豪あり。大金を投じて天下の珍を買ふ。賣る者各自の珍什を携へて需めに應ず。意見を賣り、獨立を賣り、欠席を賣り、起立を賣る。買ふ者、以て大に利す、識らず賣る者の利益果して如何。

選舉

議員改選の擧ある、隨處に血を流す、其爲已に立憲政道の許容すべき所にあらず、紛々たる黨弊の亦聞くに耐へざる者あり、而も其志に於ける大に憐むべきもの、唯東都幸に黨石に銜せられず、吏民兩黨の名太だ其問ふ處にあらざるは頗る首都士民の識見を表するに足るが如きも、其實は然らず、利に従て趨向を爲し、株券の賣買に因りて被選人の可否を決し、唯利是れ其興する所たる、寧ろ夫れ甚だ卑ならずとせんや。嘗て漢の天下黄金數万斤に値すと聞く、今又東都府百万家、六万金之を左右したりと言ふ、以て吾が首都の士民を知るに難からざるべし、此の如くに

して、首都先づ腐爛し、さなきだに諸弊に耐へざる今日、四方を披靡して賄賂苞苴行はれ政道の根基を破壊して真相を蔽掩するに至らば、馴致の勢必ずしも徒爲にして已まんや、深く警めて戒めざるべからず。

政府黨

蹴りて想ふ、彼の政府黨の輩、深夜人定まり萬籟寂たるの處、枕頭に回思せば、自己の良心に怛怛たる者多く、青天白日彼蒼を仰ぐ能はず、人に面して正視す能はず、自黨員の他之を迎ふる者あるなく、演說會場に臨むも口吻嚙々、磊々落々として心事を據ふる能はず、滿目荆榛、自かから思つて斷腸に堪へざるものあらん、嗚呼彼れ不義の榮華を食らん爲自から逆境に陥りたる者、我れ唯だ憫笑せんのみ。

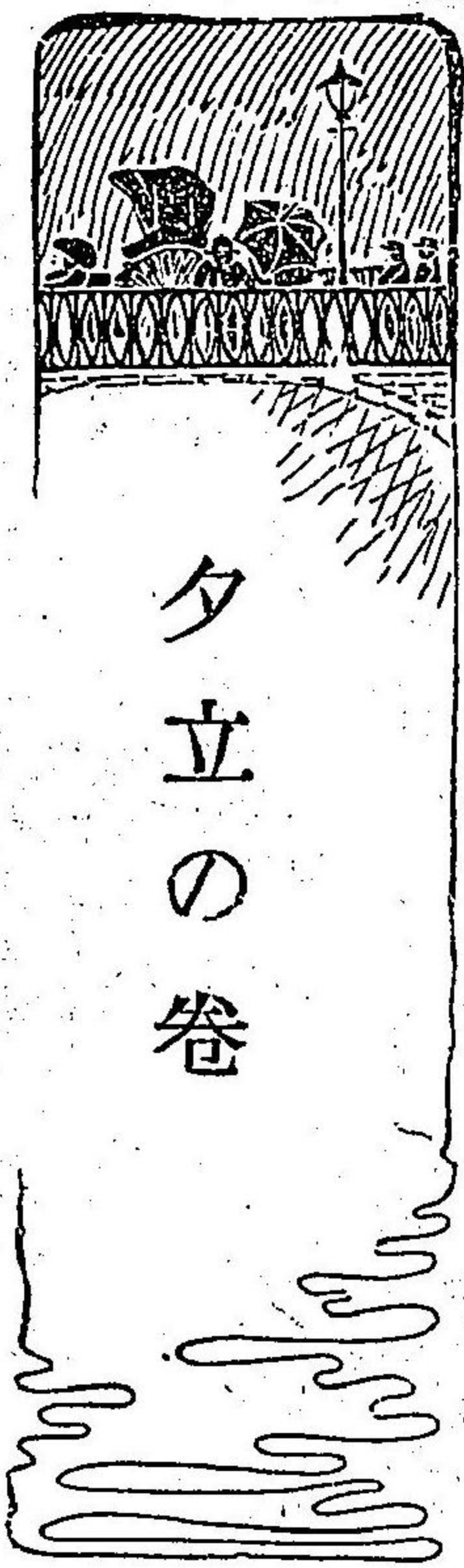
烏合黨

利害に由り、行掛りに由り、情實に由り、雷同に由り、混然として相集り、雜然として群がる。忽ち一の金翅鳥、來りて其頭上を過ぐ、争ひて之を捕へんとし、右し左し、相排し相撃つ。一團は見るまに横斷せられ而も鳥は既に去りて在らず。獨り排擠の余熱は残りて去らず。

多數制の弊

多數政治に在りては、多數を制するの捷徑たるや、買收贈賄に如く者なし。政府にして提案に多數の賛成を欲す、機密費ありて以て議員を買収すべし。實業者にして其案の通過を望む。一議員若干の紙幣を握らしむれば、唯々諾々たり。必ず贈賄の効果あるべし。斯の如くんば、代議政治も亦賤しむべき者ならずや。





雨強く降れ

嗚呼、憐むべきは幽草乎、將た黃鸝乎。潮勢動きて、岸頭に勇める舟子の胸躍る、而して舟は亦空しく彼方に漂ひて、良舟子を待つ、嗟乎。潮よ、益々急なれかし。舟は近づき來らん。舟子は躍りて乘らん。雨よ、益強く降れ。幽草は忽ちに蘇生せむ。而して黃鸝は幽谷に隠れ去れ。

濁流を撒く

主義は政治家の花萼にして、清節は其光彩なり。花は萼なくして花たる能はず。主義なき政治家は政治家にあらずして、唯公界の浮浪の徒のみ花、光彩を失ひて美なく、政治家清節を失へば德零なり。而も主義を破りて榮え、清節を汚して譽れあり。友は之を庇ひ、敵は之を寬假す。攻

むれば、我亦攻めらるゝ者あればなり。酒々相率めて以て天下に濁を流撒く。

時

時とは何ぞ。視て見えず、聽きて聞えず、捉へんと欲して捉ふる能はず空々漠々、有れども無きが如く、無きが如くし、亦實在する如し、永遠より永遠に傳り、流るれども絶ゆるとなし。其行く所を見れば、日々に去るなり、然れども來る所を見れば、永世衰ふることなし。時は果して連續したる長帯の如きか、然も其始は無始に始まり、其終りは無終に終る。吾人蜉蝣の命を得て其一小點に棲居す。揚乎として大言する所の者終に其厘毛を長短するに足らず。

時と勢

枝頭の梅花を撚つて春の來れるを嗅き、一葉梧桐の落つるを拾ひて秋の冷かなるを覺る。同じくこれ花、同じく是れ葉、彼等格別の靈あるにあらずと雖も、又能く時を代表するが故に、譽世俯仰、人の感歎止まざる所以の者は、單に勢なるのみ。時來りて百花爛熳、時去りて千葉亂散せば、また誰か梅花の香ぐばしきと、梧桐の悲しきとに胸うたんや。勢一

度去りて人頼に忘れ、溺夢忽ち破れて自ら昨我を笑ふ。今の賢にして最の愚なるにはあらざるなり。是れ時、唯是れ勢なればなり。

潮勢

海の汐するや、兒女相携へて介を汀沙に拾ふ、曾て水を以て意に經ず。一旦潮勢の發するに當てや、裳を蹙け袂を束れて、陸に向ふ、走るも猶及ばず、寸機を失すれば則ち溺る。政界の變何ぞ潮勢に異ならん、民間不平の氣、極らざれば發せず、社會變動の機、窮らざれば達せず、其發し達するに當てや、前の無事恬淡の世相は、一朝にして浩蕩奔狂の態と爲る、朱門紅樓の夢醒むるに及ばずして、血池劍山眼前に映出する事、古來其例尠からず。今の高閣に醉生夢死する者、何ぞ一たび二十四年前鐵馬嶮に嘶くの時に想ひ至らざる。

政機

政機流るゝが如く、心波活動、忽にして廢隙を衝いて鱗甲を駭かし、忽ちにして深淵に投じて飛沫を迸らす、正に是れ奔湍の勢、虚あり實あり虚の實あり實の虚あり、不虛不實あり、不實不虛有り、能く此間の靈機を脱了せずんば、爾が眼、恐らくは狡兒が浮説の飛瀑に惑ひ、爾が身、

必ず奸雄が術略の卷渦に陥らむ、

活機

達士の天下を經綸するや、神智以て活勢を看破し、靈術以て活機を制致す。活機活勢とは國家の以て已む可からざる處、民生の以て避くべからざる處を謂ふ。故に達士の進退するや、乍にして雷奔電擊、忽ちにして山立海受、忽ちにして憾乾震坤、忽ちにして烈風猛雨、忽ちにして光風霽月、忽ちにして虎吼龍躍、忽ちにして彩雲豔霞、動靜の端、捉ふ可からずして、而して人疑はず、起伏の緒、測る可からずして、而して民畏れず、百萬の財を募て、而して剛疲れず、十萬の師を起して、而して家怨まざる者は、我に意無うして而も爲し、彼に作有て、而して其自ら知る莫ればなり。

變機

奪はんと欲して先つ與へ、與へんと欲して、先つ奪ふ、是れ機なり。合せんと欲して先つ離れ、離れんと欲して先つ合す、是れ機なり。左を抑ふれば右に揚り、左を抑ふれば左に揚る、是れ機なり。鐵盾貫くべく、風幡透る可らず、是れ機なり。

機運

落花擦亂、風に隨ひて霞の如く、吾が窓に吹き入る。花吹雪の下、吾箕踞して宋史を讀み、其末造に及び、長嘆之を久しうす。開く者は落ち、興る者は亡ぶ、之を開かしむる者は風雨なり。之を散らしむる者も亦風雨なり。之を興らしむる亦機運。嗚呼、花の一開一落は風雨により、邦の一興一亡は機運にあるか。

人情の機

衣食住、これ人慾の趣く所、名譽、利財、是れ人々の均しく欲する所。世の所謂幸福なるもの、實に是れ、果して然り、衣の厚、食の豊、住の大壯を絶ち、名譽利財を委棄するもの、是れ超凡非常の士、人生、大の大なる所實に茲に存す。蓋し人慾の趣く所を斷ち、人々の均しく欲する所を捨棄する者、超凡非常の大處あるにあらずば、焉んぞ克く得んや。想ふに、人慾の趣く所、人々の均しく欲する所は即ち敗譽の燒點なり。人生の羨望嫉妬悉く此所に聚合す、即ち此機を看破し、此秘を洞察し、善く此所に聚合し來る所の感情を利導せば、社會のこと、何の紛々擾々かこれあらん。

機を制すべし

天下を改革するものは、必ず機を用ひて勢に乗じ、勢に乗じて機を制す勢を着ること決して難きに非ず、機を用ゆるも最も難し、勢に乗ずること決して難きに非ず、機を制すること最も難し、何となれば、勢は定雲上水の如く一處に在りと雖も、機は電光石火の如く得て端倪すべからざればなり。故に能く機を用ひて勢に乗じ、勢に乗じて機を制するものは必ず大有爲の政治家にして、機を視て勢に乗ずること能はず、勢に乗じて機を制すること能はざるものは、必ず無爲の政治家なり。天下を改革すると否と、國家を中興すると否とは其分る所、豈此に在るに非ずや。

廣道

吾道海の如し、億萬金を投ずるも見えず、億萬石を投ずるも見えず、億萬行穢を投ずるも見えず、能く小蝦小魚を運し、能く大鯨大鯨を運す、衆水を合して之を受け餘ありとなさず、衆水と散じて之を分つも足らずとなさず。

變幻

昨や朝嘲夕陽、山河に相映じ、濃霞淡靄、千態万狀。今や疾風暴雨、天地

震動、屋飛び山崩る。人生の變幻も亦如此。豈にたゞ天地のみならんや朝に顯貴に誇り、縲紲に苦しみ、早に錦綺を纏ひ、晩に襤褸を衣る者、これまた變のみ、幻のみ。

變 兆

滿眸の光景生氣なく、活動なく、愁ふるが如く、恨むが如く、黙して訴ふるが如く、何事か戒心せるが如く、見渡す張り、沈鬱蕭殺、蒸濕慘悴の氣を以て充つ。覺者をして、恰も英雄敗軍の古戰場を吊ふの想あらしむ。

而して唯特り綿蠻たる黃鳥は、雲上に聳ゆる嶺頭に、其妖音を弄して得々たり。而して之れに反して雄獅は潤底に其巨聲を潜む。

嗚呼、是れ何の兆ぞ、唯今日を見る者は以て無事の日と爲せども、明日を識るの明ある者は、以て變兆と爲す。

一興一亡

兩儀の下孰か爾、孰か我ぞ。千載の中、誰か興り、誰か亡ぶ。議する者項羽を非として、劉邦を是とす。記するもの靈均を悲んで、元亮を懼ぶ談ずる者太丘を夸し、茫謗を泣く。春來れば盡く是塵世の中、泥塗り上

一杯の濁酒、一局の殘棋、一枕肝睡して身内の乾坤吾に随つて收まり、吾に随つて放つに如かざるに至る。

逆 境

逆境は人才を勵磨し、又之を淘汰す。一たび逆境を経ずして、而して、人才の發揮せしことは未だ曾て有らざる所なり。若し此逆境に處して、萎靡して振はざる者は、大勢に後れて之より振ひ落されたる者と知れ。彌之に雄心を鼓舞し來る者は、即ち大任其上に臨み來ると知れ。天豈に輕々しく、月桂冠を人に與へんや。蒼生を愛する故に、蒼生を托するの人を撰むや極めて嚴密なりとす。

霹靂一聲

沈々として眠るものは、一聲の霹靂、之を覺ますべし。國久しく沈々として眠り、老奸途に塞て、小壯有爲の士、爲に進むを得ず。小猾者、忘りに横行して、仁人義士辟息す。霹靂一聲、之を振はすにあらずんば、焉んぞ國力の振興を期すべけんや。而して國眠を破る霹靂は何物を以て可なりとするか。曰く唯一法あるのみ。然らば即ち一法とは如何。曰く天機洩すべからず。

風雲急轉

幕府の昇平三百年、人心萎靡腐敗、天下盡く軟弱無骨の徒のみ。何れの處にか些の火氣あらん。而して風雲一たび動けば、突如として熊罷群り起り、其何れの處より生出せしやを知らず、唯幕府を倒すこと朽木を倒すが如し。余勢勃々我が櫻花國を推し進めて、天に上さんとせり。然るに憫むべし、恰も彼の魔術師が天地の精靈を盗みて、形を變じ、影を隠すが如く、小刀細工的の鼠輩、一時外來の勢を利用して、此勃々たる氣勢を抑壓せり。これ恰も、炎々たる猛火を蔽ふに、枯草を以てするが如し。

密雲深鎖

天を仰ぎて叫ぶものあり、傍らに在りて其言を聞く、曰く風吹くべくして吹かず、波起つべくして起たず。樹は黙して其枝を鳴らさず。梢上の鳥亦四顧して、聲を吞んで飛ばず、魚は波に躍らんと欲して、身を水底に沈む。

而して天上の雲は低く垂れて、地勢の發散を壓し、一種の青霧は下りて滿野の青草を麻酔の裡に投ぜんとす。青草はのち其瘴煙を掃はんと欲す

れば、密雲は益々下りて之れを鎖す。

騎虎の勢

天下に騎虎の勢といふ者あり。一度事を始むれば、終りに達する迄は止まざるを常とす。昔より英雄、常に此勢に驅られて或は非常の大功を樹て、或はあはれむべき末路に陥る。其妙用は小膽の人をして大膽ならしめ、優柔の人をして果斷ならしめ、躊躇の人をして雄躍の人たらしむ。天下に利あらん騎虎の勢は吾輩いつも之れあらんことを欲す。

龍と虎

玄運龍の爲に興る、虺蜺の能く招く所に非ず、颯風虎の爲に發す、狐貉の能く致す所に非ず、是を以て大人命を受くる時は逸倫の士集まり、玉帛幽に求むれば則ち丘遠の俊起る。

龍と驥

龍の潜むや、慶雲未だ附かず、則ち魚鼈と隣となす、驥の伏するや、孫陽未だ賞せず、駕駟と樞を同うす、士の鬪るや知己未だ顧みず、亦庸流を雜處す、神機洞明あるものに非らざるよりは能く分くる莫き也。

虎耶鼠耶

議論酒々、懸河の辯の如し、文藻彬々泉の湧くが如し。其舌以て人を罵り、其文以て世を嘲る。豈鑿々として聽くべからずや。是れ虎耶。一旦危機卒然として起り、急雨烈風、天裂け地動く、左支右吾、憐を乞ふに至る。是れ鼠耶。

百獸潛伏

一夜月明に、平野星濶し、獅子空洞を顧みるに幽意あり。風あるか、無きにあらず。風なきか、有るにあらず。唯無聲の聲の天地に満つるを聞く。

歩して高原の一角に立れば、清影地にあり。天高く籟深うして、唯大雪の威容を見る。山なく、水なく、野なく、岩なし。脚下低きこと幾千尋頭上高きこと幾万丈ぞ、無言の感は凝りて魂は宇宙に遊ぶ。

偽君子

鮮衣美帽、巧言令色、嬉々として自ら喜ぶ、世之を輕薄才子といふ。而して人其卑しむべきを知る。其衣を美にせず、言を巧にせず、常に道徳を説き、修身を談ず、而して裏面より觀察すれば、黄金只だ尊び名聞只喜び、小權略、小術數用ひ盡して余す所なし。世之を偽君子といふ。而

も人之を觀破すること難し。今や斯の如きの人物滔々として現出す。其面を羊するも心は即ち狼なり。

忠と貞

凡そ士にありては一諾を重んじ、二言なきを理想とし、女にありては一情に任じて、二愛を知らざるを理想とす、主死するも又仕へず、夫死するも又嫁せず。素より此事なくとも、理に於て缺くる所なしと雖も、尙人の爲し難きことを爲して、其節義貞操を完うするは、人事の頗る美しき者なり、然るに、能く士女子をして、この忠貞を果さしむるには、君の恩、厚く士の心に銘するものあり、夫の愛深くして妻の情に鑄らるゝ者なくんばあらず。賢君にして忠臣あり、良夫にして貞婦あり。

正と奸

其隠秘を摘せば、世固より正人あるなく、其情實を覈せば、世固より奸人あるなし。正と奸との分、此の如くそれ曖昧なり。而も其心に生じ、其事に見ゆる、跡の顯著なるに及びては、其間寸を以てする能はず、故に孔明涙を揮ひて馬謖を斬る、材能の獨り依るべらずして、心術の大に問はざるからず、治平の世、尤も然りとす、二卵を以て干城の將を棄

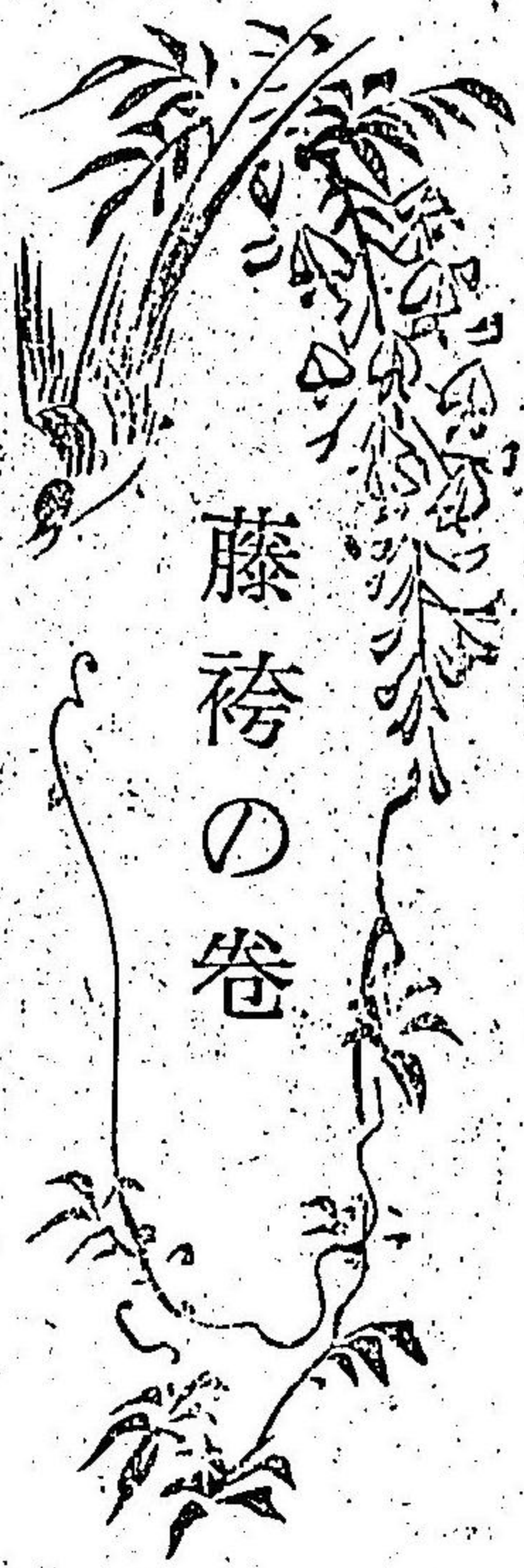
つ、これ時に中るの戒、以て恒となすべからず。

狡奴

社稷、累卵の危きよりも危く、祖宗墳墓の地、將に長く蕭條たらんとす、力微にして回天の事業に堪へずとするも、臣子の情日に悄然として、三度思を致さざるべからず。乃ち區々たる小技巧を騁馳して得々として偷安を貪り、恬然として上下の間に優悠するに至りては、抑も不臣無道の極といふべし。神洲清淑の地、決して如此狡奴の脚を容るゝを許すべからず。



藤袴の卷



乘勢

乘勢とは勢に乗る也、猶馬に乗るの如し、駿馬に鞭て峻坂を下る人進むを覺へずして而して進み、馬走るを期せずして而して走る、一飛千仞、直下前無きものは機の動なり、術の玄なり。

勢家の末路

狡々たる才臣權を頼みて國家を誤るもの、古往今來其例乏しからず、韓の勢家惠堂泳駿外兵借來の一擧、端なく社稷を累卵の危地に措き、批難蕭牆に起りて才覺其途を失ひ、辭職閑居惰々たる醜狀見るに堪へず、勢家の末路亦憐むべし。烈々たる信念耿々たる先見の明を缺き、小才を頼みて一時の權宣を制せむと欲するもの概ね斯の如し、此等の類例に鑑み

て中霄輾轉夢冷かなる人、我朝の現時になくれば幸甚なり。

士

士、一正の作用ありて、万變の妙用あり。始めて天下の事を談ずべし。天下の事を成すべし。其大本定らず、徒に譎計叛謀、出沒變化、機智を逞くするに任せば、爲さざる所なきに至らん。國家を賣るも此徒なり。人類を辱しむるも此輩なり。關ヶ原中に、小早川秀秋あり。今日亦此輩多し。嗚呼、士、此に至りて半文の價なし。

隱士

廢窟に隠ると言ふ、是れ古の事のみ、今の廢窟に隠ると言ふもの自己が牛後とならず、能く鶏口として天分を樂む所に就くの謂、即ち商に隠るも可、青英の事に隠るも可、學召に隠るも可、而して破壊なるものに至りては、余輩今にして之を悉言するを要せず、且つ王陽明、大鹽平八郎、カーライル、エマルソンの諸先生に質せ。

隱君子

老親に仕へて其喜びを喜び、妻子と和樂して風波を過じ、會心三四の友と往來して、少しは時勢をも風流をも談じ、天下の事、大將異變なき者

ぞと觀じて、深く韜晦する隱士の生涯こそ羨しけれ。茲に閑日月あり、春風徐ろに通ふ。悠々として靜かに語れば、香氣庭後の菜園より薫じ、鶏子睦まじげに群れ遊びて、人間の争鬪を知らず。嗚呼誰か這般の境涯を味はずして、偏に世に忙殺せらるゝの愚を擇はんとはするぞ。

天爵

人物の尊きは其地位に在らず、其職業に非らずして、有個の作爲せる天爵に依て乃ち尊きのみ、理想と親むものは天爵あり、靈界に遊ぶものは天爵あり、心を物の役とせざるものは天爵あり。天爵あるものは精神的快樂あり、精神的快樂あるものは命に安んじて自個の立つ所を知る、自個の立つ所を知て、出て、政治家となるものは、俗に雜に交つて俗了せず濁れるを汲て自ら濁れず、若し世に清高なる政治家あらば、是れ其個人的人品の清高なるが爲めにして、隨て其他に及ぼすの感化力は、政治家としての感化力に非らずして、個人としての感化力なり。

少壯の精神

此故に國民は少壯俊進の精神を要す、少壯俊進の精神あらずんば、大なる日本實現す可からず、大なる日本實現せずんば未だ世界の一等國たる

を得可からず。一等國の地位は唯た軍艦を以て買ひ難く、唯た碩砲を以て買ひ難く、唯た兵數を以て買ひ難く、總べての機關、總べての分子、總べての組織を擧げて、悉く之を一等國の地位に相當ならしめざる可からず。則ち少壯俊進の精神に依りて、日本の内長を計ると共に其外長を計り、努めて倦ますんば終に之を得るの時あらむ。

氣骨稜々

一士あり、資性獨介にして、氣骨稜々たり、秋毫も侵す能はず。烈日も燬く能はず。黄金を視て塵埃となし、權勢を以て糞土となす。能く人の言ひ能はざる所を言ひ、能く人の侵す能はざる所も履む。此故に小人は懼れて之を敬ひ、君子は尊んで之に親しむ。高木屢風に嫉まれて厄に罹る幾回なるを知らずと雖も、毫も、挫折せず。亭々として屹たり。何事ぞ災害しきりに臻り、遂に深く禪定に入り、復、警語を世に寄せず。我深く其志を悲しむ。

本 領

我に巍然たる本領あり、其識量、膽略、節義、才學世に卓出し、其一論を發するや苟もせず、其一策を立つるや輕しくせず、富貴も爲に淫する能はず、武威も爲に屈する事能はず、人望みて隱然重きを加ふ、然して後ち先進先覺の士と謂ふべし、否一世の政事家と謂ふを得べし。世人才藝を重んず、吾輩も亦才藝を重んず、然れども識見なき才藝は、果して何んの恃む所ぞ、世人學識を尙ぶ、吾輩も亦學識を尙ぶ。然れども節義なき學識は果して何の取る所ぞ、文質彬彬始めて君子の儒と稱すべし、徒に其文ありて其實なき者、果して先進先覺の士と稱する事を得べき乎

名と器と

名と器とは容易に假すべからず。名譽を濫授すの極、名譽遂に地に墜ちて、社會の組織も亦漸く動かんとす、今の所謂名譽なる者は、頗る汎濫に失し、時ありては全く冠履轉倒の甚しきを見る。悉く解きて一新するにあらずんば、殆ど免れざらん。

將來の毒害

曰く武力曰く財力。今や一旦の争に汲々として、百年の毒害を顧みるに遑あらず、由りて克つべき所以の者、引て援となさざるなし。彼必ず大害の源とならん。羅馬が北狄の傭兵に滅ぶ、武力の害は前史之を徴す彼の財力の毒は、天下方に之を崇拜するの日、或は未だ大に認めず、而

して滾々として過むべからざるなり。然れども横暴なるに斃れん、其運命の來るに方りてや、尤も毒を用ひし者尤も毒に中てらる。戒むべし。

精力の用

故に氣は身の主なり、精神は萬動の源なり、元氣は國家の第一必要なり。北米の殖民種族が、弊甲鈍兵丘垤の徵を以て、英軍精騎銳鋒泰山の大に當り、七年の苦戰を歴て其獨立を來し、大共和國を新設せるは、第一必要の何たるを知つて精力靈用を盡したれば也。埃及王國が西洋文物を崇拜して其法律を習ひ、其制度を學び其風俗を移して、而して國民を尊外卑我の境に促し、終に英國の屬と爲て、住民塗炭の苦むを致せる者は、精力の靈用を忘れて、元氣を以て器械の奴と爲したれば也。

感化力

感化力は源泉なくして發せんや。滔々たる水の幽遠なる所より湧き來るが如く、凡そ發して人心を刺激する程の感化力は、密室に潜かに修め、屋漏に獨り慎み、人の知れざる所に苦慮し、無用無益と見ゆる程の長日月を費して、何人も決て見ざりし所に、畜積せし潜勢力の遂に顯はれ出たるに外ならず。

勢力の豊富

忙日却りて爲す所多く、閑白却りて擧ぐる所少。これ獨り個人の事のみならずや。國家亦然り。外に偉大の事を構へ、天下の雄心方々に高躍す、是時尤も多能の時なり。多力の時なり。外忙の間に悠々として、内政を整へ、國運を進め以て餘地の得々たるを示して、精力の豊裕なるを顯はす、大國を以て任する者は、當に然らざるべからず、而も尙抑へて閑殺せんとす。時務を知れる俊傑の業に非ず。

進取と退嬰

進取の主義とは、何ぞや、徒に外國を侵す謂に非ず、強硬活潑、常に進取の地歩を占め、規模を拓開し、光威を宜揚するの道是れなり。之に反するものを退嬰の主義と爲す、孤立單行、蟻居自ら守り、苟安惟れ喜び、城内の得失に齷齪して宇大の大勢を省みず、一國の平和に汲々として、世界の治亂に關せざるもの、是れ實に退嬰主義の精神なり。

古人の工夫

蓋し、一事を成就し、一藝に秀達するは、容易の事にあらず。豪鹵放心にして安くんぞ得んや、之を思ふ事千思、之を誠むる事万試、凝念、嚴

よりも固く、所決、金銀も尙ほ恥かしきの牀ならしめずんば、如何てか得んや、此の工夫此の耐忍、此の勵克に付きては甚だ大古長老の所爲に敬服す。今人の及ばざる日遠し、されど、單に此を以て成就するものにあらず。此の難路を経、此門關に過て則ち、自由洋々の樂地に達し、初めて成業あり。

輕薄の世

今日の社會は、相見て冷笑する社會なり。事物に冷淡なる社會なり。政事家の政事に於ける、教育家の教育に於ける、各種の事業家が各種の社會に於ける、誠心誠意に自家の理想を遂行し、實試せんとする者、果して幾何ありと爲す歟。十の九までは善い加減に御茶を濁し、巧に世を渡るを以て、智者の事とし能者の事とす。此を當世の才士となせり。社會の輕薄かくの如し。嘆ずべきの極みにこそ。

舉世氣力なし

自ら城廓を設けて、高く標置し、俗界を輕視して、遠く世と相隔たり。絶えて世變を制し、人心を鼓舞し、以て一代の元氣を作興するの雄舉なし。高く樹つる者斯の如し。卓き物は唯日々營々として、文を賣り智を賣

り、勞を賣り、俗流に混じて俗流の役とす。

今人の無氣力

古の人は怒易く、小故に忿争す。今の人より見れば、如何にも度量の狭隘に、如何にも人の上たる能はざる如く思はる。然れども、今人の迎合阿附、面に唾せられて、刀を執りて立つ能はざる、雅量ある士といふべきか、人の上たる人といふべきか。吾、今人の雅量と古人の忿怒、古人の勁直、今人の柔佞との間に於て人の品性を判ずる能はず。

男子の無氣力

甚しき哉、男子の意氣の衰へたるや。堂々學ある少年、争ひて閨閥の奴となる。彼等唯一の希望は、富家の父に認められ、其娘に顧みられ、以て縁絲を金傑にからみて、之に頼つて、出世立身の楷梯とせんとす。憫むべし、其才は女子が粉黛に異ならず。十年の苦學必竟何するが爲ぞ。夫れ近時、富豪と稱する所の者、大抵知るべきのみ。拮据正誠、公明の道に循ひて辛苦せし者や殆ど稀なり。民の膏血を吸ひ、官の私偏に盗み、以て一代の暴富を爲せり。苟くも立志所學の輩たらんもの、當に鼓を鳴して責め、革覆の氣を負ひて、嚴然として之に敵すべきものとす。而も

反りて嶺々然として之に媚び、其頭腦を下げ、其腰骨を曲げ、只以て一意之が愛顧の足らざらんとするを懼る。何ぞ夫れ陋なるや。嗚乎何ぞ夫れ陋なるや。

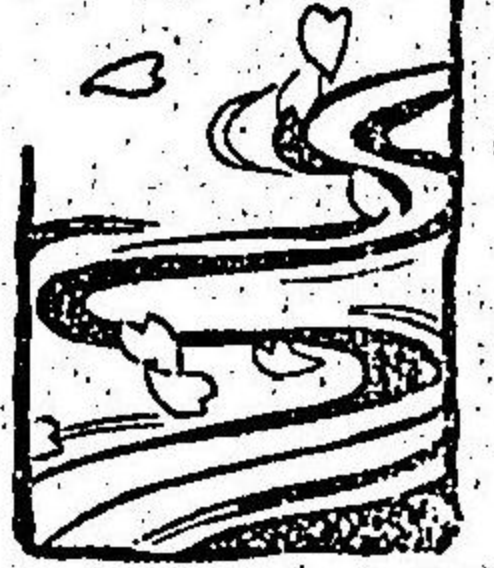
優勝劣敗

無邊の風光、觀じ來れば、社會は一の愛すべき修羅場なり、五洲は一の最趣味ある活世界なり、自然淘汰の大理は寸毫も假す所無く、一箇人として修羅場に立つ、適者は存し、不適者は亡ぶ、一國として活世界に立つ、優者は榮え劣者は滅ぶ、活機千轉の電鏡界、復讐夫情那の生存を容れざる也。

是故に列國は讎敵なり、一人は戰夫なり。電光石火簇裡宜しく、張膽明目一步も空を踏まず一語も虚に出でず、凜然敢然活眼以て活機を看、活手以て活事を濟すべし。若し夫れ學者の空想に聽き辯士の妄説に従ひ、優柔緩怠、劍聲蹄響を聞て起つ氣なき者は一國一人と共に危し。



白菊の卷



江戸子

任俠の風癢れたるや久し。今の東京兒は古の江戸子にあらず。徳川三百年の治、元祿文化の華奢時代ありと雖も、江戸子氣質は尙幕末まで其影を存したり。白柄組、神祇組等の梟白者によりて養成せられたる男伊達の氣風は尙脈々として、魚河岸蒔の者の輩に傳はりて亡びざりき。「夜更けて通るは何者ぞ、加賀爪甲斐守か泥坊か、扱ては坂部の金十か」謂ふ勿れ、彼等は暴虎馮河の徒に外ならずと。放恣是れ事とし、國法を蔑にせしと雖も、一種の男らしき、任俠の氣質は實に彼等によりて、得持せられたり。

都人士の横着

都に住むものは、朝に草露の涼風あり。夕べに河邊の螢火あり。日中

酷度の折柄には氷といふものありて、もし其一杯を傾くれば、身の内外忽ちにして秋來る。何ぞ其優幽にして快味多きや。然るを尙足れりとせず。日に數杯の氷を用ひて満ちたりとせず、團扇を用ひて足れりとせず。晝は晝寢し、夜は早寢し、而も朝は晚くまで起き出でずして、タルシくと怠けながら、尙満足せず、到底避暑の外なしとて、わざわざ山地海邊に遊ばんとす。嗚呼それ何たる無情の人ぞ。

俠氣と色氣

男兒に幾分俠氣と色氣あるを善しとす。俠氣なく色氣なければ、人間としての生趣に乏し。頑石尙多少の苔を帯び、水に濡ひてこそ面白からめ。苔もなく濕氣もなく、炎天に暴^{さら}されたる御影石は半^ま頭も見ぬふりして立ち去らん。されど色氣の過きたるは、滿面^{まんめん}荷^か苔^{かき}に覆^{おほ}はれたる石の如く、其質必堅貞ならず、俠氣の人は水底の石の如き涙の乾くひまもなかるべし。

上州長脇差

上州の長脇差の氣風は、源氏が東國を治めし時代よりの遺風と知らる。賴信義平等は宛如たる俠客の風骨あり。下りて新田氏の上野に守たる、義貞

は長脇差風と貶せられざるも、其子、義興義宗の動作は亦宛如たる長脇差的、吾、史を讀みて、義宗義興が小手差原に尊氏の大軍を破りたる一段に至り、覺えず杯を擧ぐることを三度。

財

今の都人は財を取るの道を思はずして、財を用ふるの法を慮り、事業に當るの活趣を慕はずして、宴安に流るゝの死樂を冀ひ、未來の困難を度外視して、眼前の苟且を計り、獨立自力幸福を經營するを務めずして、卑屈柔懦人の餘惠に頼り、意外の奇利を期するものなり。渠等は廉耻を以て愚と爲し、節義を以て迂となし、信用を疵視し勉強を贅視し、猥瑣卑劣なる行樂主義を崇拜して、冷笑諧謔浮噪の中に相優遊する者なり。

財是力

經濟社會の勢力は長鯨の百川を吸ふが如し。大小の鱗族、皆其併呑を免れず。社會一切の勢力皆之が爲に制抑せらるべし。故に今後の經綸は、如何にして財の勢力を制すべきかに在り。歐米の邦、財を以て國を建つ、但我國、封建を距る未だ久しからず、智の分布必しも財と伴はず。今に於て一振棹を加へ、乗じて深計を廻らさば、庶幾くは過寡きか。

拜金宗

世に籠絡の種多し。或は官位を以てせられ、或は洋行を以てせらる。而も銅臭を以て籠絡せらるゝ者最も多し。黄金輝く處、凡眼眩す、人は曰ふ、炯眼も亦往々眩すと。

黄金正しく懐に入る、故に貴し。曲りて入らば、馬勃よりも賤し、而も滔々たる拜金の世、入る所の如何を問はず、唯有つの如何を羨む。

事業

事業とは唯だ事業を爲すの謂か、業事をなすものは世の始め人の動く事を知りし以來一日として在らざることなし、何をか新たに賞めん。事業とは唯だ事業を組み上るの謂か、業事を組み上る事は子供も之を土砂の上に於てし、農夫庭造りも、之を田地庭園の上に於てせり、亦何をか賛へん。イスラエルの王、天下を主府エルサレムに在り、多くの知恵を得て日の下に作すところの諸の行爲を見たり、歎じて云へらく、嗚呼皆な空にして風を捕ふるが如し、曲れる者は直からしむる能はず、缺たるものは數を合はする能はず、日の下に人の勞して爲す所の諸の動作は皆な益なしと。事業そもく何によりて益ある。

事業家

君子にして仕事に着手するもの、深く警戒せよ、仕事に着手して善に進まんとするもの、亦深く猛省せよ、所謂る失敗とは、其仕事の破れたるの日にあらざる也、仕事成るの日、必しも事業の成就したる日なり、此に至らば區々たる金錢の損夫と、無上の毀譽と、夫れ靈性に於て何かあらん。

自由

愚なる哉、天下幾多の國民よ。彼等は世界の太勢なる俗語に脅かされ、狂奔して其自由を権力者の手に捧げつゝ、歡喜するなり、然れども久しからずして、其迷夢の覺め果つる時、自己の愚なるを悔ゆる日あるべし。我等は人類なり。他の權利を奪掠して、其虚榮心を満足せしむべき野獸たるべからず。自己の貴重たる自由を有力者に贈りて、感謝する痴呆漢たるべからず。世界は當に大に各國民が自由を要求すべき秋來るべきなり。

東西の趣味

辭長即意長とは、西洋人士の言へる事にて、東洋的趣味の容易に承認す

る所にあらず、多辯にして悉く開放露白するは、彼の習慣にして、寡言、含蓄、むしろ、黙せんとして僅かに縊思をはのめかす所、即ち我の特色なり。喩へば、春花咲き、爛熳紅白四方に相映じて、天地底意なく懐ひを露はしたるは、彼の最も樂しむ所、秋、黄ばみ、葉さび、晚菊少しく微笑して、虫吟、其感歎を訴ふるなどは、我の好んで佳なりとする所、東西の趣味、元自ら同じきを得ざる也。

殘酷なる靈長

世人皆云ふ、人は万物の靈なりと、万物の靈は万物を虚待するの權ありや、鴛鴦睦ましく池水に浮ぶ人は何の權ありて其一を殺し彼等が愛情を痛むる事を得る乎、燕雀戯むれて枝頭に轉づる人は何の德ありて之を殺し彼等が樂しみを破ぶる事を得るが、漠然として云ふ、吾は万物の靈長なりと。吾人は斯かる殘酷なる靈長に服する能はず。

小人

偉人の心ざとらまほしく、小人の情知り得たし。小人を知らざれば、爲す事々に要緊より外れて益なし。忙々役々、勞苦して而も價値なきは悲しからずや。君子往々小人を遠ざく、遠ざけて而して如何にして知らんと

はするや。人生、誰が果して大人たる幼きもの獨り幼きにあらず、人生誰か果して完人たる。白痴の子、獨り愚なるにあらず。みだりに君子小人の別を立て、截然として之を別たんとするは、夫れ何者の權能にか依る。

人間の弱點

人心それ脆弱なるかな。其平居安處、操持堅固なる者と雖も、物に觸れ事に當り、動もすれば、輒ち蔽惑恒を失ひ、情偽呈露す。途に行きて馬車疾驅喝道して來る者を見れば、厭憎の念、必ず勃然とし起る。人を避けしめて而して過ぐ、何ぞ驕泰の甚しきやと。而も一日自ら馬車を賃借し、往還雜沓の間を馳驅すれば、則ち意氣揚々忽にして昂々、車を避けて狼狽する者を見るに、其蠢駭の態、笑ふべきを覺ゆ。

因果法

人生る、生れば輒ち因果法の密網に落つ、纏々繞々破れども破る能はず。人なるものは常に此因果法の制する所となりて、所謂自由なるものこれ痴人の謗夢に過ぎざるのみ、爲さざらんと欲するも爲す可らざるあり。爲さむと欲するも爲す可らざるあり。人生は畢竟繫縛のみ、唯死や解脱

なり。無我の界、時なく方なく因果法なし、一死三世盡き十方空我は無窮となる、我は無邊となり世法の繫縛を脱して天地の悠々と合す、所謂自由なるも死の界のみ。

執着

悲しき哉、迷執の除き難きことや。貴重なる精靈を縛りて、煩悶の奴となし、偶ま人間に生れて、草花野禽の樂すら得難し。多感多情あるが故に、彌々難し、虚靈の遠く照すによりて、暗きを覺ゆること却りて長し。久しく飲食して壽を重ねるの價值何事ぞ。仔細に觀じ來りて、愕然として警醒せざる者何處にかある。

諷評

漫に譽むる者は、漫に譏る者なり、明治文學界の未だ盛んならずして、而して日に衰ふるものある、是、豈阿諛評言に毒せらるゝものにあらずや。されども阿諛的評言に敗らるゝが如き文學界はありとても頼もしくならず、敗るゝところまで敗られて、而後堅固ならば、予は深く今日を咎め

諷刺

憤怒せる議論家は未だ恐るゝに足らず、冷笑する諷刺家は却りて恐るべし。彼敢て怒せず、故に激せず、彼は好みて笑ふ、故に服せず、彼は獎勵する者の如く、喝采する者の如く、歎喜する者の如く、大悟する者の如く、而して其中に自ら一種の針を含む。故に諷刺家の戯るゝ時は人疑懼し樂しむ時は人戰慄す。一行の文字、一篇の文章、上、將相より、下、田夫野人に到る迄を動かす。文天祥の正氣歌、激昂すと雖も、其悲憤は半文に値せず。東方朔が滑稽は却て帝王を補佐せりといふにあらずや。

主義と利害

苟くも圓青を照らして、永く代の龜鑑をなす者は、元より英華果銳の才犀利剗切の手腕ありしに是由ると雖も、蓋し其人たる、主義によりて去就し、而も利害によりて動止せざりしが爲なり。偽の血、偽の涙を以ては、人の眞正なる感動を購ふるには余りに廉直なるものなり。到底人は偽善の手段に甘じては、如何なる希望も空想に了せされ得ざるを原則とす。

恩惠の記憶

恩を知りたるものは妙し。恩を施して是を忘るゝ程の人は一層妙し。俟

つ所ありて、記憶する尙更にわるし。人を恩知らずと罵しるものは、割合に恩を施したる事の妙きものなり。受けたるものは忘れ易く、施したるものは忘れ難きにぞ、世は情に始まりて争ひに終るなり。兎にも角にもうたての世や。

衆目を新にすべし

國是を一定して綱紀を振肅にし、大綱を立て以て浮費を節し、先務を示して以て虚文を斥け、勤儉質素、國防を整へ、機敏明決以て外交に處す、是れ今日革新の大本なり、革新を謀らんと欲せば、須らく天下の心目を動す所の大革新なかるべからず。

道中膝栗毛

觀じ來れば、衆議院内、何ぞ膝栗毛の狂言多き。怒罵、冷笑、滑稽、紛々として院内に滿ち、院外に溢る。一君子あり、泣きて曰く、彼等、議會の神聖を如何せんとし、國家の窮乏を如何せんとする。一地方人あり傍に問ひて曰く、國會といふ者は斯の如き者かと。一京童笑ひて曰く、明治の一九、戯作の材料を得る之より多からんと。



落葉の卷

出兵の理由

羽林の歡心を收め、野黨の氣焰を抑ふるの政略も、出兵理由中の一なり。と邪推する者あり、大抱負ある藩閥的元勳内閣に對して、多分無禮の語なるべし。

戰爭餘言

名正し、地の利善し、兵の和あり、國民一に歸す。今回の戦の如きは古來なき所、日洲安んぞ大に揚らずして、可ならんや。

大日本の伸張には一大決戦なくんばあらず、一大決戦とは一大決死を含む、義に倒れて止まざる底の決意あらずんば、茲に一大決戦あるなし。

一大決戦なくして安んぞ大國を建つるを得ん。
たゞ小捷に誇る勿れ、小捷に誇る者は豈に小敗に挫けずや、大日本、義の爲に立つの日、これ凱旋の日なり、何ぞ必しも、有形の跡を末然の後に疑懼せんとするや。

一將の兵

上に天なく、下に地なく、後に主なく、前に敵なし、一將の兵は狼の如く虎の如く、風の如く雨の如く、雷の如く霆の如く、震々冥々天下皆驚く。

武士の典型

鎌倉武士の典型として、吾實に權五郎景政愛す。權五郎 敵に目を射られ之を追殺して營に歸り、朋友に矢を抜かしめて抜けず、面に足を加ふるに及びて、勃然として怒り曰く、戰場に討死するは武士の習なりいかで生ながら頬を踏まるゝ事あるべきぞと。今や慷慨する者あり、曰く、外人と手を握りて足を邦人に加ふと、外人の跋扈、邦人の無氣力實に慷慨する者の言の如し。吾茲に於てか權五の靈に祈らざるを得ず。

武臣愛錢

文臣錢を愛み、武臣死を愛むは衰世の兆と。文臣の錢を愛む、固より不可、而も武人の錢を愛むに至りては、斷々として不可。一步も寛假すべからず。死すら尙愛まずといふ武臣、焉んぞ錢を愛まん。僧侶輩にして一旦錢を愛む情を生ぜんか。其執中、俗人が錢を愛むの比にあらず。彼等武人にして錢を愛むの情を生ぜんか、其熱中の度、焉んぞ通常民人の比ならんや。武臣は斷して寡欲ならざるべからず。苟も武臣にして錢を愛み、徒に蓄財に汲々し、美田に戀々せんか、人心離散し士氣衰滅せん

寧ろ一個の草鞋

妖雲韓山に漲て日清の衝突目睫の間に迫る、志氣鬱勃、匹夫野史も亦來組を把て從軍歌を唱ふるを聽く、國事の大變に這般の敵愾心を發揮する、眞に壯烈、而其刃未だ接せず、砲煙未だ揚らず、駐韓の兵勇健にして、古邦の貔貅皆擧げて西天を睨視するあり、胡爲れぞ、兵事に暗き人士を煩はさむ、寄語す、多血熱快の士よ、義勇軍組織の無駄骨折らんよりは寧ろ草鞋一個と梅干を献するに若かず、況んや名を貪るの狡奴、往々義勇奉公を稱するあるをや。

華族

今の華族、國家に對して何の用をかなす。惡もなせず亦善もなせず。さりとして又國家の裝飾といふ程の裝飾にもならず、唯時々、御家騒動をなして、世人の耳目を聳かすのみ。嘗に皇室の藩屏たらざるのみならず、却りて皇室の御厄价なり、尙又、人民の御厄价なり。何とか制限の方法を設けたきものにこそ。

二一 老

耆老凋喪して、余れるもの幾くもなし。今日朝野に重きをなす者、唯副島伯、勝伯、の二老あるのみ。一は天真、分を以て優り、一は人作、分を以て勝る、其書幅を觀て知るべし。昔、殷の衰へて周の興るや、亦二老あり、一は殷の爲に義を全うし、一は周の爲に民を濟ふ。後世皆之を高しとす。伯夷と太公とはなり。今の二老や、以て爲すあるべくは、亦彼の昔の二老の蹤を追ふに難からず。而も其爲すや竟に如何。

御手車

漆黒の腕車を新調して、奔馳得々歸來御歸りを叫ばしめて、庭前の廣からざるを憾む、是れ殆んど課長以上の官吏のみ、新製の公子のみ、華族のみ、優柔緩怠、曷ぞ旦夕を計らざる寒骨の民を代表するに在らん耶。

百世の大患

天下、天下を厭ふ。元氣銷するなり。一國一國を厭ふ。志氣磨するなり。草木草木を厭ふ。國家形なきなり。山河山河を厭ふ。天地色なきなり。人民厭ひ、政府厭ふ。一國散亂するなり。一國既に散亂す、亦隆々蒸蒸日上の盛を見ず。衰颯萎靡誠にこれ天下の大患なり。

貪 僧

なさけなき法師なるかな、讀經の料を收めて讀經せず。讀經の料を收めて讀經せざるは、讀經の料少なきに由れるは、云はずとも知れたる事なり。讀經の料少なしとも、そは法師施主との約束にて定まれるなり。約束の代料を收めて約束の讀經を營まざるは約束に背けるなり。約束に背きて財寶を貪るは王法佛法の共に容れざる所なり。施主、其なき父なき夫の爲に追善するとして、讀經を法師に請ひ置きしに法師布施少しとして讀經せずと聞かば、如何ばかり其心に情なきと思ひや。つらん。此頃我が家に入入するものの悲談を聞くに曰く『新しき佛の供養にと、其初七日なる日、やからうからを引き連れて、寺に詣て、堂に昇り法會を待つに、法師いててこそ。其由を役僧に問ひ聞くに、新しき佛の供養は、朝の勤め

の序に營み置きたれば、今更に營むにも及ばじと云ふ。居合せたるも皆呆れ果て、歸へりき』とぞ。あはれ淺間しき事ならずや。おやに別かれ、おつとに後れたるもの、心には如何にやありけん。讀經のごときは朝の勤めの序に營み置きしにもせよ、施主の人ども詣て來んには更に營むも如何ばかりの事やはある、百日間供養の料如何に少しとも、既に之れを收めたる上は、それ相應の事はせて置かるべきかは。朝の勤の序にとは、沙汰の限りの物の言ひさまなり。見もせず聞もせぬ事は、まこととは思はれず。朝の勤めの序にと聞きては『また、營まざりしにや』と疑はれていと口惜し。

俗 僧

佛者は紛擾を好むべき者にあらず、而も今の佛者は紛擾を好む。佛者は俗事に羈絆せらるべき者にあらず、而も今の佛者は俗事に羈絆せらる。どうせ、争動を好み、俗事にこそくするならば、彼等は宜しく、暹羅の如き危邦に遊びて、同教國の爲めに外人の侵掠を制し、又まさかの場合には、ねぢり鉢巻して銃を執りて此弱國を助くべし。亦一の義務たるべし。

佛 子

三百年の夢は破れぬ。僧侶も今は世間に慈善の業を積むことの布教の方便たるべきを悟りぬ。慈悲の學校は建つ、羶獄の説教は始まる、貧民の救恤は施さる、勸業奨励は行はる、美事は即ち美事あり。然れども僧侶に何故にかゝる美事を行ふと問はゞ、曰く以て教を布くの方便となすなりと、其喉を扼して彼をして其實を吐かしめよ、佛教に利するのみ。己が法に私するのみ、其心未だ曾て商賈屠取と異ならず、醜。爾須らく一切衆生の爲に泣くの涙あれ。然らざれば名は佛子といふと雖も、實は外道なり。

方 便

未來を説くは宗教の方便のみ。犠牲を説くは倫理の方便のみ。近世を説くは神經質者の方便のみ。方便の方便たるを自ら覺えずして、眞理なり、最大目的なりといふ者は、人は慰めらるゝ者を欠く能はざるに由る、試に汝が胸中の幻像を抉出して大悟せよ。厭世何者ぞ、樂天何者ぞ、天地自ら悠々たり。宇宙自ら寛々たり。唯覺る能はざるの凡夫、慰めなければ一日も世界に踏みこたふ能はざるが爲に、人生に宗教あり、倫理ありて

存する而已。

今の書生

往日の書生は短衣高履、揚々として「今の參議は皆書生」を高唱せしにあらずや。今の書生を見よ、其意を用ふるは唯邊幅のみ。小利口のみ、小才子のみ、的とする所唯實利に在り。故に苟合ならざる能はず、而從ならざる能はず。魏然として自ら操守して售れんことを求めざる如きは、彼等の夢想にだも知る所にあらず。既に面從たり、苟合たり、彼等何の血誠あらん。何の眞率あらん。一種の怪物たり、紅顔にして心には一種の波よせたり。共に進取を語るに足らず、革命を談するに足らず。

青年

青年は活氣なり。進取の靈火洞然として内に燃ゆ。眞前邁往唯向上を知りて、保守を知らず。未だ世故を知らず、故に猶豫なし狐疑なし。唯希望の光を望みて勇進するのみ。故に革命の大業多く、青年の健兒に屬す。青年は洵に一國の元氣なり。守成に適せずと雖も、舊物の打破、青年に非ざれば能はず。青年血誠の靈火、よく沈滯汚敗の氣を燃やし盡して之を清粹にす、一國の元氣礙滯あれば青年ありて、之を疎通し得べきのみ。

み。

大學生

夫れ大學は學問の淵源なり、學者の産地なり、是を以て大學を崇敬する情は則ち自ら學士を敬愛するの情となる。されば崇敬せる學校に出入する敬愛すべき學生の言行にして自ら他學生の眞似る所となり、恰も芝居通が福助の歩み様に倣ふ如く大學生の金時計と鳴靴とは、忽ち他書生の見習ふ所となるに至る。果して然りとせば、老成ぶる大學生の舉動は他書生の模倣する所となり、延て以て一般書生の老成ぶる心を誘發するに至るべし。今や大學卒業生及學生の一派は、嘔吐すべき程老成ぶり、嘔吐すべき程氣取るものあり、若し夫れ速に之を掃除せずんば、他日鬱乎たる拱木叢林となり、復た如何ともする能はざるに至らん。これ豈に憂ふるに堪ゆべけんや、然らば則ち之を掃除するの法如何。

學生の歸京

炎天八月の溽書漸く了過して、三々五々、手を携へて故郷に歸りし學生は、今や、秋風に送られて又上京せんとす。父母の膝下に在りて權笑を極めしもの、再び學海の衝路に勇を奮はざるべからず。秋燈一穗、書漸

く親しむべく、其山野清明の氣に身を養ひしもの、一段の勇を鼓して、家國の爲に勉められんことを望む。懽樂極りて哀情多しとか。徒に踟躕して青年有爲の時を閑過する勿れ。

學生の銷夏法

半歳、書窓の下に在りて、硯々焉として、學術の研究に従事す、勞せずとせんや。一張一弛は文武の道、況や炎帝、司命を執りて、火焰空にみざる日、一服の清涼散の能く煩熱を驅りて、精神を爽にする所にあらざるなり。學生諸君の鎖夏法、予は旅行を以て最上となす。節、三伏に入る毎に、青衫年少の諸君に勸むるに之を以てするもの、獨り肉體の強健を祈るのみにあらず、亦精神の涵養を望むのみ。山碧に水明なる地に逍遙す、決して費の多きを要せず。山水を跋涉し、或は清泉に浴し、或は海湖に泳ぎ、以て心身を養ひ以て智識を増す。他日雄飛の素を作らんと欲する者は宜しく此法を採るべきなり。

なつかしき故郷

幼き時、生ひ立ちし故郷に來て見れば、かしこの山、この水、釣りしたる淵、遊び暮せし野原など、すべて詩歌の如し。松並樹の影は昔の如

く、川原の砂子、何となく、ゆかりあり。道路の曲折、橋々の形など、靡げながら記憶せり。家居の杉も亦同じとて慕はしく窺へば、たゞ住める人の面影のみは新らし。なつかしきは故郷なり。小きも亦故郷なり。幼時の理想の大にして、今は小き眼前の風景の記憶のたゞ壯大なりけるを笑ふに相似たり。

故園

窓は青山を帯びて四時の烟嵐、枕簟に落ち、戸は小庭を控へて半輪の月華、松葉を飾り、迎へざる風は、招かざるの客を吹き、常に來りて堂に會せしめ、新に熟するの酒は舊と馴るゝの腸に灑ぎて、僅に入れば春を醸す。西池の芙蓉已に芳を胡蝶に輸すと雖も、東牆の揚柳尙風を俟つの嬌姿を存す。幸に田園未だ全く蕪せず。故山の松菊晚節の秋を約せり。

現今の家庭

今の家庭は混沌たる境界に彷徨せり。暫く天日を見ずして、正に暗黒に入り、上流社會にして、他の羨望を受くべき程の閨門に、夜々涙あり。遺恨他の野蠻の邪氣なきを羨みて、錦繡の褥に、毒蛇の匍匐するを患しむもの多かるべし。されど、思へ、上流の家斯の如くして、豈に久しき

を得んや。天下の家庭斯の如くして、豈に久しきを得んや。濁雲稍收り狂風少しく和らぎ、四面の塵大に定まりて、自ら士君子の制裁なるもの、熟せんこと遠きにあらじ。其遠からんと否とは他なし。烈士の盡力と之に同情を寄する者との足不足に之れ由る。

圓滿なる家庭

彼の麗うるはしき家庭を見よ、たとひ祝儀の器は十分ならず、春着の衣は揃はずとも、一家のつとづつま、甘く治り、心の方圓まろく整ふ時は、季節、節句のふしづくは團圓を貫くの樂しき結び目にして、其都度、悦びを新にせずといふことなし。一歳を加ふるは、老父の額の筋一つ増し、髪の毛の一筋、白くなることなれど、孫の成人と子の成業とは、歩々に幸ひを重ねて、家の祝福を増さざるはなし。父母彌々年老いて其子いよく幼な氣になり、終生親和の氣を軟らかにして、一家絶えて硬氣なし。これ眞に圓滿なるホームならずや。

歸省

或は單身、或は相伴ひ、半肩の行李、一張の洋傘、君は北越に向ひ我は東海に下らんとす。蓋し歸省には二個の快樂あり。一は即ち我があどけ

けなき眠をば、朝な夕なに見舞はれたる東窓、空にや届かん計りの鎮守の森、某の丘、某の水、父母兄弟、親戚故舊、隣家の翁媪に至る迄、親しく接するかと思へば、心中油然として自ら快なるを覺ゆるなり。即ち我親しむべき郷里を憶ひて歸るなり、他は即ち平生の鬱勞辛苦を全然放擲し、心潤く軀胖かに、胸中一物の蟠るなく、清々淨として都門の紅塵に請了を告げ、以て故山に向ふなり。

戀愛

戀する女は霞に匂ふ花の如く、戀する男は花の香に酔ふ霞の如し。盛春、花赤くして、霞濃こまやかに、蕩然として醉歌を胸吟するに似たる天地は、中々に晩秋恨み長き斷腸の虫の音を解せず、霜烈歎き多き、枯草の悲調を知らず、早春の梅が香に哀人腸を寸断するの秘密あるを解せず、暮れ行く夏の雲の色に、恨人の胸中無限の惆悵の情を寄するを知らざるなり。然れども花は凋落して碧苔に委し、霞は衰殘の暮雲と變じ、夜雨となり、痛惜の情をこめて、孤憤に濺ぎ、佳人ひとり孤檠に倚りて哀歌を愁詠するの時、嗚呼、春はいづこに花はいづこに、霞はいづこに、酔ひたる胸中の狂夢、將に豁然として醒覺し來りて、色の無常を觀するのみ。

婦女の怠弱

彼等の服装は如何に陋巷の藝奴然たるよ、彼等の來賓に接する、如何に横柄なるよ、如何に演劇に狂するよ、如何に避暑に忙しきよ、如何に慈善の心に乏しきよ、黒漆の人力車、黄金の指環の彩色爛然たる外、彼等の肉體精神より發する光輝は燕石にも値せざるべし。而して怡々として悦び、嬉々として笑ひ、たま／＼貞婉秋花の如く、凜烈松栢の如き婦人を見れば古風と稱し、野暮と稱し、田舎臭しと譏り、恰も流行後れの夏帽子視するに至る。従て内行の稱すべきなく、婦道の見るべきなし。嗚呼薄弱、此の如き婦人、安ぞ能く良人の事業と決心とを現在未來に助くることを得む。徒らに良人の事を誤り、財を摩し、名を汚すのみ。

空 想

得意満心の場合、人事暫く天に勝つの時なり。水を高きに登せ、流水を逆さまにすることも、當坐は行はれつべし。少時の空しき虚象に誇りて、嚴なる天の則を徒らに左右し得べしと思はんには、規律の弓、直に筈より脱して、必ずや人腸を貫く教訓あらん。浮萍の花の永春を期し、泡沫の珠玉萬代の飾とならんとするこそ淺ましき所望なれ、志あらんものは、身を賣めて斯の如き過あるまじきことなり。

野に置け蓮華草

野に笑ふ百合の花は極めて濃し。然れども之を紅緑千差の間より抜き來れば、其色半は消え去るべし。空に飛ぶ鳥は甚だ高尙なり、然れども之を青雲萬里の天上より引き落し來り、其足をつかみ其羽を撿すれば、雅趣悉く失せるにあらずや。富士の山は雲斷續し、氣晴曇する間に兀立するを以て美なり。琵琶の湖は八景其面を寫し、嵐山の風細波を起すによりて、美なり。大臣は雲の上にあるを以て貴く、美人は簾の中にさゝやくが故に味あり。語に曰く、やはり野に置け蓮華草と。此間の消息を道破して妙なり。

空想に馳する勿れ

徒に空望にあせりて、あたり日月を消し、無益の事に勞して、尊き人生を空しくする勿れ。吾が誠にして足り、吾が慈愛にして滿ち、吾が手腕にして優れなば、たとひ如何なる平凡の地位にありとも、活かして以て大事業の首座となすことを得べし。故に戒むべきは、吾が現在の盡瘁如何といふに在り。眞面目に吾が義務を盡し、公明正大に我が責任を果し

て業に鍛練し、事に自修して、以て彌上達せば、人生の目的は、既に過半を達したりと云ふべし。亦何をか他に求むるの必要ある。

僥倖を冀ふ勿れ

人は人次弟にて、己れの器量だけの事を行ふばかりなり。如何に僥倖を望みたりとも到底其甲斐はあるまじきことなり。一旦風雲に際會し、とんでも無き出世をなしたりとも、己れに實際の伎倆なくんば、何の詮もあるべからず。つまりは人に見られて、其馬鹿らしき加減を廣告するに過ぎず。高坐に引上げられて、其阿呆らしき面相を見物に見せ、之が一笑の料となりたりとて、光榮とはいひ難かるべし。又昔より實際に力量ある者が、わざ／＼出掛けて奔走したる例は亂世の外にはあるまじきなりわざと奔走するにも及ばず、自然に其精神が貫徹して、己れの才徳だけは相應に世の御用となりて、實地に活用せらるゝ者故、何ぞ必ずしも、高座に出て、突窟すわに坐ると坐らざるとの差を争ふべきや。



無略救蒼生

「政無偉略蒼生」とは安政年門少壯書生の愛誦せし詩句にあらずや。然り而して今日の如き撃攘鼓腹す可き昌平天地に存在するも、猶ほ且つ此の句を朗詠する者愈々多くなるは予輩の太だ解道せざる處なり。然れども予輩は知る、日本人民の多数は出山後の兩謝安が、未だ何等の偉略を作為せざるを以て、漸く待ち草臥れんとする者ある事を。

改革者

歴史は特に有形の事を明記す、如何に歴史は有形界の大變動を記載するぞ、コロムバスは新世界を發見したるに非ずや、ワットは蒸氣力を發見したるに非ずや、フランクリンは電氣を發見したるに非ずや、此等個々

の一人が発見したるの事、何等絶大の大影響を及ぼしたるか、又ワシントン
の自由に於ける、アンゼロ彫刻に於ける、アリストートルの哲學に於ける、
シエスピアの院本に於ける、ダンテ、テウサーク詩に於ける、カル
ピンの神學に於ける、孔子、釋迦、ソクテラツト、ゾロアスターの道德に
於ける、抑も幾千の大變動を起せるかを見よ、而して此等有多の改革者
は更に幾多の無名改革者を代表する者也。嗚呼改革者の事業何すれぞ無
効ならん。

改革と云へば徒らに事を起すに似たり、然れども眞の改革は尤も進歩し
たる進歩の案内なり、其性至つて世を騒がすに似たり、然れども其世を
動かすは世をして早く太平和に達せしめんとするが爲めなり。カーライ
ル曰く英雄は戦を好むものにあらず、戦つて治安の維持せんとする也、ク
リスト曰く地に泰平を出さん爲めに我來れりと意ふ勿れ、泰平を出さん
とに非ず刃を出さん爲に來れり。改革者は到る所に世を騒がすもの也、
而して其世を騒がすは世を鎮めんが爲なり。

流行譚

一國民の好尚は、以て一國民の士風を觀るに足るとせば、近時我國、就

中、都下に流行する豪傑譚は以て、我國士風の興發をトするに足るべき
か。維新の英雄、明治の豪傑、必しも悪しきにあらず、然れども、擾々たる
幾多偽英雄の面皮を捉へ來りて、以て少年子弟の指導たらしめんとす、
近來世間に英雄アルことの多く生ずる、敢てあやしむに足らず、噫。

急激なる革新

要するに明治中興の革新は、極めて急激なる刺衝を社會萬種の事物に與
へしより幾百年來帝國の民心を支配したる、獨斷的道義の教訓は忽ち其
基礎を憾搖され、理論的道義の信念未だ民心に根帯を据ゑざるにあたり、
自由の感念は從來の羈束を破り、何事の施設に對しても、簡人的競争を
選うせしが爲めに、道義の信念に先ちて、狡才譎智の發達を來し、守る
べき道義の標準を缺きて、人心徒らに輕佻の氣風に走り、公德年に漸く
頹敗して、法令隨て多きを要するの勢ひを馴致し、終に正邪、曲直、是
非、善惡、一に法令の制裁あるや否やに決し、道義の制裁たるものは、
全く其力を失したり。

保護同化

兎兎山に在り、其色純白に化す、化する者は已む可からざるの機に際會

して、己む可からざるの勢に坐すればなり、言ふ勿れ、保護同化と、保護が冥化か、兎兒何をか知らんや、其本質靈性過重の外圍物に壓伏されたるのみ。

無職の徒

文明の弊は、無職の徒を生ずるの傾あり、人をして一業中の一科一部を分擔せしむ、庶幾くは無職の徒を減せむか。分業愈々進まば亦隨伴の弊害なきにあらざれども、薄利も弘布の配分を得ば、饑餓凍寒の民を減じて、喜樂相依るの徳性に發養するに足る、經國家の懸念すべき所。

觀察の裏表

貧者、破れたる家に陋居し、燈火の幽なるに心細く感ずる時、騷人韻士の遙に之を望むあれば、呼びて風流となす。風流の人、樹梢、涙を落して花を散らすの光景に沈吟する時、勞夫役人は其氣樂を羨む。而も句を案ずるの痛苦を知らざるなり。予が知れる老夫婦郊外の住居に隠れて、日々庭前の手入を爲す。近人其幸福を羨まざるはなし、而して老夫婦は反つて之を苦とし寧ろ農家の質素を樂まんことを欲せり。凡そ人遙に望む時は、美ならざるはなし、近きて之を採れば、満足すべきもの甚少し。

人望のこと、大抵、虹霓の如く、之を遠くして其麗しきを良るのみ。

結束以可立

前原の亂、江藤の亂、西郷の亂の如きは、火焰に先つ烟のみ。海月と海嶺と章魚と烏賊と羽を生じて舞ひ、俳優と手品師と冠を戴きて技を弄す。腐れたる壁にペンキを塗り、枯木に造花をつけ、滿城春正に鬧なり。一轉して眼を深底に注げば、悲憤にして腹を割きし者の血溜りて泉をなし、慷慨して狂死せし者の骨、積て岡をなせり。此血を飲み、此骨を嚙みて生活する者數万人、其身は鐵の如く、其心は火の如く、其臂は悉く裂けたり。誰が是れ山を隔て、烟を望みて騒く其火なるを知る者ぞ、吾人當さに夕に、火事裝束して、以て夜の來るを待たざるべからざるなり。男子、此時に當りて、吉田松蔭となるも亦悪しからず、雲井龍雄となるも亦可なり。

死處

女子の他に嫁するや、皆其家を以て己の死處となす。而して教育や衣食や亦皆彼の爲にして、其生家に於ては何の益する所もなし。而も父兄見て以て常となし、毫も惜しむ所なし。而して男子遂に此の如き事實ある

を聞かず。

知止處

水は流れて止まず、然れども、低き所に到れば止まる。風は吹きて靜ならず、然れども氣滿つる所に到れば治まる。彼鳥の飛ぶを見よ。其宿るべき巢あるにあらずや。鹿の淋しく鳴くを聞け、息ふべき峰あるにあらずや。虫も露を飲み了れば眠り、草も花を開けば根を藏む。思ふに何物か、所を得ずして煩ふことあらん。聖人曰く、天の鳥を見よ、野の百合花を見よと、吾人其聲を聞きて尙安きを得ず。終生忙々嗚呼。人世果して斯此を常とするか、何ぞ夫れ然らん。

瓦礫磊々

謗彈の言、詭激の語、予輩は必しも然りと言はず、而れども其克く立國の大本を鑑み、四圍の大勢を照らして、以て當今の急務を濟し、機を制し策を盡して、其竅に中たるもの果して幾人がある、目を擧ぐれば瓦礫磊々、目を擧ぐれば瓦礫落落々々。

源由を究むべし

夫れ木の折るゝや必ず蠶を通じ、牆の壞るゝや、必ず隙を通ず、而も木

蠶すと雖も、疾風なければ折れず、牆隙ありと雖も、大雨なければ壞れず、政府の積弊今日に至て極まれりと雖も、強敵なければ傾覆せず。今や其強敵なきを以て、無爲自ら甘んじ、苟安惟り喜び、姑息の改革を爲すに止まるは、是れ猶ほ蠶木隙牆を以て、強固と爲すものゝ如し、是れ其恃むものは、僅に疾風大雨なきのみ、疾風大雨なきを以て自ら恃む、疾風大雨至る時は何を以て之に應ぜん、立憲的の政府は、決して此の如く卑屈なるべからず、決して此の如く姑息なるべからず。

又これだけ

人生は兎角儘ならぬものなり。これだけと思へば、又次のこれだけを生ず、あれだけと思へば又次のあれだけを生ず。調和又調和、權衡又權衡、人世無窮、情實を以て終らんとす。宋人歌ひて曰く、雲歸時帶霧點、木落又添山一峰。

腕 力

文明的紳士は口を極めて之を卑しめども、改革の光明は常に此力ありて生ずるなり。社會中層以下の罪は法以て之を制すべし。唯一種の罪あり。社會の上層、富者貴者の間に爲さるる者、法も之を制するを得ず、之を

制するは腕力あるのみ。名は賊にして實は俠義なる著、是を以て嘗て我邦に盛なり。今は則ち亡きか、惜しむべし。

愛 笛

浮沈定めぬ、世の仇浪に十年の星霜一日の如く、具さに苦樂を俱にせる我益友よ、愛笛よ、いまは何處に行きつるぞ、吾に天地の美を教へ、吾に快濶の性を與へ、吾に事業の快味を與へ、吾に今日の位地を與へたる我教育者なる愛笛よ、今は何處に行きつるぞ、御身とはなれて如何に余は、獨り苦海に棹さん、御身と別れて如何に余は、獨り山路を辿り行かん、今日もうき雲身にまとい、集ひ來る世の煩ひに、心も体も疲れ果て、漸く我家に歸り來て、先づ一曲をと、架上を見れば嗟吁愛笛よ、愛笛よ、御身は在らず、孤燈明滅。

探 險

衛るに軍隊あり、行くに車馬あり、金囊を滿載して、山河の勝を歴遊する、探險と謂ふと雖も此れより安全なる道中はなかるべし。今の探險を唱ふ人皆此の如くにして後其足を動かさんと試むる者、是を以て探險と謂ふ。吾も亦事に茲に従はんか。其能く一身飄然、荒野無人の境に筆

を越りて、死生の間に拾得したる材料は、甚饒多ならずとするも、固より以て一世の偉人たるを失はざるべし。其人果して今の世に求むべきか。

脱 線

汽車軌道を脱して奔る、世之を脱線と云ふ。唯之れ脱線せり、しかも進行は遂に止まるべきにあらず、脱線の危険に出會せしもの、恐らくは何等の障碍ありしに由らむ、障碍の詮索若し必要ならば、是非とも一回は機關師も亦吟味を爲ざるを得ず、是れ至當の事柄のみ、政治機關の運轉師夫れ之を思へ。

避難所

彼は時としては幽谷に下りて、暗き林中に難を避く。されど亦數々住馴れし嶺頭巨松の鬱蒼中に隠れて、恬安を貪る。蓋し巨松は千古の靈樹なり。高く雲天に蟠風して、疾風猛雨も其一枝を犯す能はず。彼れは之れを以て尤も安全なる避難所と爲す、此に逃込めば、追ふ者も遂に竿を擲つ。但洞底には時々靈松の爲めに之れを嘆するの聲聞ゆ。

童 謠

漢史を繙けば、乃ら見る、市に童謡あり、市に飛語ありと。飛語何によりて来る、童謡何によりて起る、蓋し童や無心、無我、相會し相戯れて謠ふ所、必ずしも豫め事變に感ずる所なしとせず。飛語の來る所素より知るべきなり。人は云ふ、新聞紙は社會の眞影なり、輿論の代表者なりと。夫れ或は然らん、然りと雖も、中流以下の輿論に至りては、之を窺ふ阿房陀羅經、流行歌等に若くものなけん。只それ社會變動の破裂たる、固より朝夕にして起るにあらず。日に分を進め、月に尺を進め、積りて遂に大爆裂するものにして、下等社會の勢力、決して輕視すべからざるあれば、常に目を此邊に注ぐこと尤も必要なりとす。

流鏑馬

鎌倉の祭に、流鏑馬を見る。馬は鼠の如く、騎者は木偶の如し。諺に、猫に乗りて馳驅すといふことあり。此流鏑馬の騎者は恰も鼠に乗りて駆け廻るが如し。是れ當年、坂東武者の本尊として祭れる神威に對してよく愧づるなからんや。其昔、不識庵が琵琶を聞きて、古來武道の衰へたるを嘆じたるも、誠に道理ぞかし。而して謙信の世と今の時と、其弓箭の道に於て懸隔する又果して如何。

藪入

商家の小僧、藪入の天樂日に會し、主人恩賜の三四十錢を懐にして、東都の遊觀場に羽を伸べて熙々快遊す。此一日は彼等に取て無上の放生會にして、命の洗濯日なり。洗張りの單衣、糊強き俗衣に得々怡々たるを思ば、闇覺大王も、其無邪氣を愛して頭を撫すべき也。何もの、産みなせし悪鬼なるぞ、是等可憐の小僧の懷中を盜まむとし、一日拿捕せらるゝ五十餘名、嗚呼、世は地獄よりも、赤鬼青鬼の數を加へてけり、嘆ずべからずとせず。

甲越構和

怪む勿れ。信玄の心術は明かなり。信玄始めに曰く、我れにして死せずば、謙信は決して志を成す能はずと。果して然り。甲州の鐵騎、馬を河中島に立つれば、越後の驍勇も、十二年の星霜を費して、猶且つ其寸土を復する能はず。流石の勁敵も、戰を以て之れを復するの難きを知る。乃ち信玄が武將の面目は立ちて、甲州の威名は毫も黷れず、是に至りて、互に任意を以て和を構ずるも、信玄に於て、何かあらん。

痴鳥

一鵝あり、端無く栗子を得て、屋上に止まる、腹満ちて餌愛すべし、乃ち茅を穿て栗子を藏し終り、當頭一塊の雲を標と爲して、揚々として去る、少頃にして目標の下に就て栗子を求む、雲動きて屋判ず可からず、終に徒勞に已む、至て變し易きの物を標準として、營々として相從ふ、他邦の制度文物に執着し、過去人間の陳迹も崇拜し、以て自ら擬し自ら規する者は、皆痴鵝の類のみ。

狐不能忘穴

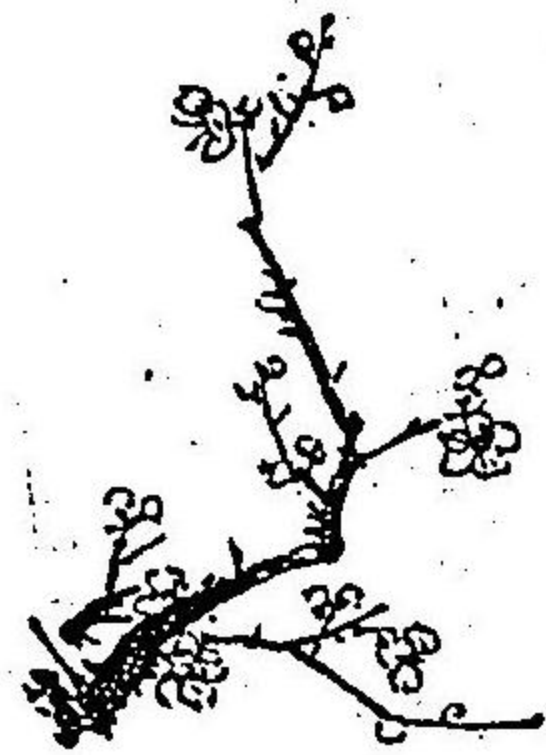
人は尤も自由を好む、政治家尤も然り。夫の専制を主張する政治家は即ち無限に治者の自由を取らんとする者なり。専制政治は獨り治者の自由政体なり。立憲政治は此治者の自由を制限す。

狐は穴を忘るゝ能はず、人は其故郷を慕ふ。嘗て専制自由の夢未だ醒めずして、我儘の快味尙忘るゝ能はざるものは、たとひ、立憲政治に入るも、機會の乘ずべきあらば、又其専制の昔に復せんとす。立憲の名を被りて、専制の實と行ふが如きは寧ろ始めより、専制に如かず。

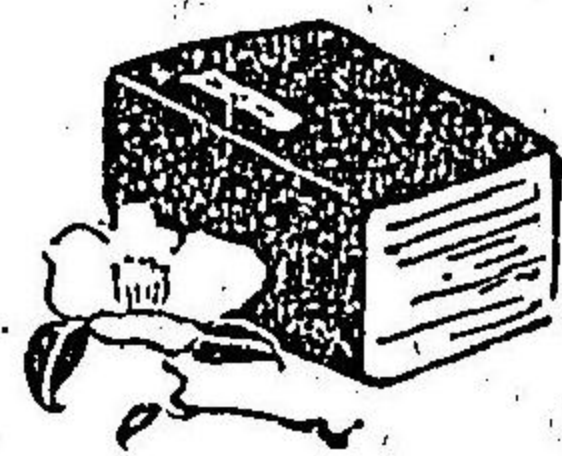
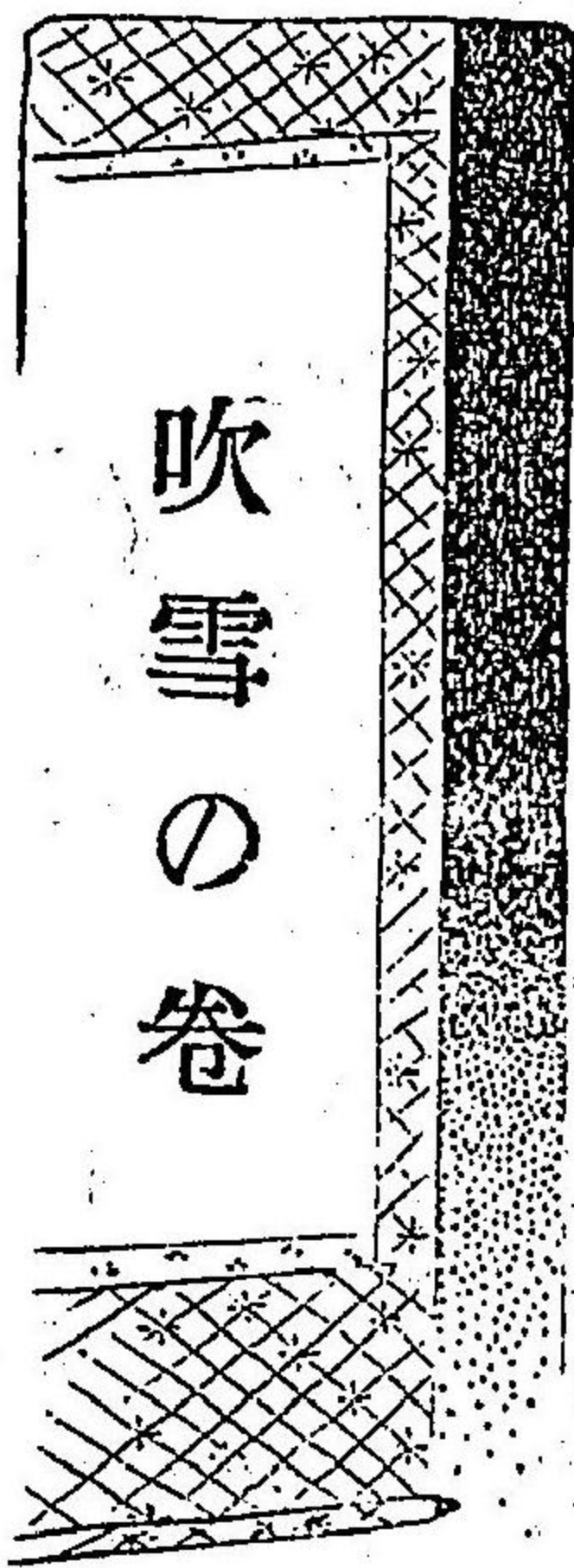
皆好し

信任投票も好し、議會解散も好し、民党の取つて代はるもよし。頑とし

て藩閥の動かぬも好し。何れにしても邦國に大なる變動はなきなり。殖民政略もよし、對外策もよし。雷の如く喧しく轟々たるも亦好し。彼の如き一流が無闇に顛轉奔馳すとも、それ將た此國家を奈行せんや。市に卜する者あり、曰く、貧富相摩し、一道の青火天空に上る、三百頃を腐爛して民臭を厭ふ、洪浪千丈滔々として中原水淼漫、四方叫喚鼎沸々、須臾にして乾坤一掃、寂靜に歸し、龍鱗を振て西方の荒野に飛ぶと。



吹雪の巻



十年後の天地

青年少壯男兒あるのみ、少壯男兒自愛せよ。十年後の天地は、皆是れ汝が天地なり、磨勵當に百鍊の金の如くなるべく、施爲、宜しく千鈞の弩に似たるべし。

新時代

吾輩は過去の涵養と將來の大望とを抱きて、更に雄偉なる新時代に入らんとす。世は方々に新なる用意に忙しからんとす。夫れ創業の際は人心勃興して元氣大に振ふ。一氣呵成の業は、多事紛々の間にも、猶よく着々として多事をなす。爲す所、簡捷明決、肺腑を穿ちて要訣に入る。矯飾なく、遲疑なく、直に事のおがるを期す、新時代はまさに斯の如くあるべし。

跋渉すべし

都門の紛々たる人生に必要なならざるにあらずと雖も、一層大なる志氣を涵養せんには、都門を離ること遠く、山高く水長く、万境自然たる所に於て、清淨の空氣を呼吸せざるべからず。況や血氣未だ定まらず、身心尙堅固ならざる少年に於てをや、若しそれ歸省の際の如きは、務めて道途を迂巡し、名山大川の間を跋渉し、時には孤枕を山驛の夢に倚せて遠く猿聲の悲しきを聞き、時には山徑歎危、古松盤蟠、細棧僅かに通ずる所、岩もる水を掬して、渴を醫す、快言ふべからず。これ知らず、智見を博くする所以なり。

新陳代謝

新陳代謝は生物世界の大則なり、苟くも一個の生物として此世に出現するや、何物か此の原則外に逸出するを之れ得んや。生物の發育成長する昨日のものは今日のものにあらず、而して今日のもの豈還た明日のものならんや、其の外形内形の月に歳に變ずるは、乃ち其細胞の月に歳に變ずるに因る、乃ち舊細胞は日に月に歳に逝き去る、豈に代るべきものな

かるべけんや。是に於てか日々に食物を調して之れを喰ふ、喰ふ所の物
 消化器之を消化し、營養器之を淘汰し、粗なるものは之を体外に送り出
 し、精なるものは新細胞を作りて、乃ち舊細胞の缺を補し、彼此新陳代
 謝し、以て成長し、以て發達す。想ふに舊細胞は沈澱的なり、將さに退
 かんとするものなり、朽衰又耄弱、腐敗せんとするものなり。之れに反
 して新細胞は進取的なり、勇壯なり、活潑なり、新鮮なり、強健なりと
 す。新舊の細胞大抵斯くの如きのみ、故を以て新の舊に換ふるや、生物
 茲に一新す。既に然り、是を以て之を推す、箇々の人類を以て組織した
 る社會も、亦た此くの如きのみ。政治上のこと亦た然り、朽衰又耄弱、
 唯々舊細胞のみを以て相寄り、相集り、加ふるに彼等の地位を保てるこ
 と二十餘年、而も新細胞を取りて之を補ふなくんば、焉んぞ頽爛其極に
 達せざらんや。

大海と高天

或云ふ、大海無邊と。されど濤の盡くる所、天垂れ雲重り、眼界咫尺に
 迫りて、一躍すれば、足對岸に達すべし。何の處か又曾て數千里の長鯤
 をして鱣の如くに群泳せしめん。或云ふ、高天無涯と。されど山岳四邊

を蔽ひ、碧蓋小なること笠の如く、一蹶すれば、頭、帝座を衝くべし。

何れの邊にか又曾て一擧九万里の大鵬をして鳶の如くに飛翔せしめん。

月明之を見る

盜あり、虚に乗じ、隣家に忍び入る。時に月色皎々として晝の如し。一
 兒を門に留めて監せしむ。須臾にして出て、問ひて曰く、人の見るなき
 かと、兒應へて曰く、唯、獨り天上の月之を見しのみと。天真爛漫の語
 は、端なく小さき唇頭を掠めて迸り出づ。何ぞ其優絶なるや。盜父聞き
 て感動し、肅然容を正し、遂に兒に謝して其非行を悔めたりといふ。

配所の月

月は靜かに鐵窓にかゝりて、冷かに囚人の面を照しぬ。眺むる程に清く
 見つむる程にさやけし。人馬の物音がすかに、同囚の人々、駒々として
 生体なし。罪ありてこそ配所の月も面白けれ。

射る如き雨、窓うつ聲激しく、風さへ加はりて、松の梢響高し。暗中警
 吏の劔、鐔々として鳴る。

思ふ人などを夢みて、やがて、夢さめ、戀しき、慕しき、かぎりなく、
 獨り夢路をたづねて、ほゝ笑むも可笑し。

日月の盈虚

輝ける太陽には哀れもあるまじく見ゆれども、入峽の山に歿せんとする夕日の影こそ寂しけれ。満月中天にかゝりて、万草鏡を磨く夜は、游子も心浮かれて吟行すらく覺ゆれども、追々に欠け行く望後の姿こそ悲しけれ。月に満ちなんとするのみ、日は昇らんとするのみと思ひし人の、忽にして諒闇に會ふ。歎豈何ぞ禁ぜん。

日月の流過

去れるの歳は、徒に去らしめたり、悵恨何ぞ及ばん。且つ問ふ新春第一日、徒に消過せざる者、天下何人か是れ。あゝ流年之を如何せん、公道世間唯白髪、紅顔の少年、一場の昔語りとなりぬる時、人の傳記を讀むを厭ひて、子弟の教に順はざるを懊惱す。之をよそ事と聞流すこと勿れ眼を擧て赫々たる爾が希望の裏面を看よ。

月光

村外に月を観る。白雲漠々、月光其間にかすむ。一面の郊野、羅を以て被はれたらんが如く、淡黒の樹木三々五々、其間にあやどる。寂たり、幽たり、獨り美妙を樂しむ。

班點

天象を司る者、近頃太陽に班點を生ずと報ず。霖雨連日、米價騰貴して、民は菜色あり。太陽の班點、焉んぞ其變象を示すにあらざるなきを得んや。支那の太史をしてトせしめば必ず爾か云はんとす、呵々。

海上の王

我大和民族、亦、東半球に國する者、漫りに魯仲連を學びて東海を踏む勿れ。風雲叱咤、少くも蘇秦ぐらゐの手腕を振ひ見よ。更に遠大の計を立て、暫く其實力を涵養すべし。第二十世紀、東半球の戰國時代、最後の勝利は必ず海上の王たる者ならん。沛邑は正しく太平洋上、蒼波淼茫の表に在り。

涇水と渭水

涇、渭を以て濁る、涇と渭とは則ち清濁各々自ら立つる所あらん。而も細流を擇ばざるの滔々たる河水は、則ち涇と渭とに擇ぶなく、以て自ら河水を成就して其一味を致すなり、霸政の遺習、王政の復古、泰西の新文物、彼は此に異なり、此は彼に同じからず、以て相排し相付する所あらん、而も來るべき新時世、新國民は調和融合して、盡く之を其の形を

成すの分子を做し了らん、而して二重三重の結果は、此に合して一大結果を生ぜんこと、疑ふべからざるなり。

桑田の歎

是故に凡百の生物個々に就きて之を見れば、孰れも壽命に畛域ありて、永世無窮に生存すること能はざるのみならず、其畛域に於るも、短かきは二三十年、長きも二三百年に超ゆることなし、之を天地日月の無窮なるに比すれば殆んど電光一閃の間に過ぎずと雖も、亦其全牀に就て之を見れば、子孫相繼承して其血脉を傳ふるの久しき、人をして殆んど生物の壽命の永世無窮なるかを疑はしむるものあり。松柏の摧けて薪となりたるも、古來果して幾干ぞ、而して松柏は今も尙到る處に繁茂せり、人間の死して黄土に委したるもの、古來果して幾干ぞ、而して人間は今も尙到る處に繁殖せり、豈又奇なりと云はざる可けんや。

公明磊々

たとひ、小事に於て撞着するも、大事に於て一致するの意、吾儕、確乎として不拔なり。吾儕が公明磊々たる心事、斯の如し。乃ち論すべきは論じ、糺すべきは糺し、究むべきは究む。大國の民は事に狂して、万

事を忘るゝの愚をなさず。外に偉業を企て、内に綽々たる餘裕を示す吾儕の與みする所なり。

嘆又嘆

上流無責任の輩、徒に太平を謳歌して豪奢に耽ける者あり、されど蹴りて下層を顧れば、飢に泣く者あり、貧窮、心を刺す者多し。又方今の文章を見れば極めて氣骨なく、小説を讀めば極めて卑猥なり。士君子と語れば、其自任の薄きこと商人の如し。論客と語れば俗人に均し。試に尤も頼とすべき青年諸君が言ふ所を聞けば、放肆怠惰、たゞ名利を饒倖するのみ。嘆すべし、嘆すべし。

誰か定遠たる

大洋あるを知て大陸あるを知らざるは今日の英國なり、然れとも一彈丸の孤島あるを知て、洋海あるを知らざるは、日本人なりき。今や世界の新潮、注ぎ來て南洋諸島に向へり、而して孤島の人士、蹶然袂を投し筆を抛て萬里破浪の風に乗ずるもの、踵を接す、嗚呼乘槎定遠、誰か先鞭を着するや、

明鏡に恥ぢよ

嗚呼天下を正すの身を以て己を正さず。世を導くの身を以て世に疑はれ自由を興ふるの身を以て、己れの自由の意志を賣り、人生を照すの身を以て、己れ先づ暗きに入り、高く俗流に抽んづべき身を以て、己れ下りて俗流に落つ。斯の如くして能く職分を果すを得ば、盗人も天下に良民たらん。嗚呼、汝が朝毎に向ふ明鏡に對してよく恥づるなきか。

安危

政界猶水路の如く、行舟の險、柄政の危きに比すべからざらんや。齎を刳中に入れ、水腹に息ひ、晶を箝蔽の下に取り、柳は虧るに漸す。或は再月止まる所に抵ることを得ず、舟師洋を候し、盲風森として作り、水風と争ひ、軸艫崩傾し、雨降り且暮る。烏干此時の境際察するに絶えたりといふべし。而もこれ河に浮び江を亂にあらざれば、意到り胸量る能はざる所、政界亦斯の如し。

可笑味と空威張

人間一分のチカシミありて可なり。トボケ亦少しく妙。擾々たる官奴の厭ふべきは、概してチカシミなき人物にして、之あるも、戦々競々として、容易に顯はし得ざるを以てなり。死人の相あるを以てなり。

威張らんと欲せば、いばるべし。から威張はなすべからず。曰く吾は英雄なりと。若し果して英雄ならば、英雄らしき舉動をなすべし。之をなさずして、唯英雄なりといふ。言ふに足らざるの徒なり。

左團扇

世人は女子を産みて、左團扇の安樂を希ふ者あるを冷笑するを知りて、却りて男子を産み、之が顯達を庶幾して、寄りて以て餘生を貪らんと欲する者を咎めず、娼妓固より賤業、藝妓亦好家業にあらず、然も男子の業務に比して、大に優れるあるを知らずや。況や男子の業務にして、彼賤業者と敢て徑庭なき者あるに至りては、予輩、豈に長大息せざらんと欲するも得べけんや。

相撲番附

新番附は成れり、進む者あり、退くものあり。想ふに扼腕して四方柱に力瘤を角して憤慨する者は、往年の伎倆を追懷して、力の追々に衰へたるを悲しむ者ならん。而も各自の力量次第によりて、高下すること、相撲の番附ほど確なるものはなかるべし。奮動を恃みて、目今の伎倆を顧みず、若くは權勢に依頼して、身の榮華を致すもの、能く此年々に新た

なる相撲の番附に愧づるなきか。

一箇の世界

遇はざるも可、遇はずとて山には入るまじ。山は登ゆるのみ。容れられざるも可、容れられずとて水には入るまじ。水は流るゝのみ。終生遇はず、容れられず、寧ろ快、盡くるなき世の盡くる迄も、猶遇はず、容れられずば、快更に大、其時予は一箇の世界たることを得なければなり。

萬國無比

人種一、言語一、歴史一、皇帝万代一系、國土古來常に同一君臣とし、同胞とし、祖孫としての縁故歴然として古今明かに存すること吾が日本の如きはなし。凡そ國民としての同化一致を形成すべき資格は、すべて日本に於て最も完全に最も悠遠に具備せられたり。國民として、日本の如きは萬國に比類なき所なり。

天下太平

陰雲怪霧次第に鬱積せしが、俄然霹靂一聲、電光四射して、天上の大暴れんとなりぬ。然し夫れは「おかみ」の事なり。大臣方如何に交替するとも、大日本帝國に左程の影響あるにあらず。車夫は走り、おさんは水を汲む。天下は至極太平なり。

天下の大観

蓋し天下の大観は、大舞臺に非ざれば、盡すべからず、大文章、大品格、大規模の妙機靈腕は、亦大舞臺に非ざれば極むべからず。風雲月露、一字の奇を衒ひ、一句の妙を求め、區々として章句の間に拘泥す、文章安んぞ偉大、雄大、正大なる事を得んや。一情一愛、別に變化なく、別に趣味なし、得々として俗男俗女の痴態痴情を説き來り、説き去り、以て妙を穿てりと爲す、品格安んぞ能く、道義、節操、徳量あるを望むべけんや。屑々として目前の事に拘泥し、天地の大、乾坤の美を描き出す事能はず、皮相短見、小冊片簡、自ら誇る、風趣安んぞ能く明快、精緻、優美なる事を得んや。氣宇狹隘にして、孤島の外に出づる事能はず、眼光卑低にして乾坤を見る事能はず、思想淺薄にして大世界を知らず、規模安んぞ能く世界的、歴史的、宗教的、哲理的の大を包括する事を得んや。



煤掃之卷

國家と國民

國家は主上の權能を有す、人生實際の生活に關與し得ざる所無し、然れども若し夫れ人性の圓滿なる發達を沮害するが如きは、善良なる國家の意志と稱するを得ず、國民として國家保護の中に生活する間は、如何なる法制に向つても、絶對的服従を表せざるべからざるは勿論なりと雖も、吾人は常に吾人が國家を結成したる當初の目的に照鑑して、人生究竟の意氣を遺却せざらむことを希望せざるを得ず、國民的道德は常に是の如き樞要に關して一段寛裕なる見地を存せむことを要す。

國民歌

國民歌を撰べ、是れ民心統一に不可欠也、一定の國體あり、一定の國民道德あり、而して一定の國民歌無し、大典不儀に際して國民の謳歌せむとするも、其れ何に由らむとするか。

君が代の歌、洋々太平の象あり、尙ほ沈靜幽寂の格調あるを恨みとす、未だ生々的、進取的、尙武的なる大和民族の血心を鼓舞するに足らざるなり、吾人は國民的大抱負と國家的大理想とを發揚せる更に雄大更に壯烈なる國民歌を要す。

歌人よ、樂家よ、眼を擧げて是一大事業の剗等の頭上に懸れるを見よ。

西郷南洲

我那歴史的英雄多しと雖も、南洲の如き悲劇的生活をなしたるものは甚だ少し。想ふに南洲は高邁磊々の士、一たび志を廟堂に得ざるや、冠を掛けて故山に歸耕し、誤りて知己青年の推戴する所となるや、情義之と絶つに忍びず、忠烈の高士、甘んじて叛賊の汚名を受け、笑つて殘骸を擲ちて數弟子に附し、當世紛々の毀譽を排して、喟然として千年の知己を俯仰す、何ぞ其事跡の悲劇的なるや。作劇家の好題目、何物か是に加んや。今日の文人往々にして、指を爰に染むるものなきに非ずと雖も、是

の老雄千歳の肝膽を照すもの絶てなし。嗚呼我が作劇家は何故に是の好題目を捉へざるや。

奈翁と義經

舞臺小なれば、其演ずる所も小なるは止むを得ざることなり。ナポレオンは大陸を其舞臺とせしと雖、義經の舞臺は日本の島國なりしなり、然りと雖、吾人は義經とナポレオンとの規模の大小を此に論ぜんとするに非ず、何となれば時勢と、文明と、地理上の差異甚しく、共に比較すべきにあらざればなり。然りと雖、余は其氣象に至りては、此兩英雄の大きいに似たるを感ず。ナポレオンがイタリヤを征伐するに當り、人ありて曰く道にアルプスの高峻なるあり、以て軍を行る可からずと、ナポレオン曰く、道なければ道を作るのみ、何ぞ我行軍を妨ぐるアルプ山あらんやと、乃ち道を作り準備をなし以て大軍を送る、之を以て義經の鶴取越に比較するは餘りに大小の差ありと雖、其鹿も四足、馬も四足、鹿若し此坂を越え得るとせば、馬何ぞ能はざらんとして、衆に先き立て騎馬して此坂を駆け降りたるが如き、其氣象のナポレオンに比すべきものあるを見る。ナポレオン常に敵の間髪を容れざるの機に乗ず、之を以て兵士

に取りて多少の無理、苦痛を與ふることあるも、決して機を逸せしむることなく、疾風の如き速力を以て進行して、先を制す。義經が梶原景時の逆櫓論を排し、進むあるも退くを知らずとなし、暴風雨を犯し船を發して敵を破りたるが如き、又ナポレオンに比すべきものあり。吾人時に思ふ、義經をして大陸に在らしめて横行せしめば如何ならんと、然り、源義經は亞細亞大陸を蹂躪したるシンギスカンなりとの説の起りたるも、亦偶然に非ざるなり。

断々一介之臣

余書經秦誓を讀みて左の句に至りて大に感ずる所あり、曰く『若し一介の臣、断々として他の技能なく、其心休々としてそれ容る、有るが如く、人の技あるは己之を有せる如く、人の彦聖なるは其心之を好みし、管に其口より出だすが如きのみ非ず、寔によく之を容れ以て能く子孫黎民を保んぜば、尙くは亦利あらんかな、人の技あるは媚疾以て之を惡み、人の彦聖なるは之れに違ひて通ぜざらしめ、寔に容るゝ能はざるは、以て我子孫黎民を保んずる能はず、亦殆い哉』と。多技多能心しも天下を安んずるものに非ず、國家の光榮を重んじ、國民を導きて高尚なる教化

に浴せしむる者は、其誠意断々たる人にあるべし。一國一人を以て起り、一人を以て亡ぶ、若し誠意の士一人天子に臣として立つに於ては、國家は實に安泰なるべし。能く耳目を聰明にし、人才を野に擧げ用ゐ、決して抑塞せしむるなくんば、國政大に見るべきものあらん、一國に宰相たるものは、希くは其断たることを以て其所立とせよ。

スバルタ國

スバルタは尙武主義の國にして、リクルゴスの法律は普く人の知れる所なり、之に付て種々の話あり、或人スバルタ人に問ふに、スバルタは何故に壘壁を築きて防禦せざるやを以てす。ハバルタ人答へて曰く「スバルタは已に人間の壘壁あり、又何ぞ煉瓦及び石などを要せん」と、アリストフアネーアの戯曲中に記せるに、アテーナイの婦人スバルタの一妻ラムヒトと云ふ者に挨拶して曰く「あゝスバルタの人、あゝラムヒト、貴女は眞に美なりと云ふべし、其容貌は誠に活潑なり、貴女の如き強壯美麗なる身體にしては、能く牝牛をも絞め殺すことを得なるらん」と、婦人も亦答へて曰く「妾も亦必ず能ふべしと信ず」と。又スバルタの一母に五子あり、軍に従ふ、母其戦争の始まりたるを知り市外に出て

て報道の至るを待つ、一人來り告ぐるに五子盡く死せるを以てす。母其人を叱して曰く「卑きなるかな汝奴輩、此の如きは我聞かんと欲する所に非ず、我問ふ所は我國の勝敗如何にあり」と、其人曰く「我國勝利なり」母曰く「然らば喜びて我子の死を聞かん」と、此の如きはスバルタ人の精神なり、歐洲に於ては甚だ珍らしく傳ふる所なりと雖、日本に於ては此の如きは左程珍らしきものに非ず、我國の武士道に至りては亦實に勇壯高潔なるものにして、スバルタ主義も或は又歐洲中古の勳爵士なども遙に及ぶ可からざるものなり。

聯句と妙味

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必滅の理を顯はす、といふつまらぬことなれども、人の感を惹き易し、蓮如の『白骨の御文』は文として妙味なけれど、事柄が事柄だけに人を動かす事あり。劉延芝の『代悲白頭翁』の結末に彌陀佛の類一二句附け加ふれば『白骨の御文』の良漢譯を得べし、ついでに『百年同謝西山日、千秋萬古北邱塵』も何處ぞに這入り得ば、益々佳。かの和讃に「されば人間のはかなきことは老少不定の境なれば」といひ、而して直ちに「誰れ人も

早く後生の一大事を心にかけて、阿彌陀佛を深く頼み參らせて念佛申すべきものなり』といふには餘り商賣じみたり。さればこそ風來山人の『南無とは南無と書たる文字にて、死んで仕舞ば皆身無、後生を願へといふ心』、『嵯峨の釋迦でも、善光寺でも、開張に出る事は、衆生濟度は勿論なれども、二つには參詣の賽錢をによらう故に、そこで如來と申』と言へるは面白しく聞ゆ。然れども『老少不定の境なれば』と『誰れ人も』と間に識者の噴飯せざるが如き聯絡を附くる者あらば、此者は洵に大宗教家なるべし、坊主共、試みては如何。

重量と快感

輕薄なるものは愉快に感ぜらる、帽子は輕くして薄きを快とし、衣服も輕くして薄きを快とし、布團も輕くして薄きを快とし、荷物は猶ほ更ら輕くして薄きを快とす、凡そ膚に接觸する、輕薄なるより快なるあらんや。然れども霜氣森々、風稜撼々たる夜、着る所は重きを厭はず、纏ふ所は厚きを厭はず、彌やが上に彌やに衣類を着重れんと欲するなり。荷物も價あるを欲せば、決して重きを厭ふべからず、横須賀造船所は終に百噸引き揚げの必用を感ぜり。

宗教觀

吾人の宗教觀は極めて簡單也。宗教の主性は迷信なり、所謂宗教の改善は進歩に非ずして滅亡なり。世に宗教哲學なるもの無し、もし有りと思惟するものあらば是れ一の迷のみ、唯宗教に關する科學としては宗教史と宗教心理學とあるべし。前者は人類迷信の變遷を説述し、後者は迷信の人心に於ける心理學的根據、換言すれば、人は如何に迷ひ得るか次第を明かにす。

宗教が人世幸福問題と關係するの多少は、國民精神に於ける宗教心の多少に依る。宗教と稱する人心の病的現象に對する吾人の意見即是のみ。

花と宗教

花と宗教との關係や極めて親密なり、佛者は花の散るを見て人の無常を教へ、拈華微笑の中には無意の意味を含ませて佛理を説く、耶蘇教も亦花に由りて人世の無常を教へ、耶蘇は百合花を以て比喩として、人は一切神に任すべきを説けり、朝顔の花は、無常を説明するに最も數々用ゐらる。和泉式部の歌に

『有りとても頼むべきかは世の中を

知らずするものは朝顔の花』

と、祇園精舎の鐘の音、諸行無常を告ぐるなり、『沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を表はす』と云へるが如き、皆これ諸行無常主義の説明としての花を云へるものなり、西行法師は花を以て臨終の安心を教へんとて、伊勢にてよめる歌

『神風に心やすくぞまかせつ、

櫻の宮の花の盛りを』

と、これ寧ろ佛教的に非ずして、日本主義の死に就ての觀念を云へるものなり、厭世家等は、死に就て畏懼の念を懷き、言説する所極めて多しと雖も、日本主義の死に對する觀念は此くの如きのみ。

死者を思ひあきらむるに素性法師は

『思ふとも枯れなん人をいかにせん

あかず散りぬる花とこそ見ぬ』

と云へり、然りと雖も又反對の意見を以て赤染衛門は

『去年の春散りにし花は咲きにけり

あはれ別れのかゝらましかげ』

と云へり、然らば花は無常を教ふるか、或は永久の春の望みを教ふるか、釋迦の拈華微笑は何を意味せるか、愚昧なる佛徒等は、無常觀の説明を爲すべしと雖もこれ狹隘なる見識のみ、花の命を達觀せば『去年の春散りにし花は咲きにけり』との感なき能はず、花散らば種は益々其種族を繁榮ならしめ、其生命をして空間的に又時間的に擴大す、花は無常を教ふるに由りて、極めて狹隘なる觀察の論にして、達觀論者は花に由りて永生を學ぶべきなり、佛者等が花に由りて無常を説くが如き、蓋淺薄少量の極まれるものなり。

芭蕉の俳句

余は俳諧なるもの、眞味を知らず、只芭蕉の全集を讀みしのみ、されども亦一種言ふ可からざる味あるを感じたり、其春の句に

『梅が香にのつと日の出る山路かな』

と云ふが如き、實に春立つ山路の情、言ふ可からざる愉快の趣あるを感ず、

『春風やきせるくはへて船頭殿』

風光見るが如し、

『山路きて何やらゆかしすみれ草』
人皆同じ思ひあるべし、

『雲雀より上に休ふ峠かな』

吾人又同一の経験あり、

夏の朝の海岸

『遠淺や夏の日の出の舟こゝろ』

水盞にして見まほしき心地せり、

秋の句に

『あの中に蒔繪かたしき窓の月』

まき繪を見るが如し、

熱田にて冬の句に

『海暮れて鴨の聲ほのかに白し』

観念の同伴も亦奇なり、此他『枯枝』『古池』『夏草』等は餘りに數々説明を聞きて、余の爲に感情を薄くしたり。

河畔の艦聲

挿秧いそがはしき頃なれば、舟の往來殊にしげし、田植ふに行かむとに

やあらむ、苗を満載せる扁舟の、へさきには五十歳ばかりの老夫烟草をふかし、ともに菅笠着たるもの艦をあやつる、赤き細帯しめたる姿の、女とは見えけるが、近く我舟のほとりを過ぎゆく時、始めて菅笠の下の顔を見たるに、農夫の娘にもかゝる人がと思はるゝばかり美しき少女也。清き目、白き頬、江山も俄に光彩を添へたる心地す。父をいたはりて、かよわき織手に、舟を漕ぐ心根殊勝にもあはれなり。舟漸く遠ざかりて、少女の顔は見えわかず、艦の音のみなつかしげに聞えぬ。

美感

慈善は美なるべし。博愛亦更に美なるべし。貧民の救済の爲に國家を亡ぼす、更に多く美なるべし。然れども美なるもの、必ずしも更に善ならざるなり。若し美感を規準として見れば、印度帝國或は一沙翁よりも英國にとりて貴かざるなり。米國の富と力とは或は自由戦争の血潮よりも願はしからざるなり。國家を滅し帝王を廢して、自由平等の原野となす、美なること幾何ぞ。更に亡國の殘墟に月夜感慨の詩人を現じて、其運命を歌はしむるは、煙突林立、汽笛耳を聳すする灰塵万丈の市街よりも、如何に遙に美なるべきぞ。

色彩

色彩の中に余は黄色を好まず。山吹の花、黄菊の色、さては黄金の色など、多少輕薄の氣あり。赤色は俗氣あり。紫色はいや味あり。青き色にこそ最も詩趣あれ。空の色、海の色、青葉の色、多少異なる所あれども、概して青色也。余が山間の夏の月を愛するは、畢竟するに、青色を愛するが故なり。

色彩の大觀は、日出日没の際の雲に盡きたり。而かもこれ都會の地に於て見るを得ず、高山の頂か海邊に於てせざるべからず。日光斜に雲を射、雲變動して、光彩陸離、到底人の手にては畫くべからざる自然の大丹青也。日光の美は雲と相待つ、亦宇宙間の一大美觀たらすべからず。

梅

梅に取るべきはその香、奇古なる其幹。花の色は白きを尙ぶ。あかきは俗なり。一園内に行儀正して列植するは折角の梅花を俗了す。竹外籬畔、臥龍の影を清淺の水に横へ、黄昏一片の月を添へて、暗香四野に浮動す。これ既に林和靖に言ひつくされたれど、梅花其境を得て始めて奇をあらはし、此境梅花を得てはじめて俗氣を脱す、梅園に多く短冊をつるす

は、風に似て却て俗なり。語を寄す、世の睡人墨客、花下茶をのみてまじめなる顔して詩を苦吟するは、これ其身未だ天地の美と融化せざるなり。冷かなる梅の花よりも、笑める櫻花の下に、無邪氣なる自然の兒にかへりて、人と同じく痛飲し、放歌し、酔臥せずや。梅の雪を冒して咲くいさましさにひきかへて、萎みながら枝に残れるは、年老いたる女の白粉を粧へたるか如し、厭ふべきなり。

春雨

春雨また春の一觀ならずんばならず。大空は霞むとも雨降るとも未だわかぬ間に、青柳の糸はや玉ぬきそむとは契沖の咏せし所、蓑き漕ぎ下す筏士にかすむ朝の雨を知るとは、千陰の歌に入りし所なり。ふるとも見えぬ雨に黄塵收り、俗客去りて天地自からしめやかなり。閑窓の下、靜に碁に對して一層の幽寂を感ず。

秋の哀

寂しきかな、秋の色や。澄み渡れる大空に、鳥は翼を收めて高く翔らす、蕭殺の氣は天地に充ちて、萬のもの其呼吸の痛みあるを覺ゆ。これ詩人の泣くべき時、哲學者の考ふべき時、宗教家の悟るべき時、志

士の義憤を洩らすべき時、すべて人が自己の濁情をそゞぎて、自然の洗禮を受くべき時。

秋は哀れみあり。されど亦大なる慰藉と教訓とあり。

飲酒

人は口に飲む也、われは心に飲む也。即ち胸中の磊塊にそゞぐ也。酒は半酔とは何ものゝたわけものゝ言ひそめたる言葉ぞ、酒の害毒を流すは半酔間の事也。全く酔ひ盡せば迷信なく、野心なく、默然なく、人なく、己れなく、情酒の中に没し、天地われと合す。草を枕として雲をふすまとすれば、流水樂を奏し、青山我夢をまもる、人間この處即ち仙境か、天國か、迷へるか悟れるか、情あるか酒あるか、樂しきか苦しきか、煩悶するか慰藉する所あるか、我あるか、我なきか、われ自ら辯ずる能はず。

厄介華族

華族の禮遇停止、續々として現れる。驚くことをやめよ。貴族院は宗教法案の試石に遇ひて、既に其腐敗を證據立てたるにあらずや。貴族を如何に處分すべきかは儘に刻下の一緊急問題なり。

大學生の不品行

大學生の不品行は誠に慨すべきも、教授先輩の中に、通人粹士あることは、更に大に慨すべきにあらずや。待合の奥座敷に警吏の誰何に辱められたる博士教授の如き貴族に重し。

支那思想

孔丘曰く、禹は吾れ間然する無し。飲食を非して孝を鬼神祖先に致し、衣服を惡にして、美を蔽冕に致し、宮室を卑うして力を溝洫に盡す、禹は吾れ間然する無しと。吾人は是言の支那思想の精神を表明するに於て亦間然する無きを認む。社會の上層より、下層に至るまで、是の如き精神によりて浸潤せられたる國土に、自由なる美術文學の發展し得べき謂れなきなり。

死學者

古にありては學は氣を養ふにあり、今の人一度び儒衣を服すれば、反て奄々として將に絶せむとす、是れ何の象ぞや。人の爲に學あり、學の爲に人あるに非ざるなり、專念學に力む、名は則ち嘉すべしと雖も、而かも躡て人世の目的を没却するあらば、是の如き

の學はた是れ何爲るものぞ。吝嗇にして錢を是れ蓄ふるもの、人は是を守
 錢奴と呼ぶ、錢なるもの素と人の爲に存す、人錢の爲に存するに非され
 ばなり、苟も人世に益なくむば陶朱の富は半錢の功なし。然らば則ち、
 何ぞ守錢奴を罵りたる所以を以て夫の死學者を罵らざるや。

自信力

韓非子、『初見參』に於て言ひて曰く『臣聞く知らずして言ふは不智なり、
 知りて言はざるは不忠なり、人臣となりて不忠ならば、死すべく言うて
 當らざるも亦死すべし』と、而し自己の信する所を奉王に陳べて、其終
 りに當りて曰く『臣の説く所當らざれば臣を斬りて以て國に徇へ、以て
 王の爲めに謀りて不忠なるものとせよ』と、其自己を信する所實に確乎
 たり、今日の言者論客、果して此くの如き大確信を以て事を論議するも
 のあるや否や、嗚呼滔々たる天下、淺薄なる頭腦を以て、徒らに口辯を
 弄し、文筆を動かし、是非をなす、畢竟何の益する所ぞ。

儒教主義

支那の命、數々革ると雖も其主義は儒教にあり、儒教は孔子に至りて大
 成すと雖も、其仰ぐ所は堯舜にあり、舜帝位に登りて曰く『食なるかな』

『黎民饑に阻あり、汝后稷時の百穀を播け』、『契、百姓親まず五品遂は
 ず汝司徒となりて敬みて五教を敷け、寛に在れ』、『夔、汝に典樂を命ず、
 胄子を教へよ、直にして温、寛にして栗、剛にして虐するなく、簡にし
 て傲る勿れ』と、堯舜に次ぎて禹、湯、文武、周、孔に至り、道德的國
 家なるもの、理想は成れり、孔子は、政治を謂うて『明德を天下に明か
 にするにあり』となせり、然りと雖も時に秦の如き專制的法治主義の時代
 なきにしも非ず、されども支那の歴史全體に於ては、支那の國家は儒教
 主義たるなり。

日本武士の特質

日本武士の特質なほ頗る多けれども、余をして暫らくこゝに歸納せしめ
 よ。忠君の念厚く、君の爲めに萬死且つ辭せず、死を視ると歸るが如く、
 勇氣世にすぐれ、武士の牀面をけがさるゝ時は切腹して之を雪ぎ、名譽
 を重んじ、祖先を崇拜し、淡泊質素にして利慾を貪らず、よく廉耻を解
 し、復讐の念に富み、而かも心事優美可憐にして殘忍酷薄ならず、俠骨
 稜々として、弱を扶け、強を挫き、善にくみし悪を憎み、襟度瀟洒、優
 に閑日月あり、潔癖にして、正義正理を尊んで、信義かたく、然諾を重

入するが如き諸徳をあげせ備へたる日本武士は、國家の干城として毫も間然する所なきにあらずや。

教育家の風采

一教員、某中學校に聘せられ、はるる旅し行きて校長に面會す。校長其の人を熟視して曰く、君の風采、倫理を教ふるに適せず、採用し難しと。これ一場の戯談の如く聞ゆれども、實際ありたる話也。それも不品行の結果鼻缺けなどして居らば、倫理を教ふるに適せざるべけれども、生れつきの少しばかりの不具、決して教員の資格を缺くものに非ず。嗚呼教員を採用するに、人物を問はずして學問を問ひ、學問を問はずして容貌を問ふ。教員を藝妓の類と心得たるにや。

神道

神道の稍々觀るべきは神宮教と大社教なり。然るに神宮教の舊管長十餘萬圓の混雜のため責を負ひて退けり、而して備は此處に作られぬ、目下果して毫も議すべき者なきや否や、望むらくは、事の未だ甚だしきに至らざるに當て深く戒慎あらんことを、破綻は意外の處より生ずる者なるぞ。大社教は疑ふべき者少からざれど、先づ其不幸とすべきは千家氏の

小才子なる事なり、男爵となり、知事と爲る、如才なきに相違あらざるにせよ、斯くては石坂昌孝氏と何の擇ぶ所もなし、若し夫れ才の才を以て専ら教法に従事し、神道家を操縦したらば、大社教の面目決して今日の如きに止まらじ、急いで男爵たらざりしならば、家系は豊葦原に於て皇室より舊く、即ち歴史上公爵となりて差支なき者、大谷氏が伯爵たる時に、少くも伯爵たるを得たるべきに、此を之れ察せざりしとは、才ありて才に負けしもの、取りも直さず小才子の處なり、而して出雲の大社は爲に輕重を知られぬ。

悲劇

古より豪邁卓犖の士、動もすれば世事の倖々に甘ずる能はず、眇々の軀を起して、一代の風雲に背馳し、赤手以て洄瀾を蹴倒せんとす。世を亂り人を苦しめ、天に背き命を悟らず、傲然として古今を睥睨するや、意氣虹の如く、風稜鐵に似たり。一朝榮枯、處を代へ、非運潮の如く其身に迫るや、殘骸力盡き、孤劍再び振ひ難し。青雲の榮華長く去りて、敗餘の意氣而も少しも衰へず、昂然天地に俯仰し、從容自若、笑つて運命の犠牲に就く。何ぞ其精神の高邁にして、其心事の落々たるや、英雄の

未路誠に丈夫をして號泣せしむるに足る。而も予輩は斯の如き慘憺たる悲劇に接する毎に自ら顧みて悚然として畏るゝ所あり。吾人々生を支配する道義的制裁は遂に吾人が一毫の積累を容さず、千古千秋毅然として不拔なるものあるを見て、うたゝ人道の崇高無限にして個々人生の如何に憐れむべきかを痛覺せずはあらざるなり。

運命と人道

所謂、運命は何處に存するか、曰く人世を外にして、運命なるものあらざるなり。所謂、人道は吾人を支配するの運命なり。然らば即ち人道は何處に存するか、曰く人間を外にして別に人道なるもの有らざるなり。所謂、性格は吾人の胸裏に存する人道なり。是故に人間のある所、即亦運命なかるべからざるなり。

新聞記者

彼等新聞記者の論議する所を見れば、徃々其説や高く、其筆や壯、或は一世の豪傑を見撫して、眼識古今に曠く、或は天下の廣議を唱へて、名利を視る土芥の如し。其言ふ所を聽けば、皆曰く、我輩は主義によりて立ち、正理に依て動く。遠く之を望めば風車卓犖。眞に一代の國士なり。

り。然れども裏面に入りて其人を見れば、多くは是れ職を江湖に求めて而して身を容るゝに所なく、偶文筆の才を挾みて茲に一時の生を寄するのみ。是に於てか、其行や往々にして屠沽穿窬、外天下の義を唱るも、内一人の責を盡す能はず、朋友之を捨て、知人之を去り、而して己れ獨り義を天下に行ふと稱す、是を以て知るもの皆其言を嗤笑す。今の新聞記者の中、是の如きもの決して少からざるなり。

タイムス

タイムスは發刊紙數多からず、而かも甚だ勢力あり、時事新報の將に榮えんとする權勢家に助力するはタイムスに擬するに似たり。其發刊紙數の多からずして而して或種族の意を迎へ時に之を指導する程の力あるも稍々似たりとせん、たゞタイムスの勢力は未だ容易に企及すべくはあらず、其の尙汲々として、他の輕佻に倣ふが如き、それ何ても彼でも頒布を第一とするか。

巢林子の戯曲

我巢林子の戯曲を讀む毎に、其心容の如何に大に、其同情の如何に博きかを想見せずんばあらず。須彌梅檀の山の月に、色即是空を觀ぜし三界

の教主を想ふの心は、即ち相の山の辻歌に、花一時を唱ふの心なり。櫻非驛の訣別に、忠孝の義烈に感じたる涙は、即ち蜷川の夕風に、まじならぬ戀路を忍ぶの涙なり。吉野初瀬の名木も、畦の小路の名もなき花も、共に等しく彼を喜ばせしなり。都大路に青海の籬を捲き上げて、月前に彈琴する深宮の上臈も、埴生の小屋に立かねる煙に咽ぶ、いふせき賤の柚男も、共に等しく彼を感じしめたり。彼は狹隘なる人爲の階級によりて、人間に城壘を築き、若くは自が特殊の嗜好によりて他を規するが如き種類の人にあらざりき。彼は大沙翁に似て、廓大なる胸襟を披き、自由なる精神を以て、万象に接する人なりき。眞に戯曲家の旨を得たりといふべし。

政治家の品性

人は其事業に於てのみならず、亦其品性に於ても大なるを得べし。是二者を兼ね備ふるものを大いなる人物と云ふ。グラッドストーン氏は、ハリーデン寺院の門丁の病を訪ひ、爲に聖書を讀みたりき、彼は是心を以て天下の事に當りたり、其七十年間の政治的生活に於て、一人の私敵を有せざる眞に洩ある也。

世には所謂功利の外にも道ある也。所謂階級の外にも人ある也。官邸の玄關に私生兒を置去りにせられたる國務大臣も怪まざる國民は、未だ大いなる人物を解せざる也。

紳士録

坊間に『紳士録』と題する一書あり、其收むる所高利貸あり、博徒の親方あり、然れども是豈所謂紳士と稱すべきものならむや。紳士は士也、君子也、品性德行に於て群氓の師表となるべき者也、夫の苟も所得税を納むるもの即ち目するに紳士を以てす、偶々國民の拜金根性を暴露し來る、是れ事少なりと雖も明に國民道德の危機を示す者に非ずや。

愛の極致

愛の靈火一たび發するや、過去もなく未來もなく、利害もなく是非もなく。若し捨つべくんば富をも捨てん、名をも捨てん、尊卑なく賢愚なく、天地の間、唯相愛し相慕ふのみ。忠兵衛の梅川に於ける、お夏の清十郎に於ける、徳兵衛のお初に於ける、皆此の情致にして、又、フロイツェルが干孫の富と尊とを以て、甘じてウルサタが愛の犠牲となり、イモル

カンがポストヒロイマスと共に寧ろ牧人の子女にてあらんことを望みたるの心なり。此境地にありては愛は自己の外はあらゆる物を抽象す。其前には法律なく社會なく、己れ其唯一の智識、唯一の目的、又唯一の光明なり。世界は唯此目的を助け、此光明に照されたる限にて、彼に對して其存在を有するのみ。

一旦唯心の夢覺めて、社會と自我との衝突を感じたるの曉にありては、吾れ社會を仆す能はざれば、只一の死あるのみ。是を以て百難潮の如く天を滔して掩ひ來るとも、少しも驚かず、諷詠歎嗟、從容として死に就く。此の如きは近松が戯曲に於ける幸福の愛の最後なり。

兩性の好尚

男は女の可愛らしきを愛し、我意を通すが最も快きとなればなり。女は男の強きを愛す、たよらざるべからざる身の上なれば也。てれつく優男よりも、喰ひつきそうな鬚男の色真黒なるが、却て色男なり。おぼ、娘はいざ知らず、少し世の中の酸いも甘いも嘗めた女は、みな然るべし。されど、自立するに足るべき立派なる腕前ある女にいたりては、男性の地位に立てる也、我意を通すが面白き也。どうしてもあんな意氣地なしの

男にと思はるゝやうなものをおもちやし、女のかよわき腕一本に六尺の大の男一匹を養ひて、自ら快とするなりとぞ。

泣癖

林子平、高山彦九郎を謂て渠れ泣癖あるのみとせり、彦九郎實に泣癖あり、而も其の泣くや洵に至誠に出づ、敬すべきなり。世間時に能く泣き、而して絶えて誠心なき者あり、詐偽師、奸商、探偵等に之れあり、演説遣ひ、巡廻官吏、事業發起の觸れ廻りに亦之あり、涙脆きは油斷のならぬ者なり。

體育

體育は何を以て目的とするか、疾病を豫防せしむるか、筋骨を發達せしむるか、特種の技術に長ずる所あらしむるか、從來の所謂體育なる者は多數を教導して而して僅に少數の技術者を輩出するもの、如く、體操に、疾走に、短艇競争に、ベースボールに、其他何々に、孰れも優秀の技術者を出し、而して多數の者に何の効果ありしかと問へば、彼等不熱心に致し方なしとの答を得るのみ、實に多數の者は義務にて運動場に出づるのみにて、運動會あるとて相撲にても觀る心持にて少數の技術者を是